

平成 30 年度

# 研修集録

45



秋田県立秋田南高等学校  
秋田県立秋田南高等学校中等部



## 「生きる力」

校長 佐 藤 利 正

「高い志をもち、ふるさとや世界に貢献するグローバルリーダーの育成」が、本校の重点教育目標です。グローバルリーダーとは、グローバル化社会の組織や地域の中で、ビジョンを示し、仲間と協働して課題を見極め解決する人、と本校では定義しています。そのような人材に必要な資質を、「基本的な知識・技能・習慣」「探究力」「協働力」と定め、次期学習指導要領や高大接続改革の動きも視野に入れながら、変化の激しい予測困難な社会で「生きる力」を育むことを目指してきました。

平成27年にSGH指定を受けてから4年となります。また、平成28年に中等部を併設してから3年となり、本年度は6学年がそろい、中高一貫教育校としての体制が整いました。次年度からは、その真価が問われる3年間となります。本年度の生徒の様子から、本校の将来に大いなる希望を感じています。

10月26日に、SGHカンファレンスがありました。午前の公開授業や午後の国際探研究成果発表に対して、参観していただいた校外の方々から、大変高い評価をいただきました。その週明けに、他県のある高校の校長先生から次のような電話をいただきました。「参観した教員が、『秋田南高校の取り組みが素晴らしい。授業も成果発表も、東北の学校とは思えないような感動の連続だった。』と報告に来ました。」カンファレンス当日の感動が、さらに増幅したありがたい電話でした。

1月24日には、中等部3年生のクリエイティブサイエンス発表会がありました。クリエイティブサイエンスは本校学校設定教科であり、生徒も指導する職員も初めての経験です。当日は、中等部1・2年生や保護者に加えて、進路の確定した高校3年生40名も参観し、発表に対して様々な質問をすることで探究を深めてもらいました。その高3生の感想コメントは、「中3とは思えない内容であった」「将来が楽しみだ」と、一様に驚きの言葉で埋め尽くされていました。私も、全く同じ感想を持ちました。

「生きる力」が確実に身についていると思われるこのような生徒の活躍に接して、「盆栽づくりは、もうやめたほうがいいのでは」というぼんやりとした気持ちが、確信に変わりました。教師の手の届く鉢の中で、見栄えの良い木を育てることはやめて、鉢の中の木を原野に移植し、何度か水をかけてやれば、木は自らの力で生き、人々に安らぎと希望を与える大樹となる、という確信です。SGHやクリエイティブサイエンスの探究活動は、「移植」そのものである、と確信しています。

変化の激しい社会は、教師にも「生きる力」の再構築を求めています。様々な教育活動の中で、教師の「正解の無い問い」に対して、生徒自らが考え、仲間と協働して「最適解」を追求していく過程に寄り添っていくことで、教師としての「生きる力」も養われていくような気がします。「教える」力ではなく、「生徒と共に学ぶ」力こそが、これから教師の「生きる力」であると考えますが、いかがでしょうか。

## 目 次

卷頭言 「生きる力」	校長 佐藤 利正	1
<b>I. 研修総括</b>		
「平成30年度 本校における授業改善の取り組み」	齊藤 雅子	4
<b>II. 授業研修</b>		
「秋田南SGHカンファレンス2018」公開授業研究会		
国語科(高)	伊藤 史	10
社会科(中)	門間 裕之	15
数学科(高)	中村 東	22
理科(高)	平田 哲久	28
外国語科(中)	吉澤 孝幸	34
外国語科(高)	伊藤 孝絃	39
J.E. Communication(中)	志田 裕子	44
	杉山 芙美子	
平成30年度秋田県教育庁中央教育事務所学校訪問		
保健体育科	鎌田 拓也	49
外國語科	大門 愛 金 敬子 Emily Mabry	56
道徳	中山 つづか	61
クリエイティブサイエンス「新規実施上の工夫と事後検証」	工藤 薫	65
授業アンケート結果分析		68
大学入学共通テストに向けて		73
<b>III. 校内研修</b>		118
<b>IV. 研修講座等受講報告</b>		
新規採用栄養教諭研修	大門 愛	126
高等学校教職5年経験者研修	金森 康臣	127
高等学校実践的指導力向上研修	伊藤 孝絃 松田 達也	132
<b>V. 校外研修</b>		
平成30年度教員派遣スキルアップ研修	中村 東 平田 哲久 伊藤 孝絃	134 137
全国連第51回研究大会秋田大会実践発表報告	伊藤 史	140
第71回全国造形教育研究大会秋田大会実践発表報告	深井 裕之	147
<b>VI. 平成27～31年度文部科学省指定スーパーグローバルハイスクール事業</b>		
「秋田南SGHカンファレンス2018」について	関 友明	150
国際探究Ⅱ「公開成果発表会」	林 克至	154
国際探究Ⅰ「今年度の修正点と事後検証」	戸坂 圭子	158
国際探究Ⅱ「今年度の修正点と事後検証」	林 克至	159
グローバル・イシュー「今年度の修正点と事後検証」	深沢 志保	160
編集後記		161

# I. 研修総括

# 平成30年度 本校における授業改善の取り組み

探究部教育研究班主任 教諭 齊 藤 雅 子

## 1 はじめに

今年度は、本校のSGH指定4年目にあたり、構想上でも、全国に向けての公開授業研究会が計画されていた年度であった。SGHの研究開発の一環として本校が行っている「問題解決力育成授業研究」については、その一部を一昨年度に公開しているが、成果の検証とともに課題も明らかになり、学校を取り巻く状況も刻々と変わってきた。まず 2021 年度入試から始まる大学入学共通テストについて、その理念は以前から示されていたが、平成 29 年 11 月と平成 30 年 2 月に試行調査(プレテスト)が行われ、より具体的な方向性が見えてきた。また平成 30 年 3 月には 2022 年度から実施される新しい学習指導要領が告示され、改訂の目的、教科目の見直しや再編成、学習・指導方法の改善の方針など、その全容が明らかになったところである。そして平成 31 年 4 月には、本校中等部の一期生を高校に迎え、教育界の動向に対応しながら学校づくりに取り組んでいかなければならない。

このような高等学校教育を取り巻く大きな変化は、文部科学省が推進する「高大接続改革」が背景となっている。この改革は、高等学校教育改革・大学入学者選抜改革・大学教育改革を通じて「学力の3要素」を確実に育成・評価すること、さらなる伸長を図ることを目的とした改革であり、本校のような進学校では特に高等学校教育改革と大学入学者選抜改革への対応が急務であると考えている。そこで今年度の「秋田南SGHカンファレンス 2018」公開授業研究会及び本校高校の研究主題として、

### 高大接続を展望した「主体的・対話的で深い学び」の実践

～確かな知識・技能を活かした思考力、判断力、表現力を育成するために～

を掲げて授業改善に取り組んだ。また中等部の研究主題は高校への接続を念頭に置いて、

### 多様な価値観にふれ、自分の考え方や思いを他者と磨き合って発信する生徒の育成

～協働的な学習を通して、学びを深める授業づくり～

と設定した。

## 2 研究主題について

SGH事業で示されている、グローバルリーダーが身に付けるべき国際的な素養とは、社会が抱える諸課題への関心や深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等である。本校で育成を目指す「グローバルリーダー」は、このことを踏まえ、「世界と郷土に見いだした問題を、グローバルな視点で見つめ直し、それらを論理的に考察し、解決策を考えるとともに、社会に向けて発信や提言をしていく人間」と捉えている。そして、そのようなグローバルリーダーには、基本的知識・技能・習慣、探究力、協働力の3つの資質が求められ、具体的には課題設定能力、課題探究能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力、実践力の5つの能力を鍛える必要があると考えている。そしてこれらの資質・能力の育成に向けて、生徒の探究的な学習である課題研究と、問題解決力を育成するための授業研究・カリキュラム開発を行ってきたところである。

このうち、生徒の課題研究についてであるが、平成 30 年 3 月、初めて課題研究に3年間通して取り

組んだ、最初の学年の生徒たちが卒業した。生徒も教員も試行錯誤を繰り返した3年間だったが、国内外の大学・高校や研究機関・企業等の皆様方から多大なるご協力をいただき、SGH甲子園での最優秀賞受賞、世界大会での最高賞受賞という結果を残すことができた。また進路においても、海外の大学を直接受験して合格する生徒を2名出すことができた。何より、生徒たち自身が主体性や行動力、表現力、コミュニケーション力の面で、自分は成長できたと実感していたようである。職員から見ても、生徒たちの変容ぶりには目を見張るものがあり、課題研究活動がグローバルリーダーの育成にとって有効であるという共通認識が、学校内で醸成されてきたと考えている。

次に、公開研究授業の研究主題について説明する。本校は生徒の9割以上が大学進学を希望する進学校であり、現在、文部科学省が推進している高大接続改革への対応が急務であると考えている。この改革は、高等学校教育改革・大学教育改革・大学入学者選抜改革を通じて、「学力の3要素」を確実に育成・評価すること、さらなる伸長を図ることを、目的としている。

ここでいう「学力の3要素」とは、2014年12月に中教審が示した答申によると、

①基礎となる知識・技能を習得させること。

②知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な、思考力・判断力・表現力等の能力を育むこと。

③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を養うこと。

と定義されており、新学習指導要領の総則にも「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」として盛り込まれている。そしてこれらの学力を、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った、授業改善によって育成することを目指している。

このような高等学校教育改革を促すため、大学入試改革もまた、学力の3要素を多面的・総合的に評価する方法が検討されている。特に大学入学共通テストについては、昨年度11月と2月に試行調査が行われ、より具体的な方向性が見えてきた。例を挙げると、世界史では長文の資料を最後まで読み通さないと正誤が判別できない形式や、複数の資料を関連づけて考察しなければならない形式など、正確で素早い情報処理能力や複雑な思考・判断が求められる内容が見られた。そのような問題に対応するため、大学進学希望者が多い高校では、基本的な知識や技能を活用した思考力・判断力・表現力を育成できる授業、「主体的・対話的で深い学び」の視点にたった授業への転換を、一層迫られることになるのだと実感したところである。

このような改革に対応するヒントはSGH事業の中に詰まっている。我々がグローバルリーダーに求められる資質・能力として捉えた3資質や5能力は、高大接続改革で育成したい学力・能力と同じ方向を目指していると考えられるからである。

したがって、3資質や5能力を育成するために行ってきた、本校の授業改善への取り組みは、今後さらに加速する高大接続改革への対応として十分に有効なものであると考えている。

以上の理由から、SGH指定による研究開発で培われた成果を、指定期間終了後も本校の教育活動に定着させ、今後の諸課題に対応していくことを趣旨として、研究主題を設定した。

### 3 授業改善の取り組み

#### (1) 高大接続改革職員研修会

7月15日放課後、株式会社ベネッセコーポレーション東北支社から講師を招聘して、高大接続改革に関する研修を実施した。研修の目的は10月の公開授業研究会に向け、大学入学共通テスト試行問題の分析をもとに、高大接続改革で求められる学力やそれを身に付けるための授業づくりについてヒントを得ることである。また今年度、授業改善の一環として高校が取り組んでいる、「大学入学共通テストを念頭に置いた考查問題の作成」の参考になることも期待して実施した。

講義では、まず始めに高大接続改革に向けて学校を改革していくために、学校教育目標を意識して各段階(生徒・クラス・学年・授業など)でのPDCAサイクルを回してつなげていくことの重要性につ

いて説明があった。次に昨年度実施された「大学入学共通テスト」試行調査をもとに、各教科で今後求められるであろう能力についての分析が示された。その特徴は次のとおりである。

- ①全教科において「社会とのかかわり」や「探究活動」を意識した出題が増加している。
- ②全体的に問題文の分量が増加傾向にある。
- ③「複数の資料」を読み取り、情報を統合・考察する力を重視している。

あくまで試行調査段階の傾向ではあるが、高大接続改革の理念から考えると、この方向性が大きく変わることはないと思われる。今後の授業改善、考查問題の改善に向けて手がかりとなる内容であった。また最後に思考力・判断力・表現力を育成する他校での先進的実践例が紹介され、具体的な改善に向けてのイメージを得ることができた。

## (2) 「秋田南SGHカンファレンス2018」公開授業研究会

10月26日に、「秋田南SGHカンファレンス2018」と称して、午前に公開授業研究会、午後に生徒の「国際探究Ⅱ」公開成果発表会を開催した。

公開授業研究会における教科・授業者等は次のとおりである。

校種	教科・科目	授業者	学年・組	単元名
中	J.E. Communication	志田 裕子 杉山 芙美子	1年3組	めざせ！スピーチの達人！！
高	国語総合 (現代文)	伊藤 史	1年C組	情報と主体的に関わり、論理的に批評する ～秋田の観光に関する考察と提言～
中	社会	門間 裕之	1年1組	世界の諸地域～南アメリカ～
高	数学Ⅰ	中村 東	1年B組	空間図形への応用
高	生物基礎	平田 哲久	1年D組	神経とホルモンによる調節の仕組み
中	外国語 (英語)	吉澤 孝幸	3年1組	Unit 6 「Striving for a Better World」
高	コミュニケーション英語Ⅰ	伊藤 孝紘	1年F組	Lesson 6 The Story of PlayPumps

「高大接続改革職員研修会」と前後して、10月の公開授業研究会に向け、各教科で次のようなスケジュールで準備に取り組んだ。

### ①公開授業の概要について検討（7～8月）

学習指導案考案の前に、想定している授業が研究主題に即しているかどうか、次の観点で検討した。

- ア 授業の中で、高大接続を意識している部分はどこか？
- イ 単元でどのような思考力・判断力・表現力を育成したいか？
- ウ 単元を指導する上で工夫や留意点は何か？
- エ 大まかな生徒の学習活動や評価規準、評価方法をどうするか？

教科で検討した後の授業原案について、中・高管理職と授業者とでさらに意見を交わしてから、授業者に指導案作成の段階に進んでもらった。

### ②学習指導案について検討（8月～10月）

授業者が作成した学習指導案について、当該教科の中・高教員全員で内容を検討し、改良を重ねた。また指導案の方向性に沿ったりハーサル授業を行い、科内の教員が参観し、意見交換や助言をし合うことでさらに練り上げた。

実際の学習指導案と公開授業研究会教科協議会の記録については後掲する。

### (3) 中央教育事務所計画訪問（中等部）

今年度の中央教育事務所計画訪問は9月25日に実施され、午前中に一般授業参観及び特定授業参観、午後に分科会及び全体会を行った。一般授業、特定授業とも、今年度の研究主題に基づいていることはもちろんだが、さらに共通実践事項への具体的取り組みが見える授業ということを目指した。なお今年度の中等部共通実践事項は次のとおりである。

- ①学習のねらいや課題の明確化を図り、学習を振り返る活動を設定する。
- ②他者との関わりを通して、協働的に問題を解決する活動の充実。
- ③自他の意見や考え方の比較・検討を行うことで出た新たな考えを積極的に伝え合う活動の充実。

特定授業は本校の高校教員も参観し、職員研修の一環とさせてもらった。特定授業の学習指導案及び分科会の記録については後掲する。全体会では沼倉友和指導主事から研究推進に向けて次のような講評がなされた。

- ・主体的な学びの姿とは、子どもが、学んだことで成長できた、もっと学んで成長しよう、と背伸びしている姿である。学びの質を高めるために、各教職員による取り組みの充実と学校全体による取り組みの活性化を図り、誰かができるこを、みんなができるようにしてほしい。
- ・伝え合う活動について、活動ありきになっていないか。言語活動をするのが目的ではなく、ねらいを達成するための手段である。教える場面、考えさせる場面、考えを深めさせる場面を意図的に設定して、単元全体で主体的・対話的で深い学びの実現を図ってほしい。

### (4) 授業アンケート（中・高）、大学入学共通テストを見据えた考查問題の作問（高校） 授業改善の一環として、上記についても取り組んだ。詳細については後掲する。

## 4 成果と課題

4年間にわたり、本校はグローバルリーダーに不可欠な5つの能力（課題設定能力、課題探究能力、論理的思考力、プレゼンテーション能力、実践力）の育成を目指す、授業改善に取り組んできた。その間に示された、新学習指導要領の詳細や高大接続改革で高校生に求められる具体的な能力を見ていくと、本校が目指す授業改善の方向性と一致していることがわかる。今年度の公開授業研究会では、そのような4年間の取り組みで見えてきた「主体的・対話的で深い学び」の姿を、同一の研究主題を踏まえながら、各科目の特性に応じた形で提示することができた。またそこに至るまでの、教材研究、相互授業参観、指導案検討なども教科や教員全体で情報共有を図る上で有効であった。

次年度以降の課題としては、次の三点が挙げられる。一つ目は授業改善の検証と授業研究成果の普及である。次年度はSGH指定の最終年度にあたり、本校が取り組んできた、グローバルリーダーに必要な5能力を伸ばす「問題解決力育成授業研究」の成果をまとめ、校外に発信していくなければならない。それに向け、今年度の公開授業研究会も含めたこれまでの取り組みについて今一度検証し、5能力を伸ばす本校独自の具体的な指導モデルをまとめていく予定である。また、指導モデルの普及手段として冊子等の作成・配付による校外への発信も計画中である。

二つ目は授業改善に向けた研究の継続である。SGHの指定は終わっても、高大接続改革及び大学入学共通テスト、新学習指導要領への対応はさらに加速して進めていかなければならない。指導に用いる教材の工夫、指導の成果をはかる考查問題の工夫、さらには探究的な学習活動の評価方法の研究などについて、研鑽を積む必要がある。専門家を招聘しての職員研修会など、学校としても積極的に機会を設けていきたい。

三つ目は、授業改善に資する他校教員との交流の機会を設けることである。他校の研究授業に本

校の職員が参加しやすいような環境作りを考えるとともに、他校の先生方にも本校に来ていただきて、授業改善について意見交換ができるような場を設けられないか、検討していきたい。もともと本校は、原則として毎年、全教科が校内研究授業を取り組むことになっている。この研究授業をできるだけ同日に実施し、外部にも公開するような工夫は可能だと思われる。今年度のような大がかりな公開授業でなくても、本校の取り組みを外部に発信する一つの手段として考えていきたい。

#### 【秋田南SGHカンファレンス2018 公開授業研究会の様子】



全体会での校長挨拶



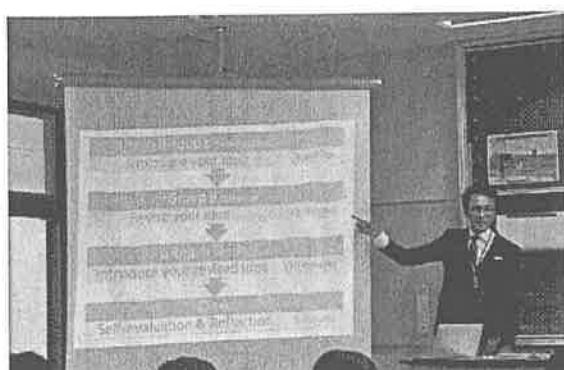
研究概要説明



iPadとホワイトボードで考えを可視化（数学）



ポスターで発表（J. E. Communication）



プロジェクターで授業の流れを提示（英語）



分科協議会（国語）

## II. 授業研修

# 高等学校国語科 国語総合 学習指導案

学級 1年C組40名  
場所 1年C組教室  
授業者 伊藤 史

1 単元名 情報と主体的に関わり、論理的に批評する～秋田の観光に関する考察と提言～

## 2 単元の目標

- (1) 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえた  
りしようとしている。  
【関心・意欲・態度】
- (2) 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえた  
りすることができる。  
【読む能力】（「C読むこと」の(1)のエ）
- (3) 連続的テキストと非連続的テキストを関連づけて読む方法を理解することができる。  
【知識・理解】

## 3 取り上げる教材

教 材：秋田の観光に関する資料

（新聞・パンフレット・ウェブサイト等からの記事抜粋と各種統計資料）

## 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

情報の内容について吟味し、論理的に批評する力

## 5 評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえた りしようとしている。	文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえた りすることができる。	連続的テキストと非連続的テキストを関連づけて読む方法を理 解している。

## 6 生徒と単元

### (1) 《生徒の実態》

授業を通して獲得した知識や情報を受容して納得、感心はするが、物事を批評し、自ら課題を発見してより深く考察するには至っていない。次期学習指導要領や大学入学共通テストの導入を視野に入れ、情報の妥当性を吟味し、対話を通じて論理的に批評する力を付けさせたいと考えている。

### (2) 《本単元（教材）について》

本単元では、今日的な課題をはらむテーマを設定する。異なるメディアから引用した複数の情報の妥当性を吟味することにより、情報がどのような意図をもって用いられているかを考察する。また、情報を取捨選択したり総合したりすることにより、適切な批判を加えながら考察を深めることができ期待できる。更に、自分たちの問題として新たな課題を発見したり、他教科の学習活動に結び付けたりする広がりも企図している。

(3) 《(1) (2) を受けた、本単元の指導について》

教師が資料の読み取り方などを適宜助言した上で、それを活用した個人レベルで資料の読解に挑戦する。個々の読解についてグループで意見を交換することにより、新たなものの見方や考え方を共有し、考察を深める。

7 全体計画（総時数3時間）

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 (1 時限)	・課題に応じて情報を読み取り、対話を通してものの見方、考え方を深めようとすることができる。	・課題に応じて複数の資料から必要な情報を個で読み取る。 ・読み取った情報について、グループで交流し合う。	・データの基本的な読み方を確認する。 ・生徒の関心や疑問に対応できるよう、参考資料を準備する。 ・必要に応じて資料を紹介できるよう、実物投影機を準備する。	・連続的テキストと非連続的テキストを関連付けて読む方法を理解している。  【知識・理解】 ・グループで積極的に交流し、ものの見方、考え方を深めようとしている。 【関心・意欲・態度】 (活動の観察) (ワークシート点検)
2 (2 時限)	・情報を取捨選択してまとめたり、自分の考えをもって話し合ったりすることができる。 ・情報の内容について吟味したり、書き手の意図をとらえたりすることができる。	・複数の資料を個で読み比べて考察する。 ・情報の妥当性や書き手の意図について、グループで話し合う。	・生徒の気付きをうながすよう適宜助言する。 ・グループの交流内容をまとめる用紙（またはホワイトボード）を準備する。 ・必要に応じてワークシートを紹介できるよう、実物投影機を準備する。	・文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしようとしている。 【関心・意欲・態度】 ・文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすることができる。 【読む能力】 (活動の確認) (ワークシート確認)

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
3 (3時間)	・課題について自分の考えをまとめることができる。	・各グループの交流内容をクラスで共有する。 ・課題について自分の考えをまとめることができる。	・疑問や気付きを表出できるよう、質疑応答をうながす。 ・本単元の学習内容の振り返りを兼ねたまとめを書けるよう助言する。 ・必要に応じてワークシートを紹介できるよう、実物投影機を準備する。	・課題について、当事者意識をもって意見をまとめている。  【関心・意欲・態度】 ・本単元の学習内容を踏まえた文章をしている。  【読む能力】 (質疑応答の観察) (ワークシート分析)

## 8 本時の計画 (本時 2／3時間)

### (1) 本時の目標

情報について吟味したり、書き手の意図を捉えたりしたことについて、自分の考えをもって話し合うことができる。

【読む能力】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	1 本単元のテーマに関するニュースやトピックを挙げる。	全体	・積極的な発言をうながす。	
展開	2 本時の目標と学習の流れについて確認する。  3 学習課題に取り組む。  複数の資料を読み比べて考察する。  情報の妥当性や書き手の意図について、グループで話し合う。	全体  個  グループ	・明確に意識できるよう目標を掲示する。  ・意見と事実を分けて読むよう助言する。  ・メタ思考を用いて情報を考察できるよう助言する。  ・グループ交流における質疑応答をうながす。	・文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしようとしている。  【関心・意欲・態度】 ・文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすることができる。  【読む能力】 (活動の確認) (ワークシート確認)
まとめ	6 本時の学習を振り返り、次の学習について予告する。	全体	・本時の学習内容が、文章や資料の読解において汎用性をもつことをおさえる。	

## 9 分科協議会記録

日時：10月26日（金） 会場：1年B組教室（中等部 J. E. Communication と合同）

指導助言者：秋田県教育庁高校教育課 柏谷 浩樹 指導主事

### （1）本校における教科の目標

文章の内容や他者の考えを理解し、自分の考えを的確に伝える表現力を養うとともに、主体的に文章を読んで考え、課題を解決しようとする姿勢を育てる。また目的に応じ、図書館や多様なメディアから知識・情報を得て活用する力を養う。

### （2）本授業のねらい

複数の資料を用いた協働的な学習活動を通じ、「情報の内容について吟味し、論理的に批評する力」を養う。学習指導要領との関連では、「文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすることができる」「連続的テキストと非連続的テキストを関連付けて読む方法を理解することができる」ことを目指す。

### （3）授業者から

これまで本校ではNIEの授業実践で新聞記事の比べ読みやメディアからの情報の読み取りなど、中・高とも新聞や資料の分析の授業を研究実践してきた。今回は新指導要領の方向をふまえて「情報を相互に関連づける」ことをねらいに「読み取りの根拠はどこか」「関連はどうなるか」を考える授業を設定した。生徒が授業の後に「みんな同じキーワードにたどり着く」と言ったが、書き手の意図を捉えることができたと感じた。教材の選定に苦労したのが感想だ。今日は生徒がどんどん意見を出していて、自分で考えることに前向きに取り組んでいた。新しい動きへの対策には試行錯誤が続くが、実際に授業の中で、どのような活動でどのような力が育成できるか、実効性のある授業の組み立てについてご意見をいただきながら考えたい。

### （4）協議

協議題「情報と主体的に関わり、論理的に批評する力の育成を目指した授業の在り方について」

高木（大曲高）：授業の全体像、授業の在り方がしっかりと構築されている印象を受けた。情報の取捨選択をするなどの新しい取り組みと、従来の国語の授業とのつながりをどうするかが課題だと考えているが、先生は従来の授業との比重やバランスはどのようにしているのか。

伊藤（授業者）：特別な時間を設けて取り組むというより、本校では普段から方法を意識して読ませることで発展的な学習として取り入れている。教科書が今後どう変わるかわからぬいが「従来のものをどう読ませていくか」ということも課題だと考えている。

関口（男鹿海洋高）：生徒たちに「批評」という用語の定義はあるのか。

伊藤（授業者）：非難ではなく「妥当であるか」「どんな価値があるか」辞書的意味にも触れている。

関口（男鹿海洋高）：批評となれば、良い点・悪い点を指摘することになる。今回は「考察する」「提言する」という難しいことに取り組んでおり、問い合わせが吸収できていない生徒もいるかと思った。以前、「難しいテーマには、目標を易しく具体的に表現した方が到達しやすくなる」と助言を受けたが、今回なら「秋田の宣伝マンになる」「秋田を売り込もう」としてみると、考察と提言につながると思う。「ICT」の定義についても、説明があつても良かったかなと思った。

伊藤（授業者）：次時の授業でご指摘のあったところを生徒にフィードバックしたい。

関口（男鹿海洋高）：提言の指導については、この次にどのように持っていくつもりか。

伊藤（授業者）：ワークシートで資料との関わりを見たので、次は「資料の内容が妥当であるか」を吟味し、プラス「自分ならどうするか」と考えさせてていきたい。

成田（横手高）：生徒の発表をどのように扱うか、意見の共有の仕方についてお聞きしたい。

伊藤（授業者）：生徒の発言を板書したものに丸印をつけながら「同じになってきたよね」と確認して切り上げたいと考えていた。今日は生徒からその言葉が出てきたので良かったと思う。

中島（聖霊高）：目標の「論理的に」とは、書き手の意図を読み取ったうえで資料の作り方が妥当だったか考えさせることだと捉えてよいか。発表ではキーワードや矢印をつけて考えて表現していたのがよかったです、先生にとって期待したまとめ方だったのか、お聞きしたい。

伊藤（授業者）：「秋田犬、かわいいー」などの感覚的な読み方に対して、「なぜこれを載せたのか」「こういう考えに基づいて」など根拠をもって捉えることを「論理的に」とした。今日は各班から次々と発表させたが、次時では集約して出し、共通した理解・意識を持っていきたい。

佐々木（岩手・水沢高）：教科書との兼ね合いの落としどころはどうしているか。進学向けの勉強もさせねばならない中で、こうした単元の学習の割合はどうなっているのか。

伊藤（授業者）：教科書の単元ごとに毎回できるわけではないが、考查・テスト等でも工夫した発展的な作問を取り入れている。だがやはり「教科書教材を使っていかに指導していくか」が課題だと考える。学校・教科の中で教材開発を共有できるようにしていくことも必要だ。

樽田（秋田南高）：他の学年でも資料の読み取りには取り組んでいる。今回のような資料・グラフの読み取りの指導は、本校の国語科では普段でも折にふれてやっていることであり、受験指導と遠く隔たつものではないという意識で取り組んでいる。

大渕（秋田南高中）：従来型のテキストの読み取りとの関連が今、話題になっているが、非連續型テキストの読み取りはPISA型の問題でも取り上げられており、やはりこうした読解はやっていかねばならないと考える。「なぜか」と理由を考えることで作成者の意図が見えてくる。中2の『走れメロス』も表現方法の吟味によって作者の意図が見えてくるのであり、作者の意図を捉える、批評・分析的に「クリティカルに読む」ということになると見える。

黒丸（横手清陵中）：中高の連携をどのように取っているか、お聞きしたい。

大渕（秋田南高中）：中学生にとっては目の前に高校生がいて、自分たちが目指す姿を日常的に見ている。「ここまでになるんだ」という、その下地を作るという目線で指導ができる。

伊藤（授業者）：中学生が何をどこまでやっているかがわかれば「では、ここから先は何をどう教えるか」が見えてくるはずだ。互いの学びの姿を「知る」ということが、中・高それぞれの指導に生きてくると考えている。

## （5）指導助言

本日の授業に対して四点申し上げたい。一つ目は、今回の授業は新学習指導要領を意識したものであったということだ。新指導要領の科目「現代の国語」「論理国語」では、知識理解事項として、「主張一情報」「情報一情報」の関連についての資料の読み取りが入ってくる。今回は今後の国語科の指導について考える提案性に富んだ授業であった。二つ目は、教科横断的な汎用性のある内容であったことだ。新指導要領が取り入れる探究学習の整理・分析と表現・まとめというプロセスに焦点をあてており、カリキュラムマネジメントに直結したものであった。課題としては、高1生が扱うには情報量が多いところもあったので、発達段階に応じて与える情報を焦点化するかなどの検討が欲しい。三点目は、社会で求められる力に直結した授業であったことだ。生徒たちは、観光者と情報発信者の両方の視点で情報処理をし、社会へ目を向けて考えることができた。四点目は、意図の明確な中高接続の指導がなされていたということだ。中等部の授業ではスピーチ練習によって「話す・聞く」のスキルアップが図られ、高校の「読む・分析する」活動と今後の「書く・創る」活動によって、総合的にプレゼン力の育成がなされる。SGHが目指す「グローバルリーダーの育成」という中高一貫教育校としてのカリキュラムマネジメントを実践した点を評価する。本日はお疲れさまでした。

# 中等部社会科 学習指導案

学級 1年1組27名  
場所 1年1組教室  
授業者 門間裕之

## 1 単元名 世界の諸地域～南アメリカ州～

### 2 単元の目標

- (1) 南アメリカ州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる主題を基に地域的特色を理解し、  
その知識を身に付けている。 【知識及び技能】 (B (2) ⑤ア (1))
- (2) 南アメリカ州の地域的特色を、州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる主題を基に多  
面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。 【思考力、判断力、表現力等】 (B (2) ⑤イ (7))
- (3) 南アメリカ州の地域的特色に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、とらえようとしてい  
る。 【学びに向かう力、人間性等】

### 3 取り上げる教材

教材：「1年間に消失した森林面積」(Forest Partnership Platform のホームページ)他

### 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

地域で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付きなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する力。

### 5 評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
南アメリカ州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる主題を基に地域的特色を理解し、その知識を身に付けている。	南アメリカ州の地域的特色を、州に暮らす人々の生活の様子を的確に把握できる主題を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	南アメリカ州の地域的特色に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。

### 6 生徒と単元

#### (1) 《生徒の実態》

入学後の聞き取りで約8割の生徒が「地理より歴史の方が好き」と答えている。アンケートでは、約半数の生徒が「南アメリカについて関心がない。分からない。」と答えている。南アメリカ州のイメージについては、「熱帯」や「アンデス山脈」など中学入学後に学習した内容に関する語句が多い。地域で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付きなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する力を高めたい。

#### (2) 《本単元について》

本単元では世界の各地域で見られる地球的課題の要因や影響をその地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する力を育成することを主なねらいとしている。こうした学習の全体を通して、世界の各州の地理的特色やそこで見られる地球的課題と地域的特色的関係を理解できるようにする。世界の各州を対象として、それぞれの州内に暮らす人々の生活にかかり、かつ我が国の国土の認識を深める上で効果的な観点から州内の特色ある地理的事象を基に主題を設定し、その追究を通してそれぞれの州の地域的特色を理解させることが主なねらいである。

#### (3) 《(1), (2)を受けた、本単元の指導について》

南アメリカ州は日本から遠く生徒たちにとって関心の高い州とは言えない。しかし、熱帯林の減少に関してはほとんどの生徒が知っており地域的特色として捉えやすいため、地域的特色と言える森林の伐採と開発や商品作物の栽培に関わる課題などを主題に設定できる。地理的事象を多面的・多角的に考察し、根拠となる資料を活用し話し合う活動を通して、南アメリカ州に関する関心を高め、日本やアジアとの関わりについての視点も取り入れて、この地域がどのように発展し人々の生活がどのように変化してきたのか追究させたい。

資料を読み取ったり、推測したり、グループ内で話し合うことで友達の考えを知ることが楽しいと答える生徒たちである。言語活動を手段として学習を進めることで、より社会的な思考力・判断力・表現力を高めていきたいと考えている。

## 7 全体計画（総時数4時間）

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 (1 時 限)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アメリカ州の各国の位置や自然環境に関心をもち意欲的に追究することができる。</li> <li>・南アメリカ州の国の位置や自然環境を適切な資料を選択して読み取り、白地図上にまとめることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アメリカ州の国々を学習シートに書き込む。その際、分からないところは地図帳で国の位置を調べさせる。</li> <li>・地図帳から主な山脈・平野・河川・海洋等を調べ学習シートに書き込む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アメリカに関する資料を調べる導入として地図帳で国の位置を調べさせる。</li> <li>・山脈の連なりや、平野の広がりが分かるようにシートに書き込むように指導する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アメリカ州の各国の位置や自然環境に関心をもち意欲的に追究しようとしている。 【学びに向かう力、人間性等】 (活動の観察)</li> <li>・南アメリカ州の国の位置や自然環境を適切な資料を選択して読み取り、白地図上にまとめることができる。 【知識及び技能】 (学習シートの観察)</li> </ul>
2 (2 時 限)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題図を見て考えた疑問をもとに学習課題を設定し、課題に対する予想を立て、資料をもとに話し合うことができる。</li> <li>・ブラジルの熱帯林減少とその問題点について理解している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「1年間に消失した森林面積」の主題図から「なぜ～だろうか」という学習課題を設定し、課題に対する予想を立てる。</li> <li>・予想と資料を考察した結果をもとにグループで話し合いキーワードを考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林消失の原因が耕地面積増加にともなっていることに気付かせたい。</li> <li>・農作物の輸出や価格変動など、様々な要因が関係しブラジルだけの問題でないことに気付かせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題図を見て考えた疑問をもとに学習課題を設定し、課題に対する予想を立て、資料をもとに話し合うことができる。 【思考力、判断力、表現力等】 (活動の観察)</li> <li>・ブラジルの熱帯林減少とその問題点について理解している。 【知識及び技能】 (学習シートの観察)</li> </ul>
3 (3 時 限)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題図を見て考えた疑問をもとに学習課題を設定し、課題に対する予想を立て、資料をもとに話し合うことができる。</li> <li>・バイオエタノールは石油の代替えとなるかについて自分の考えを発表できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ブラジルにおけるバイオ燃料車の台数と比率の推移」のグラフから「なぜ～だろうか」という学習課題を設定し、課題に対する予想を立てる。</li> <li>・予想と資料を考察した結果をもとにグループで話し合い自分の考えを発表することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・限りある資源である石油の代わりとしてバイオエタノールを利用することで、持続可能な社会を作つていけるかという視点で話し合わせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題図を見て考えた疑問をもとに学習課題を設定し、課題に対する予想を立て、資料をもとに話し合うことができる。 【思考力、判断力、表現力等】 (活動の観察)</li> <li>・バイオエタノールは石油の代替えとなるかについて自分の考えを発表できる。 【知識及び技能】 (発表と学習シートの観察)</li> </ul>

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
4 (4時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アメリカ州で開発が進んだ理由について、考察しまとめることができる。</li> <li>・南アメリカ州の地域的特色をとらえる上で必要な知識を問う問題に答えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アメリカ州で開発が進んだ理由を学習シートにまとめる。</li> <li>・学習ワークの問題に取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アメリカ州の自然環境や開発が進んだ理由、開発により考えられる問題点等が1枚にまとめられるような学習シートの形式を工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南アメリカ州で開発が進んだ理由について、考察しまとめることができる。 【思考力、判断力、表現力等】 (学習シートの観察)</li> <li>・南アメリカ州の地域的特色をとらえる上で必要な知識を問う問題に答えることができる。 【知識及び技能】 (学習シートの観察)</li> </ul>

## 8 本時の計画 (本時 2 / 4時間)

### (1) 本時の目標

- ・主題図を見て考えた疑問をもとに学習課題を設定し、課題に対する予想を立て、資料をもとに話し合うことができる。  
【思考力・判断力・表現力等】
- ・ブラジルの熱帯林減少とその問題点について理解している。  
【知識及び技能】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	<p>1 「1年間に消失した森林面積」の主題図から「なぜ～だろうか」という学習課題を設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">           (例) なぜブラジルでは熱帯林の消失が減少しないのだろうか?         </div>	全体個	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブラジル以外の国とブラジルの違いに関する疑問から学習課題を設定させる。</li> <li>・生徒が設定した学習課題を利用し、本時の学習課題とする。</li> </ul>	
展開	<p>2 学習課題に対する予想を考える。</p> <p>3 資料を考察する。</p> <p>4 考察した結果をもとにグループで話し合い理由を考える。</p> <p>5 各グループの話し合いの結果を発表しあう。</p> <p>6 学習シートにまとめを記入する。</p>	個個グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習知識や知っていることから予想させる。</li> <li>・考察した結果についてグループ内で話し合い、ホワイトボードにまとめる。</li> <li>・黒板に掲示したホワイトボードのキーワードを元に発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主題図を見て考えた疑問をもとに学習課題を設定し、課題に対する予想を立て、資料をもとに話し合うことができる。 【思考力、判断力、表現力等】 (活動の観察)</li> </ul>
まとめ	<p>7 関連する資料を見て理解を深める。</p> <p>8 リフレクションカードを記入する。</p>	全体個		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブラジルの熱帯林減少とその問題点について理解している。 【知識及び技能】 (学習シートの観察)</li> </ul>

## 9 分科協議会記録

日時：10月26日（金）

会場：2年F組教室

指導助言者：秋田県教育庁義務教育課 高橋 浩 指導主事

### （1）本校としての教科の目標

広い視野に立ち、グローバル化する国際社会を主体的に生きるリーダーとして必要な知識・技能を身に付け、それを用いた思考力、判断力、表現力の育成を図る。また生徒の進路希望達成を支援する授業を行う。

### （2）本授業のねらい

- ・主題図を見て考えた疑問をもとに学習課題を設定し、課題に対する予想を立て、資料をもとに話し合うことができる。
- ・ブラジルの熱帯林減少とその問題点について理解している。

### （3）授業者から

本校はグローバルリーダーを育成するという目標を掲げているので、すぐれたコミュニケーション能力、問題解決能力、多様な考え方や価値観をもつ集団をリードできる力、協働して課題の解決に取り組む人材を育てたいと考え、日々の授業を実践している。今日の授業は、学習課題づくりから予想し、個人で考え、その後話し合い、言語活動による学び、その後自分で答えをつくる。そのあと発展的な資料をみて、最後にふりかえりという流れで行っている。いわゆる秋田型授業である。資料を提示する際に、教科書や資料集にはない資料をネット上から検索し、生徒たちが「知らなかつ」と思うようなことを取り上げるように工夫している。今回の研究主題が「高大接続を展望した主体的・対話的で深い学びの実践」となっているが、私は日常行っているいつもの授業実践を見ていただいた。

### （4）協議

#### 協議題1 「高大接続改革を見据えた場合の、発達段階をふまえた指導法の工夫・改善」

小熊（秋大附中）：今日の授業では、導入でギャップのある資料を生徒に提示して学習課題を設定し、それに対する予想を立て、予想に基づいて資料から課題の解決めざすという形態であったが、高校の学習内容の多さを考えると、このような形で授業をするのはむずかしいのではないか。南高中等部の先生方が高校の授業にどう関わっているのか質問したい。

門間（授業者）：私は本県の高校入試であれば確実に9割とれるような力を中等部生につけたいと考えて授業を行っている。中高一貫校では学習時間のV字曲線というものがあり、中学校2・3年生で学習量が低下し高校1年生あたりから伸びてくるという。教科書の内容を網羅しようとすれば、今回のような授業は成立しない。できるだけ興味をもって学習にむかえるようにし、網羅できない分は、考查対策プリントなどで工夫して、3年間のトータルで力をつけさせたいと考えている。

齊藤（秋田南高）：私は世界史が専門だが、高校で求められる知識量は相当多い。門間先生や佐々木先生、中等部の先生方の授業を拝見し、毎時間はむずかしいが、章ごとにある程度まとまった知識が身についた段階で、学んだ知識をもとに、意見を出し合うようなトピックを取り上げている。

岩川（男鹿海洋高）：すべての授業でこのようなスタイルをとるのは無理だが、目的は思考力・表現力・判断力をつけることだから、そのような場面を意識的に設けること、課題を作りやすいところで生徒に課題を提示することは必要だろう。私は、以前「ローマの平和は、本当に平和だっ

たのだろうか」ということを問い合わせたことがある。

泉田（横手清陵高）：私は横手清陵6年目で初めて中学校の授業も担当しているが、中高のギャップを感じている。そこで、高校の内容も紹介し、中学生に「なぜ」と感じさせることから授業に入っている。こうした「プラスアルファ」の部分を利用して、関心づけや「ふりかえり」の機会を持たせている。

小名（司会）：今「ふりかえり」という言葉があつたが、門間先生の授業では必ずリフレクションシートが活用されている。このリフレクションシートの効果について話していただきたい。

門間（授業者）：アクティブラーニングに関する文献を読むと、「ふりかえりなくしてアクティブラーニングは成立しない」という記載が多い。私自身は、生徒一人一人がどのように考えたのかをあとで見直せることと、時間がかかるべくコメントを書いて戻すので、生徒たちと何らかのコミュニケーションがとれることでも役に立っている。もしかしたら中学生よりも高校生の方が、中身も違うだろうし、書かせる効果がもっとあるような気がする。

泉田（横手清陵高）：前任校で、学習時間状況調査に毎日コメントを書いて返していたが、生徒とのコミュニケーションという点では、授業の中でもできると、今日の話を聞いて改めて感じた。

渡部（御所野学院高）：御所野学院では今の中3まで併設型で、中2からは連携型になる。併設型は清陵や南高のように中学校への「乗り入れ」はないので、年に何回かの授業研修会で、中学校の授業を参観させていただき、自分の方にフィードバックできることは何かと常に考えている。高校1年生の現代社会の授業でも、基礎的知識が不足していると思う場面もあるが、興味・関心を持っている生徒は少なくないと実感している。そういう生徒を少しでも増やすために、教師側の手立てとして、世の中の状況などを提示して、少しでも興味・関心を引き出してあげることが重要だと思う。

## 協議題2 「『主体的・対話的』な考察を促すための効果的な学習課題と、その課題を解決するための資料の提示の工夫」

小名（司会）：今日の門間先生の授業では、生徒たちが自分で学習課題を設定するという形で進められた。高校で同じような形でやるのは、なかなかむずかしい。中学校・高校それぞれの立場で、先生方から、取り組みの工夫などを紹介していただければと思う。

佐々木（秋田南高中）：中学校で学習課題を考える際に、導入部分でどのような「問い合わせ」を見出しが重要である。社会科では資料が大事なので、導入資料を重視しているが、授業を一貫して使える資料や、子ども達に驚きや感動を与えられるものを常に考えている。個人的な考えではあるが、学習課題を設定する際に、「どのように」よりも「なぜ」の方が、子ども達も焦点化できるので、有効だと考えている。

小熊（秋大附中）：学習課題の文言が授業の魅力を左右すると感じている。私も佐々木先生と同じで、一番魅力的なのが「なぜ」という言葉がついた学習課題であると思う。よく使われるのが「どんな」、英語でいうHowだが、この文言がつくと、そのとたんゴールがぼやけてしまう。なぜかというと、事実を確認する授業になってしまふからである。また、学習課題を「鎌倉時代の社会」と書くだけでは何も見てこない。「鎌倉時代はなぜ3代で源氏が亡んだのに150年も続いたのか」という課題であれば、承久の乱などが出てくるだろう。「なぜ」という学習課題には弱点もあり、すべての情報を網羅するのはむずかしい。なるべく「なぜ」という課題で授業を一貫できるようなものを設定できるように頑張っている。

門間（授業者）：地理は「なぜ」という学習課題が作りやすい。「どうして」とか「どんな」いう課題になると1時間では終わらず、単元計画のバランスがくずれてしまう。できるだけ1時間で完結する授業を組み立て、それを継続するためには、「なぜ」で始まる学習課題がいいのかなと思っている。また探せばどこかに文章化されていて「疑問が成立しない」ので、普段机上には教科書や資料集などの教材は置かせない。「まず今日はこの3つの資料から考えてみよう」という形

でやっている。入試の問題は、「この資料からあなたたちはどう考えるか」と作問の先生が問うているのだから、「私が用意した3つのことから考えられることに迫ってみよう」と生徒に話している。

小名（司会）：歴史の場合はどういう学習課題を？歴史と地理ではアプローチがかわってくると思うが。

門間（授業者）：本校の生徒は80人中60人くらいが地理より歴史が好きだというので、歴史の授業で生徒に学習課題を生徒に作らせると、様々な知識を持っていることと、写真や図表など資料の種類も多いことから、学習課題がぶれてしまう。そのため、歴史の授業では、私が設定することが多い。

千葉（角館高）：門間先生の授業は、班ごとに分かれて同一の課題にすべて答えるパターンであつたが、それだと時間がかかってしまうので、班ごとに分けるのであれば、課題を分担して、発表の時間を増やしたい。今日の授業では、たとえば○囲みの記号、増えるとか、減るとかいう記号をうまく使い、非常にコンパクトに意見をまとめている。表現力が鍛えられているのがすごいと思った。

小名（司会）：授業使用したホワイトボードに書く際に、「文字サイズ大きめ、文字量少なめ」と話されていた。門間先生、これは4月からずっと？

門間（授業者）：ホワイトボードを使って最後に文章にするという方法をずっとやっている。よく社会の入試問題で、○と○2語を使って答えなさいという文章問題があるが、そういうものに対応するためには、いきなり書き始めるのではなく、「この資料から言えることはこれ、こちらの資料からはこれと、ポイントを余白にメモしてから文章を作っていくと間違わないぞ」ということを伝えている。今日黒い字で書いたのが資料から読み取れる事実で、「事実の部分を書いていないと、入試のときに、この子は資料をみて書いていないのではないか、知っていることを書いただけではないかと誤解されるから、必ずこの資料を見たということがわかるように、事実である黒の部分は必ずいれること」と注意している。赤い字の部分は「味付け」と表現したが、資料に直接は書かれていながら、考えられることをうまくニュアンスをとって文章化するようにと指導をしている。

小名（司会）：この方法は大学入試の論述や小論文にも活用できる。はるばる山形県から来ていた川村先生からも、ぜひご意見をちょうだいしたい。

川村（山形北高）：主体的・対話的考察は、文章表現にも生かせる。「対話」が成立するためには、相手が何を言いたいか理解する力と、自分が言いたいことを相手に伝わるように表現できる力の両方が必要だと思う。小論文とはちがうが、推薦入試によくある志望理由書も、志望理由が良くても、言いたいことをきちんと書けないと受験では通用しない。そういう意味でも「主体的・対話的な考察」は大事だと感じている。

柘植（秋田高）：高大接続を考えた場合に、高校の教員は教え込んでしまうというか、話が長い傾向があり、そこは変えていかなければいけないとずっと思っている。生徒が話したがっている素振りが見せているにも関わらずそれを拾いきれないともったいない。生徒の力、言葉をもっと使ってあげれば、授業が楽しくなると思う。中学校の授業は、生徒が本当に主体で、教員は助ける側に立っている。この授業形態を高校がうまくつないでいかないと、大学まで流れていかない。定期考査では、できるだけ文章で答えさせる形をとり、普段の授業でも、生徒に黒板に書かせながら、単語ではなく、文章で答えさせるようにしている。こうしたことが、生徒が個人で考え、さらにグループで話し合う中学校側のやり方を汲み取りながら、大学入試にもつなげていける一つの方向なのかなと思っている。

最後に授業の感想として。男子の文字がきれいだと思ったことと、男子がちょっとおとなしいかなという感じがしたのだが、そのあたりは？

門間（授業者）：今年の1年生80人、実はみんな字がきれいでびっくりしている。「これはなくさ

ないでいこうね」と話している。今日授業をやった1組は、男子も女子もおとなしい。2組と3組はそれぞれクラスの雰囲気がちがう。テストをやると平均点にも差が出てくる。

今日冒頭で学習課題をもらった生徒と、最後に授業のまとめを発表した生徒は、成績だけで見ると必ずしも上位ではないが、あえて今日はその二人を使って授業をやってみた。アクティブラーニングのいいところは、そういう子たちがまじっていてあまり違和感なくそれぞれ活動できること、また、私自身が結構フリーで動けるので、気になる子のところにはそばに行って状況を確認したうえで指名することもできる。今日の授業で使った3番の資料は中3の公民で利用するような資料だが、「面積が増えると価格があがる」と書いた子が2人いた。27人中の2人。そのままスルーして話し合いをさせた結果、話し合いで出てきたときには、「価格があがると面積が増える」と変っていたので、私としてはよかったですよかったですという感じだった。アクティブラーニングだと、生徒の様子を見る時間が増えるので、意外にサポートしやすいし、まぎれてやっているので、あまり恥ずかしがらないで、苦手な生徒で授業に関わっていける。その苦手意識が強い子たちがどのようなことを感じていたかをリフレクションでも確認できる。なれてしまえば、意外といいところがあるのかなと思う。

#### (5) 指導助言

この春志高く中等部の門をたたいた中1生の、資料と向き合う姿や、学習シートに書く、まとめる、設定された時間までにすべてのグループが学習内容をまとめ、黒板に提示する。自分たちで学習を進められるを感じさせる、大変すばらしい授業であった。

まず1点目の協議題に関して、困難な社会に出て行くことが予想されるなかで、18歳までの生徒に、教科や校種の枠をこえて同じベクトルでの指導が求められていることが背景となって、「主体的・対話的で深い学びの実践に向けた授業改善」がキーワードになっていると考える。本単元は4時間で構成されているが、1時間目は南アメリカ州を概観し、4時間目は学習を終えたあと南アメリカ州の地域的特色を理解する。そしてそのなかの2時間は今回、ブラジルを例に環境問題など地球的な課題をとりあげて学習を深めていく。方法としてはグループ活動など対話を盛り込みながら、地理的課題を把握しようという指導計画であったと受け止めた。最初に驚きを生むような資料提示から学習課題を設定し、全員の予想を掲示し、その予想をもとにその後の追究に向かわせていた。社会科ならではの見方、考え方、たとえば時間、空間、相互関係、そういうしたものに着目し、比較分類、相互の関連づけなど、学びを深める工夫がなされていた。また、グループ活動のあとで単に「増えている」から「2倍以上増えている」など推移や変化の幅にも注目するなど表現力の向上も見られた。門間先生は導入資料をまとめの段階で再度使用し、「輸出があれば輸入もある」など、別の側面にも注目させるなど思考の広がりを促す問いかけもなされていた。

2点目の協議題に関して、みんなで追究する課題を設定する際に大事なことは、すでに獲得している知識や概念にどうゆさぶりをかけるかということであろう。本時では導入資料、ズームイン、焦点化と提示方法を工夫し、生徒たちの驚きの声を上手に引き出していた。新たな疑問が生まれたり、学習課題と自分との距離が近づいたと感じるときに追究意欲が高まる。社会に出れば子ども達は、直面する課題の解決の糸口を自分で見つけなければいけない。課題解決に向けて追究する姿勢を育てるためにも単元を通して継続的な学び、意識付けをはかっていきたいものである。

今日は、本当にすばらしい子どもたちの学びの姿を見せてもらった。本校がめざす「グローバルリーダーの育成」は、時代の要請であるとともに、今日の課題でもある。中高一貫、6年間の学びが礎となり、県内外、さらに国際社会で活躍できる生徒が本校から数多く輩出されることへの期待感がより一層高まった日となつた。

# 高等学校数学科 数学Ⅰ 学習指導案

学級 1年B組40名  
場所 大教室  
授業者 中村東

1 単元名 第4章 図形の計量 第2節 三角形への応用 8 空間図形への応用

## 2 単元の目標

- (1) 角の大きさなどを用いた計量に关心をもち、考察しようとしている。【関心・意欲・態度】  
(2) 三角比を用いて図形の計量問題を考察し、表現することができる。

【数学的な見方や考え方】 ((2)図形と計量のイ)

- (3) 正弦定理や余弦定理、面積の公式を用いて平面図形や空間図形の計量を行うことができる。

【数学的な技能】 ((2)図形と計量のアの(ウ))

- (4) 三角比を鈍角まで拡張する意義を理解し、図形の計量について基礎的な知識を身に付けてい  
る。

【知識・理解】 ((2)図形と計量のアの(イ))

## 3 取り上げる教材

教 材：「高等学校 数学Ⅰ」（数研出版） 「フォーカスゴールド数学Ⅰ+A」（啓林館）  
動的数学ソフトウェア「GeoGebra」

## 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

- (1) 図形の構成要素間の関係を三角比を用いて表現するとともに、定理や公式として導く力  
(2) 図形の構成要素間の関係に着目し、日常や社会の事象などを数学的に捉え、問題を解決した  
り、解決の過程を振り返って事象の数学的な特徴や他の事象との関係を考察したりする力

## 5 評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	知識・理解
角の大きさなどを用いた計量に关心をもつとともに、それらの有用性を認識し、事象の考察に活用しようとしている。	事象を三角比を用いて考察し表現したり、思考の過程を振り返ったりすることなどを通じて、角の大きさなどを用いて計量を行うための数学的な見方や考え方を身に付けることができる。	事象を三角比を用いて表現・処理する仕方や推論の方法などの技能を身に付けている。	直角三角形における三角比の意味、三角比を鈍角まで拡張する意義及び図形の計量の基本的な性質を理解し、知識を身に付けている。

## 6 生徒と単元

### (1) 《生徒の実態》

S G H の探究活動を通して自らの考えや疑問点を積極的に述べる態度や、世界が抱える様々な問題に対して解決策を考えようという主体性が育ってきている。

本単元を通して論理的思考力を高めると同時に、問題に対して一つのアプローチだけで満足せず、より一般性のある解決策やより容易な解決策を導き、それぞれのアプローチに対して批判的に考える視点を育てたい。また、学び合いの活動を通して相手に分かりやすく伝える表現力や協働力を育てたい。

### (2) 《本単元（教材）について》

図形問題は一つの問題に対して複数のアプローチがあることが多い。ある方法は一見優れて

いても特定の問題にしか使えない特殊性があったり、難しく見える方法が一般性をもった優れた解決策であったりすることもあり、複数の解決策について比較するのに適している。

空間図形の問題を解くには、ICTを活用することで直感的な理解が容易になる。このようにICTの活用能力を育成するために適している。

複数のアプローチの中からより優れた解決策、一般性のある解決策を追究していく過程で、一度見付けた解決策に対して批判的に見つめなおす力を育てていくことができると考えている。

### (3) 《(1) (2) を受けた、本単元の指導について》

ICTを活用することで情報収集能力や表現力の向上を目指し、授業におけるiPadやスマートフォンの活用を進めている。

本単元では、それぞれの問題の解決策に気付いたり身に付けたりすることよりも、自分の発見した解決策を相手に伝えたり、自分達の解決策以外の方法があることを知ることで、異なる解決策のよさを知ったり、自分達の解決策の弱点を批判的に考察する力を身に付けたりすることで、SGHにおける「課題解決能力」「論理的思考力」を深めたい。

グループで協働して問題を解くだけでなく、異なる2つのグループ同士の学び合いを行うことで協働力や表現力の向上、主体性を育むことを目指している。

## 7 全体計画（空間図形への応用 総時数3時間）

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 (1 時 限)	・ ICTの活用を通じ、空間図形を様々な方向から見たり、展開図を描いたりすることで、空間図形を平面図形として処理することができる。	・ 空間図形について展開図を描いたり断面図を描いたりすることで、長さや最短距離を測量する。	・ 空間図形は平面図形の集まりであることを確認する。 ・ GeoGebraで空間図形を様々な方向から見ることができるようにする。	・ 三角比や正弦定理・余弦定理などを空間図形の計量に活用しようとしている。 【関心・意欲・態度】(活動の観察) (ワークシート観察)
2 (2 時 限)	・ ICTの活用を通じ、空間図形の断面図を描くことと、体積を分割するという視点を身に付けることができる。	・ 正四面体の体積を、断面図の活用や体積の分割に着目して求める。	・ 内接円の半径のようにいくつかの図形に分割する考え方があることを助言する。 ・ 断面図を描くときは対称性のある位置で考えることを助言する。 ・ GeoGebraで空間図形を様々な方向から見ることができるようにする。	・ 三角比や正弦定理・余弦定理を用いて空間図形の計量をすることができる。 【数学的な技能】(ワークシート観察)
3 (3 時 限)	・ ICTの活用を通じ、図形と計量の知識を統合的・発展的に捉え直すことができる。	・ 正四面体の内接球の半径を求める問題を通して、多面的な見方を身に付ける。 ・ 異なる2つのグループ間での学び合いを通して、理解を深める。	・ GeoGebraで各グループのアプローチに適した状態を準備しておく。 ・ ClassiNOTEを用いてグループの話し合いをまとめよう助言する。	・ 空間図形の計量に活用するために正弦定理・余弦定理を多面的に見ることができる。 【数学的な見方や考え方】(ワークシート観察)

## 8 本時の計画（本時 3 / 3 時間）

### (1) 本時の目標

ICTの活用を通し、図形と計量の知識を統合的・発展的に捉え直すことができる。

【数学的な見方や考え方】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	<p>1 本時の目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">           ICTを活用して空間図形の問題を複数の解法で解き、それぞれのよさを追究する。         </div> <p>正四面体の内接球、外接球の半径を求める。</p>			

## 9 分科協議会記録

日時：10月26日（金）

会場：2年E組教室

指導助言者：秋田県教育庁高校教育課 伊藤 淳 指導主事

### （1）本校における教科の目標

論理的思考力や課題解決能力を身に付けさせ、東北大学などの国公立大学2次試験に対応できる思考力を養う。中高一貫教育により可能となる効率的なカリキュラムの構築を行う。

### （2）本授業のねらい

ICTの活用を通し、図形と計量の知識を統合的・発展的に捉え直すことができる。

### （3）授業者から

普段の授業では私用のiPadをプロジェクタで投射して生徒に説明している。そろそろ生徒が自分で活用するスタイルを取り入れようと試み、今回の授業となった。生徒が互いに教え合う授業スタイルで協働的な学びを目指した。また、2つの解法の比較だけでなく、数学に限らず諸問題への取捨選択ができる力を養いたいと考えた。生徒に教えさせることに主眼をおいた。

### （4）協議

協議題1 「対話的な活動や学びを深め合う場面における、ICTの効果的な活用方法について」

協議題2 「数学的な思考力・表現力を高める指導の工夫について」

（相互にかかわり合う協議題なので、分けずに協議した）

芳賀（横手高）：中学生も来年から入ってくる、とのことだが、中等部数学科の先生から見て、中学と高校の違いが大きいと伺っている。本日の東先生の授業も踏まえてお教いいただきたい。

工藤道（秋田南高中）：グループワークを中学では多く行い、ホワイトボードを班ごとに使わせ、助け合って教える事が多い。グループワークは中学でも多く行うため、本日の研究授業でも参考にした。一方、高校の取り組みを中学に取り込む部分はこれからである。

小山（秋田県あきた未来創造部）：主体的・対話的で深い学び、論理力表現力の育成について、高いレベルで実現できていると感じた。最後の「特殊解・一般解」については、なるほどと感銘を受けた。答えのない諸問題についての向き合い方、につながれば、と感じる。

質問を1点。ICTを活用しての授業であり、取り入れ方についてだが、3次元のipad教材については、模型の方がよい場合もあると思うが、どうか。

中村（授業者）：同じ学年部の高久先生が、段ボール模型での授業を行ったが、一長一短であった。例えばICTでは、教材や動画を用意しておいてその場で見せる際、授業の単元ごとに模型を用意しなくてよい。参考書をスキャンし、ApplePencilで書き込んで授業展開するため、板書をほとんどしていない。また、教科書にそのまま書き込む生徒が多い。例えば後の学年で高1内容を振り返る際、みんな教科書に書き込んだもので復習するので、この授業展開は生徒の実状に合致している。

小山（秋田県あきた未来創造部）：板書の授業とICTの授業で、生徒の学習定着に差はないのか。

中村（授業者）：板書の授業と定着について差異はほとんど無いと感じる。geogebraを使って、パカッと割れる動画を見せると、定着が強い。生徒にとっては、インパクトがあり面白いことで定着が図れるので、積極的に使っている。

杜（秋田大）：県内の高校の取り組みや変化を嬉しく思っている。普段こうした授業をしているわけではないとしても、iPadに限らず、生徒が主体的に取り組む体験をさせることや反転要素を取り入れた授業を通して生徒にこうした体験をさせることは重要。ぜひ、全ての生徒たちに経験

させたい。特に空間図形に対しては、生徒がイメージできるかできないかが大きいので体験の効果が大きい。もちろん、iPadで全てできるわけではないので、これに類する取り組みを、という意味。全体の主題については学習者をもっと積極的に前向きにさせることを目指した育成をお願いしたい。また、ALや「主体的な～」とした狙いについて、秋田県の教育の蓄積にも（AL以前から）大きな財産がある。これらを活かすことも大いに考えてほしい。

Tinashe（秋田大）：本日、4～5名グループの全員参加型であったが、グループ内で気持ちが離れたメンバーへの対応はどうされているか。

中村（授業者）：本日は公欠者が多いため、グループが少人数になり理想的人数に近づいた。普段は大人数のグループになるため、確かに気持ちが離れる生徒が1・2名出る。指導者はグループを回って個別に声かけをしフォローしている。またグループ内の生徒が参加を促すこともある。

松村（群馬・中央中等教育）：遠くから来たが、来てよかったです。4点伺いたい。

1) 反転授業について。私たちも今後不可欠の教材だと感じているが、生徒の負担についてはどうなのか（他教科との兼ね合い、部活動との兼ね合い）南高でどんな課題があるのか。

2) ICT教材について。家庭にICT機器が持てるか、の問題がクリアできたとして、生徒が予期せぬ方向に使ってしまう、という面での課題は南高ではどうか。

3) グループ構成の際、できる・できないを指導者が区別してよいのか、自分は「自分たちが必要だと感じたらグループを組め」と指導している。組ませ方を指導者が整理することの是非について。

4) ICT機器は「わかる」に効果があるが全体化から「個」へ戻す作業でデメリットはないか。

中村（授業者）：1点目。他クラスで同テーマの模擬授業の際、見てこない生徒が多少いた。その場合も、見てきた生徒が教えた。見てこなかった生徒が「あつわかった！」と反応した授業もあった。2点目。本校はClassiを導入しているので、保護者の「生徒へのICT活用」について理解がある。探究活動や調べ学習で授業中の機器使用は指導者の許可が必要、としている。ICTの良い使い方を示したい。3点目。グループのリーダーは生徒の自薦。数学の力が高くない生徒も名乗り出たが、やらせた。「必ず男女混ぜる」などルールを工夫して、良い形にしている（もともとの生徒のモラルの高さもある）。でも今回のご指摘は参考になった。4点目、見せて理解させても、その後振り返った際にできない、という点が課題だと思う。一方、今の生徒はティーチングスタイルでずっと教えると飽きるので、全体化と個別の理解の両方を行き来して、理解と定着を図りたい。

武塙（横手高）：私も難しい内容の授業にはグループワークを使っているが、横手の高3生からは否定的意見が多かった。理由が「板書に生徒が書き、添削するスタイルがいい」というもの。もう1点。本時の「断面図」で解く方法で「垂線が重心」「内接円の中心」について、本質的理解でなく、グループの女子生徒の説明もgeogebraで「ほらこうでしょう」としか見せていないのが気になった。

中村（授業者）：例えば、今のスタイルを高3生の演習でも続けるか、といったらわからない。1対1の教え合いスタイルも取り入れたいが、今回はできなかつた。昨年、高3生を指導した先生のスタイルが、授業後半で個別に演習させ、その添削を次時前半で提示し講評する方法で、生徒の反応も良かった。こうした形が良いのかも検討したい。重心についての本質理解は、前時で扱っている。体積・高さについては無条件で使って良いことにしたのはそのため。

## （5）指導助言

事前に拝見した指導案で「ICT活用」という点に特に注目していた。4年前、秋田北高で小松田先生のipadを利用した授業を拝見したが、4年間での進化を感じた。生徒のリテラシーが高く、途中つかえずに指導者も生徒もスムーズに授業を進めている点に感心した。教具としてipadを用いて空間図形をイメージし、生徒もiPadを使うのを楽しく感じているようだった。

ICTの特徴として、空間的・時間的制約を超えること、カスタマイズできること、等があり、個別の能力に応じた学習ができること、協働的活動を推進できる、等のメリットがある。各グループ1台、ということで、考えを深めるための教材として活きていた。また、試行を繰り返しできる、ということで生徒の理解も深まったようである。個人の考えを整理して伝え合う（ホワイトボードの併用なので全てICTというわけではないが）点でも協働的な取り組みにICTが貢献していた。

ご指摘のあった点だが、グループワークの中で受け身な生徒のフォロー法については、例えば英語で多いのがメンバーの役割分担も事前に課す方法がある。大教室の良い環境ゆえできる、ということもあるので、普段の授業にどう展開していくか、は今後の課題。とはいっても、良いものは良い、として今後も研究し発展されることを期待する。また、アウトプットする際に用いるツールとしてもICTに期待する。併せてICT機器使用の目的を明確にして授業に活用したいものである。

# 高等学校理科 生物基礎 学習指導案

学 級 1年D組 41名  
場 所 1年D組 教室  
授業者 平田 哲久

## 1 単元名 神経とホルモンによる調節の仕組み

### 2 単元の目標

- (1) 自律神経系とホルモンによる体内環境の維持の仕組みについて、自分自身の体内で行われている働きとして関心をもって意欲的に学習に取り組もうとする。 【関心・意欲・態度】
- (2) 動物の体液濃度が自律神経系とホルモンの作用により調節されている仕組みを考察し、体液濃度が一定に保たれる仕組みについて、科学的な見方で論理的に表現する。  
【思考・判断・表現】 ((2)「生物の体内環境の維持」のアの(イ))
- (3) 心臓の拍動数の測定実験を通じて、観察・実験の記録を適切に行い、科学的に探究する技能を身に付ける。 【観察・実験の技能】 ((2)「生物の体内環境の維持」のアの(ア))
- (4) 自律神経系とホルモンが大きく作用することで、体内環境が一定に保たれる仕組みについて理解する。 【知識・理解】 ((2)「生物の体内環境の維持」のアの(イ))

### 3 取り上げる教材

教 材：「改訂版 生物基礎」（数研出版）

### 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

血糖濃度が自律神経系とホルモンの作用により調節されている仕組みを図と表・数値から考察し、濃度が一定に保たれる仕組みについて、科学的な見方で論理的に表現する力

### 5 評価標準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	観察・実験の技能	知識・理解
体内環境の維持の仕組みについて関心をもち、意欲的に探究しようとしている。	動物の体液の濃度が自律神経系とホルモンの作用により調節されている仕組みを考察し、導き出した考えを表現している。	体内環境の維持の仕組みについて観察、実験を行い、それらの過程や結果を的確に記録、整理している。	体内環境の維持に自律神経系とホルモンが関わっていることを理解し、知識を身に付けている。

### 6 生徒と単元

#### (1) 《生徒の実態》

普段の授業では、近くの席やグループでの学習活動を行うと、活発な意見交換がなされ、生徒同士の学び合いが促進されることで、科学的用語を用いた適切な表現や知識の定着が図られている。単元を通じて、グラフや表などの資料から状況を読み取り、自然の事物・現象についての関連性や傾向を考える力や、情報を検証し、設定条件などについて判断する力を育成したい。

#### (2) 《本単元（教材）について》

交感神経と副交感神経の働きの違いや、ホルモンの名称と内分泌腺、主な働きを学んできた中で、自律神経系とホルモンが連動して作用して血糖濃度を調節していることを学ぶことができる。また、調節の不具合に起因する糖尿病はどのようにして起こるかなど、間脳の視床下部から命令が自律神経系と内分泌系という2つの仕組みを通して、どのように標的器官・標的細胞に伝わり、体内環境の維持に関わっているかを表やグラフ、数値を通して読み取る点で、自然の事物・現象についての関連性や傾向を考える力や、情報を検証し、設定条件などについて判断する力を育成が図られる点で有効である。

(3) 《(1) (2) を受けた、本単元の指導について》

血糖濃度の調節の図を提示することで、どのような経路を通じて血糖濃度が上昇・低下していくかを分析していく。また、健常者と糖尿病予備群、I型糖尿病患者、II型糖尿病患者の食事前後の血糖濃度、インスリン濃度の数値の変化を示した表を読み取り、グラフを作成することで、健常者や患者の変化を視覚的に検証し、状態を特定することができる。その際、血糖濃度の調節の論述は個人で実施し、グループで共有することで理解を深める。また、濃度変化については前述の数値の変化を示した表を、それぞれ教室の壁に提示する。知識構成型ジグソー法を用いることで、それぞれが役割を分担し、教え合いを通じて、主体的・対話的で深い学びの育成を実現したい。

7 全体計画（総時数 6 時間）

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 ( 1 ～ 2 時 限)	・交感神経と副交感神経が拮抗的に働くことで、体内環境が一定に保たれていることを理解することができる。	・いくつかの部位における交感神経と副交感神経の作用について、比較し表現する。 ・運動前後の心臓の拍動数の実験について、観察・実験の記録を適切に行い、科学的に探究する技能を身に付ける。	・交感神経や副交感神経がそれぞれ活発に働く状況を提示する。 ・拍動の変化を記録する用紙を準備し、運動前後で記録することにより自律神経の働きを数値で実感できるようにする。	・交感神経と副交感神経による作用の違いを理解している。 【知識・理解】 (ワークシート分析)
2 ( 3 ～ 4 時 限)	・各種ホルモンの働きと分泌経路、分泌量の調節方法について理解することができる。	・内分泌腺から分泌されるホルモンがどのように標的器官に運ばれ作用するか理解する。 ・体液中のホルモン濃度は、どのように適正な値になるよう調節しているかを考察し、表現する。	・ワークシートに内分泌腺や標的器官の図を掲載し、ホルモンの分泌経路をイメージしやすくする。 ・ホルモン分泌量の過剰な変化による弊害は何か問い合わせ、体内でどのように対処するか問い合わせる。	・ホルモンの分泌経路と標的器官について考え、表現している。 【思考・判断・表現】 (ワークシート分析)
3 ( 5 ～ 6 時 限)	・自律神経系とホルモンが、協調して体内環境を維持している仕組みについて理解することができる。	・血糖濃度が自律神経系とホルモンの作用により調節されている仕組みを考察し、表現する。 ・血糖濃度、インスリン濃度の数値の変化から、健常者、糖尿病予備群、I型糖尿病患者、II型糖尿病患者を特定する。	・低血糖時の身体の状態を提示し、血糖濃度を上昇させるホルモンとその働きについて発問する。 ・班を構成し、食事前後の血糖濃度の変化の表を各班員に提示し、教え合いの時間を設定する。	・血糖濃度、インスリン濃度の数値の変化から、健常者、糖尿病予備群、I型糖尿病患者、II型糖尿病患者をそれぞれ特定し、根拠を説明することができる。 【思考・判断・表現】 (ワークシート分析)

8 本時の計画（本時 6 / 6 時間）

(1) 本時の目標

血糖濃度、インスリン濃度の数値の変化から、健常者と糖尿病患者との違いを特定できる。

【思考・判断・表現】

(2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	<p>1 血糖濃度に関するホルモンの名称と働きの分類、内分泌腺について確認する。</p> <p>2 本時の目標と学習の流れについて確認する。</p> <p>血糖濃度、インスリン濃度の数値の変化から、健常者と糖尿病患者との違いを特定できる。</p>	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>考えをまとめやすいようにワークシートを配付し、記入していくよう伝える。</li> <li>糖尿病は身近な病気であり、周囲の理解が必要であるため、話合いの際は発言に配慮するよう伝える。</li> </ul>	
展開	<p>血糖濃度は低血糖時、高血糖時、それぞれどのように調節されていくか。</p> <p>3 血糖濃度の調節の図を見て、どのような経路を通じて血糖濃度が上昇・低下していくかを読み取り、説明する。</p> <p>被験者4人は健常者、糖尿病予備群、I型糖尿病患者、II型糖尿病患者のいずれか。</p>	個 グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>経路を明確にできるよう、血糖濃度の感知の起点は視床下部であることを助言する。</li> <li>ホルモンの分泌量と血糖濃度との関係を理解しやすいよう、健常者の食事前後のグルカゴンの分泌量の変化のグラフを提示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意欲的に活動に取り組み、自分の考えをまとめている。 【関心・意欲・態度】(ワークシート記述内容の確認)</li> </ul>
	<p>4 教室の側面に掲示された4人の被験者の、食事前後の血糖濃度とインスリンの分泌量の変化の表を見て、被験者の状態が、健常者、糖尿病予備群、I型糖尿病患者、II型糖尿病患者のいずれであるか分析する。</p>	個 グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>糖尿病の概要と、I型とII型の大まかな違いについて説明する。</li> <li>最終的に全ての被験者の状態を理解することができるよう、知識構成型ジグソー法を用いて、班員一人が一つの表を見て、被験者の状態を分析した後に、班員に発信し、共有するよう伝える。</li> <li>視覚的に分析しやすいよう、グラフ記入欄を設け、記入し活用するよう指示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表から被験者の状態を読み取り、その根拠を明確に説明することができる。 【思考・判断・表現】(ワークシート分析)</li> </ul>
まとめ	5 分析・特定結果をグループ間で発表する。	個	<ul style="list-style-type: none"> <li>糖尿病の定義を確認できるよう、日本の糖尿病の判定基準を提示する。</li> <li>なぜ血糖濃度を増加させるホルモンが多いのか問い合わせ、知的好奇心を喚起する。</li> </ul>	

## 9 分科協議会記録

日時：10月26日（金）

会場：2年D組教室

指導助言者：秋田県教育庁高校教育課 伊藤 国 指導主事

### （1）本校における教科の目標

自然の事物・現象を科学的に探究することを通して、グローバルな視点で考える力を育て、リーダーとして必要な基礎知識や探究力・行動力・協働力を身に付け、新しい大学入試で求められる思考力・表現力の育成を図る。

### （2）本授業のねらい

血糖濃度、インスリン濃度の数値の変化から、健常者と糖尿病患者との違いを特定できる。

### （3）授業者から

本校の研究主題は「高大接続を展望した『主体的・対話的で深い学び』の実践」である。本時では、「主体的・対話的で深い学び」の視点から、「知的構成型ジグソー法の活用」「グラフの作成と読み取り」「新学習指導要領を踏まえた展開」の3点を入れた授業を構成した。

### （4）協議

#### 協議題1 「高大接続改革に向けた資料活用の工夫」

平田（授業者）：「新テスト」を分析したところ、「初見の資料から考えさせる問題」が出題される傾向が強いことが分かった。糖尿病のグラフの解説は教科書に記載されておらず、大学入試にもほとんど出ていない。そこで、日本糖尿病学会による指針を活用し、グラフをかかせることにした。この過程が考えを導くトレーニングになると考えた。

部谷（秋田南高）：授業をするにあたり、あれだけのものを準備するのは大変だったと思う。今日使用した図は、ホルモンの経路が複雑で生徒にはわかりづらいものである。経路について、模造紙と色ペンを使って分かりやすく表す工夫がされていた。生徒は「ミッション」についてよく考えて活動していた。目標の一つである「グラフの読み取り」も達成された。

斎藤（秋田北高）：生徒のかいたグラフを平田先生がスマホで撮って共有したのは、よいアイデア。時間に余裕があれば、生徒自身が前に出て発表するのもよい。

三浦（能代松陽高）：初めに前時の復習をしていて、確かな知識をもたせる構成になっていた。扱う内容が多いので、インスリンとグルカゴンだけを先に学習するやり方もある。「ミッション」では、黒板に掲示されたデータを書いてすぐ戻る生徒もいた。手元の資料を根拠にしないとグラフを判別できない学習なので、そのことを最初に助言すればよいと思った。それから、同じ資料の担当者同士が集まって話し合うこともできた。

平田（授業者）：手元の資料データの使い方を判断してほしかったので、あえて指示は途中まで出さなかった。

鎌田（横手高）：テンポの良いメリハリある授業。タイマーを効果的に使っていた。プロジェクタの図とワークシートが連動していたので生徒は確認しやすかった。

阿部（司会）：プロジェクタの使い方で工夫したことは？

平田（授業者）：黒板に投影した図にチョークを使って書き込むと、よく見えない。模造紙に投影すると、ペンで付けた色が見やすい。板書はきちんとノートに書きたいという気持ちが生徒にはある。生徒のかいたものを、「iPhone」の「スキヤナープロ」を使って写した。身近にある機器を有効に使うことで、様々な授業の展開ができるのではないかと考えている。

工藤（秋田南高中）：課題設定がよかったです。また、手元にある資料やデータを駆使して考えさせた

工藤（秋田南高中）：課題設定がよかったです。また、手元にある資料やデータを駆使して考えさせたことが、集中して課題に向かえた要因となった。平田先生の声かけによって生徒達は、資料をきちんと活用できていた。

菊地（秋田県立大）：パワーポイントでスライドが次々に変わると、生徒がプリントに書き終わらないうちにスライドが進んでしまうことがある。だから、大切な図を長く投影する今日のスタイルはわかりやすい。今日の授業では、板書以外もメモしている生徒がたくさんいたので、いいなと思った。生徒の考える時間のある授業だった。

## 協議題2 「主体的対話的な学習手段、評価の方法について」

平田（授業者）：この後、「表から被験者の状態を読み取り、その根拠を明確に説明することができる」について評価する。自身のかいたグラフが妥当であるか、考えの根拠があるか、論理的な表現になっているかを見取りたい。

阿部（司会）：生徒に活動させた後の評価のしかたを、事例もあれば紹介してもらいたい。

三浦（能代松陽高）：プリントを集めて内容をチェックすることが評価の一つである。個人の活動の評価とグループでの活動の評価が必要だが、どう評価すればよいか自分も悩んでいる。

佐藤（秋田南高）：ジグソー法を使うときは評価が難しい。物理の授業では、「解答作成リーグ」ということでよい解答づくりを目指す活動を取り入れている。生徒による相互評価や教師による評価ができる。今日は結果をスクリーン上で共有して評価し合えたのがよかったです。この後、掲示物にして見合うことができれば一層よい。中等部でやっている「成果物を評価し合う」ことは刺激になる。

斎藤（秋田北高）：プリントに自己評価欄を設けている。グラフを正しくかいてあるか、根拠を述べているなどをA B Cで評価させ、到達度を測っている。自己評価が低い生徒には、どこがわからないか分析させている。ジグソー型の学習をするときは、担当ごとにグループをつくり、話し合わせる。自己評価は、後で教師が判断するときの助けになる。生徒の自己評価を教師が見て、授業にフィードバックさせることができる。

松田（秋田南高）：去年の授業ではパソコンでデータを入力し、それを共有する学習をした。データは、「Classi」を利用して誰でも見られる。今日の授業で、ある生徒が自分の間違いに気付き、それを他の子に教えていた。その辺りを評価するには自己評価しかないと思った。

佐藤（秋田南高）：新テストや新学習指導要領の内容を研究している授業だった。基礎的語句や知識の確認もしていた。新テストや新学習指導要領は、自然科学のサイエンスの部分を、テクノロジーに応用させる流れを生徒達に追わせるのが目的だと感じる。本時は、最初に知識を確認して、ミッションで応用しようという授業構成になっていた。農学や医学の分野で使われている知識を、授業でもきちんと使っていることに感銘を受けた。

## （5）指導助言

### 1 S G Hの指定事業と授業改善について

S G H指定事業には3つの柱がある。①問題解決力を育成する授業研究、②カリキュラム開発、③生徒の課題研究の指導に関する研究である。ここで取り組んでいることを発信して、実践してもらう使命もある。今日はすばらしい発信をしてくれた。人をつくるには授業が第一。授業から学校をつくる、授業から地域をつくる、授業から日本をつくることにつながる。授業第一の視点をもって過ごしたい。

## 2 本日の授業から学んでいくこと

素晴らしい授業だった。多大な準備と深い研究がされたことは参観した先生が感じたと思う。目標の設定が非常によく、授業のゴールが指導案から読み取れた。「主体的・対話的で深い学び」で特に難しいのは「深い学び」の部分。「深い学び」は、「比較する、練り上げる、見出す、読み取る、関連づける」がキーワード。今までの「理解する」「まとめる」「表現する」などは浅い学びに分類される。そうした視点で見ると、「ミッション」で特定させるという仕掛けは素晴らしいかった。表やグラフから「読み取り、比較する」、そして「見出す」といった深い学びの要素が入っていた。「ミッション」のための活動は、研究室めぐりのようだった。それぞれのデータの前で、生徒同士が議論する姿はまさに対話的。教材が生徒の目を引くものなので、主体的な学びになった。本校が目指す「課題解決型の授業」「主体的・対話的で深い学び」のモデルのような授業だった。評価については、観点別評価が求められている。定期検査でも評価できる。意欲関心も検査で見る方法がある。検査に観点別評価項目を入れる学校もある。小学校や中学校のテストには観点別評価項目が書いてあるので、それも参考になる。

平田先生の授業からは、日頃の生徒との信頼関係や授業研究への意欲が感じられた。また、教えてくてしょうがないという気持ちが先生の表情に表れていて、生徒も参観者も前向きな気持ちになれた。研究授業は大変だが、参観者にやる気をもたせることも大きな目的であることから、今日はよい時間であった。

# 中等部外国語科 英語 学習指導案

学級 3年1組27名  
場所 3年1組教室  
授業者 吉澤孝幸

## 1 単元名 Unit 6 「Striving for a Better World」

### 2 単元の目標

- (1) 関係代名詞の働きを理解し、それらを活用し人物や出来事について適切な説明ができる。  
【知識及び技能(1)エ】
- (2) 社会的な話題について書かれた英文の概要や要点を口頭で伝えた上で、与えられたテーマに関連した自分の経験や感想などを述べ合うことができる。  
【思考力、判断力、表現力等(3)エ】
- (3) 場面や状況に応じて、相手に配慮しながら主体的に意見や理由などを伝え合おうとする。  
【学びに向かう力、人間性等】

### 3 取り上げる教材

教 材：「New Horizon English Course 3」（東京書籍）

### 4 本単元で育成しようする「思考力・判断力・表現力」

- (1) 英文から読み取った情報に関連させて、自分の経験や感想などを伝え合う力  
(2) 相手の発話や質問に対して、不適切な間をおかず的確に対応できる力

### 5 評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
関係代名詞の働きを理解し、それらを活用し人物や出来事について適切な説明ができる。	限られた時間で自分の考えを構成し、読んだ内容に基づいて意見や理由などを述べた上で相手からの質問に対して的確に応答できる。	場面や状況に応じて、相手に配慮しながら主体的に意見や理由などを伝え合おうとする。

### 6 生徒と単元

#### (1) 《生徒の実態》

What do you think of when you hear *something*? Tell me anything that comes from your mind when you hear it. という問い合わせを1年次から用いて、その場でテーマを与えて表現させる機会を3年間継続してきた。また、これまでの勤務校では達成できなかった「聞いたり読んだりして得た情報の概要や要点を、簡単な英語で言い換えて伝えることを「目指す姿」として3年間継続して行い、誤解なく伝えることができる段階に到達しつつある。理解した英文の内容を自分の英語で伝えることは、その理解が自分なりに再構成できるかどうかを確認する上で意味がある。生徒もこの趣旨を十分理解して1年次から活動に取り組んできており、同時に相手の発話に瞬時に対応できる力も時間経過とともに育成されていると感じる。より正しい言語形式と適切な語の選択を継続的な課題としている。

## (2) 《本単元について》

本単元では、国外で偉業を成し遂げた人物の紹介が扱われている。テーマとなる人物のたどった生き方を通して、生徒の気持ちを搖さぶることができる単元である。Unit 5では、読んだり聞いたりして得られた情報に対して、賛否を述べた上でその理由などを伝え合うことを行った。本単元で扱われているアウンサンスーーさんがノーベル賞を受賞したことや病の家族がいる時にも政治活動を続けたことなど、多様な考え方方が生まれるような言語活動につながる情報がある。これらの事実についてさらに踏み込んだ英文を読み、関連する自分の経験や感想を述べ合う言語活動を行わせたい。

本単元では、「読むこと」を理解にとどめず、他の技能へ派生させる「起点」と考えている。「情報を得ること」や「英語表現を取り込むこと」を読む目的とし、生徒がそれらを積極的に活用していくことが期待される。

## (3) 《(1) (2) を受けた、本単元の指導について》

限られた時間で自分の考えを構成するために、1年次よりメモに基づくスピーキング指導を行ってきた。その際、[A] Something happens. → [B] We think something. → [C] We feel something. → [D] We behave. の流れを一つの例として用いてきたが、多様なメモに基づいて内容を整理することに重点を置くため、本単元ではメモの観点は生徒に任せることとした。メモ書きから話すことは、主としてスピーチ（発表）における即興性を育成するための手段であり、発表の後に教師や生徒同士のフィードバックを通してより「生きた情報」が教室の中でやり取りできるようにしたい。そして、生徒がその時点での知識や英語力を総動員し目的を達成する「対応力」を身に付けることができるのだと考える。このことは、「教室」は生徒にとって生きた英語を使用する最も身近な「場」であり、今回の学習指導要領の改訂において「言語の使用場面」において（ア）生徒の身近な暮らしの場面と（イ）特有の表現が使われる場面との順番が変わった理由と軌を一にするものと理解している。

## 7 全体計画（総時数 8 時間）

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 (1 時 限)	・接触節の語順を理解し、身近な物の説明を聞いて理解できる。	・接触節を用いて身近な所持品についてスピーチを行う。	・日本語との語順の違いについて気付きを与える場面を設定する。	・接触節の言語形式を理解している。 【知識及び技能】 (ワークシート観察)
2 (2 時 限)	・関係代名詞(who/which)の語順を理解した上で、人物や物についてのクイズを作り紹介できる。	・The Quiz Showを行う。	・共通のヒント数と観点を示す。	・関係代名詞で言い換えを図り、的確なヒントを作っている。 【知識及び技能】 (ワークシート観察)
3 (3 時 限)	・対話文の内容を踏まえてRole Playができる。	・Dialogの場面を基に兵士とスーーさんのロールプレイを行う。	・ロールプレイにおける内容を重視しながらも言語形式における正確さにも焦点を当てたフィードバックを行う。	・場面を想像して独自の発話が見られる。 【思考力、判断力、表現力等】 (活動の観察)

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
4 (4 ~ 5 時 限)	・本文内容（2セクション）を読んで、写真とキーワードを基に主要な点を表すメモを完成させ、自分の英語で言い換えて伝えることができる。	・教科書本文の概要をメモを基に伝えた上で感想を述べる。	・タイムラインを準備して出来事の流れを捉えやすくする。	・落としてはならない点に留意して口頭で伝えている。 【思考力、判断力、表現力等】 (録画映像分析)
5 (6 時 限)	・初見の英文の要点を捉えた上で、テーマに自分の体験を関連させて伝え合うことができる。	・初見の英文の大切な点を抽出し、自分の体験と関連させて考えや気持ちを伝え合う。	・限られた時間に内容を構成できない場合は、メモ書きの観点を個別に与える。	・限られた時間で考えを構成し発表し、応答できる。 【思考力、判断力、表現力等】 (活動の観察)
6 (7 時 限)	・教科書の内容に関連した英文を読み、スチーさんの行動について自分の立場を明らかにした上で賛否やその理由を伝え合うことができる。	・読んだ内容に基づき、スチーさんの行動についての意見を述べ合う。	・仮定法の表現を用いる部分については参考となる文型を提示する。	・理由を的確に述べることができている。 【思考力、判断力、表現力】 (録画映像分析)
7 (8 時 限)	・前の時間に話した内容を文字として書いて言語形式の振り返りを図る。	・与えられたテーマについて自分で感じたことや意見を書く。 ・友達の書いた内容にコメントを書く。	・話す活動と異なり、慎重に正しい言語形式を選択できるよういくつかの注意点を共有する。	・正しい言語形式で書いている。 【思考力、判断力、表現力等】 (後日ワークシート)

## 8 本時の計画 (本時 6 / 8)

### (1) 本時の目標

スチーさんの決断について書かれた英文を読み、その要点を捉えた上で、メモに基づいて自分の経験や感想などを伝えたり、的確に応答したりすることができる。

【思考力、判断力、表現力等】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	1 Talk and Report  教科書にあるスチーさんの情報を基に、概要を伝える。	グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィードバックから話題を発展させる。</li> </ul>	
展開	2 Interaction for Review  教科書にあるスチーさんの情報を基に、概要を伝える。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> スチーさんの考え方を読み取り、自分の体験や感想などを伝え合おう。 </div> 3 Today's Story 1) Reading the original text 読む目的に沿った情報を得る。 2) Interactions for summary やり取りを通して、読み取った情報を共有する。	グループ	<ul style="list-style-type: none"> <li>必要に応じて、視覚的な情報を与える。</li> </ul>	
	4 Talking Time 1) Key word 与えられたテーマについて、話す内容を構成する。 2) Talking Time in groups グループでそれぞれの意見や感想を共有する。 3) In the whole class. 学級全体で発表を共有する。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>インターラクションを通して、生徒が読み取った情報を整理する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>指定された時間内で伝える内容を整理し、体験や感想などを伝え、的確に応答もできる。</li> </ul> <p>【思考力、判断力、表現力等】 (活動の観察) (後日スピーキング テスト録画分析)</p>
まとめ	5 Feedback  学級全体でのやり取りを内容面と言語形式の面から振り返る。	全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語使用の本質を振り返るようにさせる。 (宿題)</li> </ul>	

## 9 分科協議会記録

日時：10月26日（金）

会場：1年F組教室（高校外国語科と合同）

指導助言者：秋田県教育庁高校教育課 石井むつみ 主任指導主事

### （1）本校における教科の目標

国際的な視野に立つグローバルリーダーを育成するため、実践的な英語力を身に付け、自分の意見を英語で表現できる力を養う。

### （2）本授業のねらい

スチーさんの決断について書かれた英文を読み、その要点を捉えた上で、メモに基づいて自分の経験や感想などを伝えたり、的確に応答したりすることができる。

### （3）授業者から

ウンサンスチーさんの決断についての英文を読ませ、そこに内在する「難しい決断」をテーマに生徒に言語活動をさせた。以前も同じ流れで授業をした際、教科書の内容がなくても言語活動ができたのではないかという指摘をいただいた。本日の授業もそうではなかったか、ということを一つの議論の点と考える。二つ目は、教師自身の言語形式の正確さについて。授業の後半、生徒がメモをもとに自由に発表する場面において、内容面と言語形式の点でどうフィードバックを与えるか。リキャスティングをより正確、適切に行い、生徒に言語形式への気づきを与えるにはどうすればよいか。

### （4）協議

協議題「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり伝え合ったりする力を育成する手立てについて」

近江（大曲高）：先生が伝えたいことが生徒に伝わっていた。教師・生徒双方の英語レベルが高く、両者によりケミストリーが生まれている。おそらく英検2級レベルの生徒がかなりいるのではないか。単元の授業計画8時間目、書く活動でどこを評価するのか拝見したい。

吉澤（授業者）：この秋に2級取得が1名、準2級の一次に合格した生徒も多い。書く活動について、何回かに一回は丁寧にフィードバックして返すようにしている。言語活動をしたときは丁寧に添削し、作品のようにして生徒に返してあげたい。

浅利（大館鳳鳴高）：多少苦手であっても、生徒が自分の意見を言おう、聞こうという雰囲気ができあがっている。先生のクラスルームイングリッシュを100%理解し、何をすべきかがわかっている。今日の授業の中ではrecastは必要なく、書く活動で指摘、アドバイスしてあげればよい。

吉澤（授業者）：Recastには、言語形式を形成するとともに、生徒とのやり取りを発展させていく目的がある。生徒とのやりとりを意識して授業を行った。

熱海（岩手・一関第一高）：生徒の発表する姿勢がすばらしいが、他の教科でも同様なのか、それは学校設定科目などで育成されたものなのか。高校入学後、高入生と中入生の間で英語の学力差が開くと思われる。

吉澤（授業者）：他教科の授業も通じて発表の姿勢が養われている。英語も他教科も、説明して板書を写すという授業は行っていない。今まで上位を伸ばすことに力を入れてきたが、下位者に対してもスキルアップできる時間を週に何回か設けている。全員が秋田南高校に合格できる力をつけさせたい。

### （5）指導助言

指導案のゴールが明確で何をどのように指導したいのかが分かる。卒業時に身に付けさせたい力も明確で新学習指導要領の趣旨をとらえている。本時の授業では、生徒へのフィードバックが素晴らしい。生徒たちは伝える喜びにあふれ、自分の意見を認められているという安心感に包まれていた。こういう授業ができる、生徒の成長に関わることができるのは教師の醍醐味である。

# 高等学校外国語科 コミュニケーション英語 I 学習指導案

学級 1年F組40名  
場所 地歴講義室  
授業者 伊藤孝紘

## 1 単元名 Lesson 6 The Story of PlayPumps

### 2 単元の目標

- (1) 相手に配慮しながら、主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする。  
【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- (2) 必要な情報を聞き取ったり読み取ったりして、概要や要点、詳細を捉えることができる。  
【外国語理解の能力】 ((1)のアとイ)
- (3) 聞いたり読んだりしたことを基に、自分の考えを論理性に注意して伝えることができる。  
【外国語表現の能力】 ((1)のウ)
- (4) 場面や状況、目的に応じた表現や論理の展開を表す表現についての知識を身につけている。  
【言語や文化についての知識・理解】 ((2)のイ)

### 3 取り上げる教材

教材：「Revised ELEMENT English Communication I」（啓林館）

### 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

社会的な話題について、英語を聞いたり読んだりして、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に捉えたり、自分自身の考えをまとめたりする力

### 5 評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
コミュニケーションに 関心をもち、積極的に 言語活動を行い、コ ミュニケーションを図 うとしている。	英語で話したり書いた りして、情報や考えな どを適切に伝えてい る。	英語を聞いたり読んだ りして、情報や考えな どを的確に理解してい る。	英語やその運用につ いての知識を身につけて いるとともに、言語の 背景にある文化などを 理解している。

### 6 生徒と単元

#### (1) 《生徒の実態》

入学当初から、積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする意欲があり、身近な話題であればグループワークやペアワークで英語を用いてやりとりをしている。これまでの授業では、扱った内容のリテリングなどを通して情報をまとめる活動を行ってきたが、得た情報や知識を基に自分の考えを英語でまとめ、発表する機会は少なかった。また、グループやペアで日本語を使用する場面が多くなってしまっている。

#### (2) 《本単元（教材）について》

本単元では、アフリカのザンビア共和国で水の確保に起因する諸問題を解決するべく考えられたPlayPumpsについての理想と現実について扱う。多くのメディアや関係機関がPlayPumpsの計画

について多角的に評価をしており、様々な観点からこの問題について述べている。これらの記事や報告書を用いて情報を読み取り、それらの情報を基に PlayPumps を運用する上での改善策を考える中で、英語で情報を読み取り、まとめ、発表するための思考力・判断力・表現力を養う。

### (3) 《(1) (2)を受けた、本単元の指導について》

インプット活動を充実し、改善策を考える上で必要な背景知識をリーディング活動とリスニング活動を通じて与える。これらの活動では概要や要点を捉える活動や、詳細を理解する活動、話し手や書き手の意図を読み取る活動など、教材の種類と目的に応じた活動を行い、生徒のリーディングスキルとリスニングスキルを高める。

アウトプット活動では、使用する表現や語句をあらかじめ与えるなどの支援を活用しながら、グループやペアで英語を用いてコミュニケーションをとり続けられるようにする。また、グループやペアを変えながら授業を進めることで様々な意見に触れる機会を与える。

## 7 全体計画（総時数10時間）

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 ( 1 時 限 )	・ザンビア共和国の基本的な情報を資料から読み取ることができる。	・ザンビアについて資料から基本的な情報を読み取る。	・必要な情報が読み取れるよう、難しい語句や表現を、簡単な表現や既習の表現に言い換える。	・資料から必要な情報を読み取ることができる。  【理解の能力】 (ノート点検)
2 ( 2 ～ 7 時 限 )	・PlayPumpsに関する情報を読み取ったり聞き取ったりして、概要や要点、詳細を理解することができる。	・PlayPumpsに関する情報について記事や報告書などの資料から必要な情報を読み取ったり聞き取ったりする。  ・読み取ったり聞き取ったりした情報について意見交換する。	・必要な情報が読み取れるよう、難しい語句や表現を、簡単な表現や既習の表現に言い換える。  ・必要な情報が聞き取れるよう難しい語句や表現を予め示し、聞き取る視点を変えながら何度も繰り返す。	・聞いたり読んだりした内容を的確に理解している。  【理解の能力】 ・論理展開を表す表現を理解している。  【知識・理解】 (ノート確認)
3 ( 8 ～ 10 時 限 )	・PlayPumpsを運用する上での改善点について自分の考えをまとめ、発表することができる。	・得た情報についてまとめる。  ・PlayPumpsが抱える課題をまとめる。  ・課題の一つについて自分の考え方や解決策をまとめる。  ・解決策について論理性に注意して発表する。	・伝わりやすい発表ができるよう、事前にペアやグループでの練習時間を十分に確保する。	・論理性に注意しながら自分の考えを述べている。  【表現の能力】 ・相手に配慮して話したり聞いたりしている。  【関心・意欲・態度】 (行動の観察) (ノート分析)

## 8 本時の計画（本時 8／10 時間）

### (1) 本時の目標

PlayPumps が抱える課題を踏まえて、解決策について自分自身の意見を述べることができる。  
【外国語表現の能力】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	1 前時までに聞き取ったり読み取ったりした内容をまとめる。	グループ	・情報を分かりやすくまとめられるよう、ワークシートを用いて進める。	
	2 本時の目標と学習の流れについて確認する。  PlayPumps が抱える課題を踏まえて、解決策について自分自身の意見を述べることができる。	全体	・いつでも参照できるよう、本時の目標をワークシートに記載する。	
展開	3 PlayPumps が抱える課題から、グループで相談して一つを選ぶ。  4 その課題について、各自で解決策を考え、まとめる。  5 意見をグループ内で共有し、他の生徒の意見にフィードバックをする。	グループ 個	・英語でのコミュニケーションが円滑に進むよう、やりとりにおいて有用な語句や表現を示す。  ・論理的に考えをまとめられるよう、構成の例を示す。  ・英語でのコミュニケーションが円滑に進むよう、やりとりにおいて有用な語句や表現を示す。	・論理性に注意しながら自分の考えを述べている。 【表現の能力】 (ノート分析)
まとめ	6 本時の学習を振り返る。	個	・本時の学習を整理することができるよう、振り返りの時間を十分確保する。	

## 9 分科協議会記録

日時：10月26日（金）

会場：1年F組教室（中等部外国語科と合同）

指導助言者：秋田県教育庁高校教育課 青山 博輝 指導主事

### （1）本校における教科の目標

国際的な視野に立つグローバルリーダーを育成するため、実践的な英語力を身に付け、自分の意見を英語で表現できる力を養う。

### （2）本授業のねらい

PlayPumps が抱える課題を踏まえて、解決策について自分自身の意見を述べることができる。

### （3）授業者から

単元の目標を立てる際に、output を想定して input 活動を行うことを意識した。教科書を読み解くのが目標ではなく、それを使い最後に output の取り組みをさせることを考えた。前時は PlayPumps の課題について論理的に解決策を提案することを目標に活動したが、日本語に逃げてしまう生徒もいた。その改善策として MERRIER approach を意識し、guess who や small talk を活用することで、言語使用の障害となる affective filter を下げるよう心がけている。本日の授業でも行ったように、recast を通じて生徒の発話を広げることなどは普段から意識している。

### （4）協議

協議題「論理的な思考を促し、適切な英語で表現する力を育成するために有効な手立てや工夫について」

近江（大曲高）：話し合いの中で日本語の介入をどこまで許容し、どの段階でストップをかけるべきか。我々も今は日本語で討議しているが英語だとフラストレーションがたまる。教員の recast をどこまでやればよいのか。生徒に self-recast させるような進め方ができればよかったです。

伊藤（授業者）：今回は英語の表現を与えたので、英語でやってほしかった。前時は、内容を深めるために日本語でやらせた。普段から悩む点であり、先生方のやり方を教えていただきたい。

近江（大曲高）：自分ならある生徒の発言を、「君たちならどう直すか」と周りに聞く。生徒に言わせると考えるし、最終的に生徒に気づいてもらうことが大事。教師の recast は必要だが、やりすぎるとよくない。

今野（飯島中）：評価規準の中に「論理性に注意しながら自分の考えを述べている」とあるが、その方法として「ノート分析」としている部分を詳しく聞きたい。

伊藤（授業者）：最後の振り返りでプリントに自己評価と今日学んだこと等を書き、論理性のところはワークシートを見て評価する。論理性の部分は原因と解決策の論理的結びつきがきちんとしているかを評価する。

金（司会）：英語で話しなさいと言ったときに、ただ話し合って終わってしまうことがある。生徒の考えを深め、学びを得られるような実践例はないか。

佐藤（湯沢南中）：中1～3で毎時間 small talk を設けている。良いやり取りは全員の前で発表させ、良い点を取り上げることで苦手な生徒も頑張っている。英語でのやり取りは難しいので日々の積み重ねが大事。キーワードを先生が取り上げることで、全員の前で論理性のある意見を言うことができたかもしれない。

金（司会）：活動を止め、キーワードをシェアするなどの流れがあつてもよかつたかもしれない。高校ではハイレベルなディベート活動で成果を挙げている一関第一高の取り組みはいかがか。

熱海（岩手・一関第一高）：内進の生徒の方が英語ができる。授業の中で15分間のマイクロディベ

ートを行い、毎回メンバーを替え、内進生が外進生をヘルプし、お互い協力する雰囲気を作っている。ディベートのトピックは身近なものとし、2~3週間でトピックを変える。例えはあるトピックに対して、①グループごとに advantage と disadvantage を書かせる、②別グループの生徒が黄色で直す、③ALTが赤で直す、④班ごとに出たアイディアを共有し使える表現を増やす、などの方法を実践している。

#### (5) 指導助言

グローバルリーダーの育成という SGH のテーマが色濃く反映されていた。生徒の活動が主体の指導案だが、実際にやってみると難しい点も多かったようだ。グループの意見をまとめたり、相手を尊重して意見を統合させたりする生徒も見られた。生徒がレッスン内でできることを実感できる形にもっていってほしい。目標を明確に持たせ、より高いレベルでの授業展開を目指してほしい。

# 中等部 J. E. Communication 学習指導案

学級 1年3組26名  
場所 1年3組教室  
授業者 志田 裕子  
杉山 芙美子（学校司書）

## 1 単元名 めざせ！スピーチの達人！！

### 2 単元の目標

- (1) 声量や速さ、プロミネンスなどの音声的特質を意識し、話したり聞いたりすることができる。  
【知識及び技能（1）ア】
- (2) 相手の反応を踏まえながら、グループのテーマが分かりやすく伝わるようスピーチの構成や表現を工夫することができる。  
【思考力、判断力、表現力等A（1）ウ】
- (3) グループのテーマが伝わるよう、グループで積極的に話し合い、印象に残るスピーチを行おうとする。  
【学びに向かう力、人間性等】

### 3 取り上げる教材

教材：秋田魁新報・讀賣新聞・朝日新聞・毎日新聞・日本経済新聞  
※生徒が選んだ新聞記事をもとにスピーチを組み立てる。

### 4 本単元で育成しようとする「思考力・判断力・表現力」

- (1) 相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する力  
(2) 文章を読んで理解したことに基づいて、他者に説明したり、主張したりする活動を通して、自分の考えを確かなものにする力

### 5 評価規準

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
グループのテーマが分かりやすく伝わるよう、話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方などを意識して話している。	グループのテーマが分かりやすく伝わるよう、スピーチの構成や表現を工夫して話している。	互いのスピーチがよりよいスピーチとなるよう、グループで積極的に話し合い、印象に残るスピーチを行おうとしている。

### 6 生徒と単元

#### （1）《生徒の実態》

これまでのJ. E. Communicationの授業では、「自己紹介」「自分の地域のお気に入りの場所」「自分の好きなもの」「好きな本」というテーマで、スピーチ活動を行ってきた。今回取り組むグループリースピーチは、「自分の地域のお気に入りの場所」を紹介するスピーチ活動で経験している。グループリースピーチとは、グループのメンバーそれぞれがスピーチを組み立て、それらをつなげて、1つのスピーチとして完成させるものである。

スピーチ活動については、ほとんどの生徒が意欲的に行うことができる。後期のJ. E. Communicationの授業では、自分の思いを伝える言葉や表現を工夫し、声量やプロミネンス等を意識した話し方ができるところまで高めていきたいと考えている。

#### （2）《本単元について》

本単元は、これまで集めた新聞記事から印象に残ったものを選び、各グループでグループのテーマを設定し、グループリースピーチとして発表するものである。

本校1年部国語科では、新聞を教材とした学習をこれまでいくつか実践してきた。7月にはコ

ラム学習を行った。また、夏休みには、印象に残った新聞記事について感想や意見をまとめる学習を課題とした。そのため、生徒はこれまで新聞を読み、記事を集める活動を自主的に行ってきている。それら集めた記事の中から、スピーチの題材を選ぶこととした。

ただ、今回はグループリースピーチとして発表するため、個人で選んだ記事とグループ全員が選んだ記事とを読み合わせて、その共通点を読み取る必要がある。また繋がりが薄い場合は、他の記事を探すことでも考えられる学習活動となる。

つまり、今回の学習では、話し方を鍛えるという視点から、スピーチの達人をめざすことはもちろんだが、日常生活や社会生活の中で起きている様々な出来事に关心をもち、それらが記された文章の内容を把握し、精査、解釈する学習の過程で、自分の考えを確かなものとすることも大事にしたいと考えている。

### (3) 《(1) (2) を受けた、本単元の指導について》

スピーチの練習の段階では、他のグループと聞き合い、相互評価しながらスピーチの技を鍛えていく。また、客観的に自己評価が行えるようにタブレットを使用して、スピーチの様子を映像で録画し、それを自分たちで見て振り返りに生かすようにする。

5月に、J. E. Communication の授業ではビブリオバトルを行った。各学級で予選を行い、代表2人を選んだ。そして、6人で学年ビブリオバトル大会を行ったが、生徒は大変意欲があった。今回もその形式をとりたいと考えている。11月1日のPTAにその発表の場を設定し、保護者と生徒、学年部の先生方でスピーチを聞き合い、生徒一人一人の練習の成果を価値付けていきたい。そして、自分の言葉で、自分の思いや意見を豊かに伝え合い、それを確かに聞き合うという学習活動のよさを実感し、どのような時も実践できる生徒を育てていきたい。

## 7 全体計画（総時数5時間）

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 ( 1 時 限)	・グループのテーマを決め、スピーチを組み立てることができる。	・集めた新聞記事からグループのテーマを決め、それぞれのスピーチを組み立てる。	・教師の方でも、様々な内容の記事を集めおき、提示できるようにする。	・グループで積極的に話し合い、印象に残るスピーチを行おうとしている。 【学びに向かう力、人間性等】 (活動の観察) (ワークシート点検)
2 ( 2 ～ 3 時 限)	・グループのテーマが分かりやすく伝わるよう、スピーチの構成や表現、プレゼン資料を工夫することができます。	・グループで、発表原稿を吟味し合い、リースピーチの練習をする。 ・プレゼン資料を作成する。	・グループ全体としての構成を工夫するよう助言する。 ・資料に提示する言葉や見出しを吟味するよう助言する。	・話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方などを意識して話している。 【話す・聞く能力】 (活動の観察) (プレゼン資料確認)
3 ( 4 時 限)	・話し方やスピーチの内容・表現等について助言し合いスピーチを工夫することができます。	・他のグループとスピーチを聞き合い、話し方や内容・表現等について、助言し合う。	・各グループの課題を提示し合い、聞き合う（助言し合う）ポイントを確認するよう助言する。	・グループのテーマが分かりやすく伝わるよう、スピーチの構成や表現を工夫して話している。 (活動の観察) (ワークシートや録画ビデオ分析)

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
4 (5時間)	・改善点を意識して、より印象に残るスピーチとなるよう工夫することができる。	・前時に気付いた改善点やよかつた点を意識して、リレースピーチを修正し練習する。	・各グループの修正点を確認し、価値付けるようにする。	・グループで積極的に話し合い印象に残るスピーチを行おうとしている。 【学びに向かう力、人間性等】 (活動の観察)

## 8 本時の計画 (本時 4／5時間)

### (1) 本時の目標

話し方やスピーチの内容・表現等について助言し合い、グループのテーマが分かりやすく伝わるよう、スピーチを工夫することができる。

【話す・聞く能力】

### (2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	1 各グループで、リレースピーチを練習する。	グループ	・適切な声量を意識できるよう、各グループでスピーチ練習をする時間をとる。	
展開	2 本時の学習のめあてを確認する。  話し方やスピーチの内容 ・表現等について助言し合い、印象に残るスピーチとなるよう修正しよう。	全体	・各グループの課題を意識して、話したり聞いたりするよう助言する。  ・各グループの発表の声が重ならないよう、場の設定をする。	・グループのテーマが分かりやすく伝わるよう、スピーチの構成や表現を工夫して話していく。 【話す・聞く能力】 (活動の観察) (ワークシートや 録画ビデオ分析)
まとめ	3 他のグループと互いにリレースピーチを聞き合い、良かつた点や改善点を伝え合う。  4 アドバイスをもとに改善点を話し合い、より印象に残るスピーチとなるよう修正する。	グループ	・各グループの本時の課題を伝え合い、聞き合う(助言し合う)ポイントを確認するよう助言する。  ・タブレットの映像から、自分たちで気付いたことも振り返るようにする。	
	5 本時を振り返り、次時の学習を確認する。	全体	・次時への意欲につながるよう教師からも本時によかつた点について生徒に伝える。	

## 9 分科協議会記録

日時：10月26日（金）

会場：1年B組教室（高校国語科と合同）

指導助言者：秋田県教育庁義務教育課 大嶋 隆夫 指導主事

### （1）本校における教科の目標

日本語や英語による表現に多く触れ、目的に応じた多様な表現活動を通して、実践的なコミュニケーション能力を身に付ける。

### （2）本授業のねらい

話し方やスピーチの内容・表現等について助言し合い、グループのテーマが分かりやすく伝わるよう、スピーチを工夫することができる。

### （3）授業者から

南高校中等部独自の教科であり、Communication の態度や手法を鍛える、自分の思いを伝える生徒を育てる、ということが狙いだ。前段階の授業では、総合的な学習の時間とつなげて、地域貢献として保育園の園児を招いて読み聞かせを行った。「J.E.」なので、英語の絵本の読み聞かせも英語教員と連携して行った。その実践の前には、「話す」という技術に関して、本校OGのアナウンサー相場詩織氏を講師に招き、話す技術・思いを伝える大切さを語ってもらった。

本单元は、新聞記事を集めて正確に読み取った上で、グループでスピーチするためにどのような内容や切り口が必要か、取捨選択して、協働的にリレースピーチをする。グループでの活動にしたのは、そこに Communication が生まれるからだ。今日は、助言し合う場面も見てもらったが、他のグループから、記事の取り上げ方や補足的な事項等、内容についての助言も飛び出していた。授業者として注目した部分は、タブレットを見ながら、修正点について客観的に話し合うことができていたか、良い点、改善点、自分の思いをしっかりと伝え合っているか、ということだ。学校司書とはビブリオバトルの実践活動でも T.T をしてきた。今後も、高校や他教科の教諭・学校司書・外部人材等、連携を深めながら中等部生をよりよく育てて行きたい。

### （4）協議

協議題「協働的な学びを通した表現力育成の在り方～時事（新聞）を題材として～」

佐々木（岩手・水沢高）：後輩たちが立派で感激した。声がもう少し。暗記ではなく、自分自身にして話しているなと思った。中学校の生徒がこんなに話せるのかなと驚いた。このような話す指導に関しては、継続的にしてきているのか？

志田（授業者）：機会を捉えて常にやっている。OGのアナウンサーの助言が効いている。

SGHの発表をたくさん聞いてきている。いずれ、あなるんだ、あなりたいという思いで生徒たちが取り組んでいると感じる。

黒丸（横手清陵学院中）：子どもたちの活動が洗練されていると思った。学校設定教科ということがどうなっているのか、聞かせてほしい。また、生徒同士の評価票はずいぶん細かい項目について生徒がよく書き込んでいたが、設定した項目について聞きたい。

腰山（秋田南高）：学習指導計画参照。評価の仕方は研究しながら進めている。現時点ではルーブリック評価的ではあるが、高校の学校設定教科「国際探究」のように、評価の観点である活動の看取りやワークシート類、ポートフォリオ等を点数化して評価していくようにしたい。どの観点にどういう配点を置くかが検討課題だ。

志田（授業者）：声量や間の取り方、話のスピードについては、特に譲れない項目。普段の授業でも、相手に聞こえるように最後までしっかりした声で話すということは大切なことだ。意識して育てていきたいことだ。

鎌田（土崎中）：シート類への指導者の書き込みが充実していて、普段からの行き届いた指導を感じられた。指導計画を見ると、本時間が5分の4時間となっているが、発表用掲示物の充実度等を見ると実際はもっと時間をかけているのではないか？またこの科目を高校の英語のプレゼン力育成に戦略的につなげていくというような狙いはあるのかどうか？

志田（授業者）：授業は準備にたくさん割いたりしていないが、放課後残ったりして活動してもらってはいる。週1なので、授業時数を多くかけることはできない。記事や掲示物について機会を捉えて生徒と会話したり意思交換したりしている。

腰山（秋田南高）：中高一貫して、グローバルリーダー育成を目標としている。研究説明で示した素養のうち、プレゼンテーション能力や実践力を、中学時から直接的に磨いていく教科となっている。日本語で考えた発表原稿を英語に訳して出力するという活動ではない。思考や論理を丁寧に学んだ上で、英語的な思考で英語の発表を考えて出力できることが理想。日本語と英語の活動を教科横断的な視点で行っている。高校のSGH的な活動へのつながりはもちろん強く意識されている。

渡部（横手清陵学院中）：理科の教員だが、中学校の科目の協議会に出させてもらった。入学して間もないのにすばらしい活動内容だった。批判的かつ建設的な意見交換をしていた。またこれまでの指導の蓄積が見える授業だった。この教科の活動の時間割上の配置や対象人員はどうになっているのか？

志田（授業者）：通常は他の授業と同様に各クラス週1時間でクラス単体で行っている。

腰山（秋田南高）：別紙学習計画にカッコで示されている、総学や特活や行事と連動して行っている学習活動については、特設時間を設けたりして、学年が一堂に会して行う場合もある。昨年は2年生が、学年全員+保護者で、ビブリオバトルをPTAの場で実践した。

## （5）指導助言

生徒の意欲にあふれた授業を提示いただきありがとうございました。これまでの中高一貫の連携努力が今回の授業公開にも表れていたように思う。中高の協議会を一体化して行うことの意義深い。今回の指導計画や指導案は、新学習指導要領の方向性が意識されたものとなっているので、新学習指導要領に触れながら話をていきたい。

国語科においては、重要な点として生徒の言語活動の充実について述べられており、その基盤となるのは生徒の語彙力だ。語彙指導の改善充実が求められている。その意味で、グローバルリーダー育成を念頭に、その能力開発を目指した今回の実践は非常に意義深い。

今回の授業について、大きく三点述べたい。

①授業の狙いが明確に設定されていた。単元名の「13歳の主張・・・」によって、生徒にとっては、どのようなスピーチを目指せばよいのか、イメージしやすかったと思う。学習のねらいがこれまでの学習を基に設定されていた。知識・技能を活用しながら更に力を高めたことが実感できた授業であったと思う。全体で改善点を確認する際に、志田先生が的確なアドバイスをして、次時にどのような改善努力をすればよいか明確にして学習意欲が高まるような終末であった。

②新聞記事を基にしてスピーチをする活動を通して、生徒の語彙を豊かにする活動に結び付いていた。記事を理解して適切な部分を抜き出したり要約したりして、分かりやすい表現に替えてスピーチする活動によって、実践的な活動を通じて語彙を習得する学習となっていた。自分の考えと新聞の情報を巧みに関連付けて活動していた。新学習指導要領では、情報の扱い方に関する指導の改善充実が位置付けられている。この活動は、情報整理に関わる項目の指導実践と言える。

③グループでの協働的な学びの在り方が工夫されていた。グループでリレースピーチをするという設定にすることで、伝える内容の検討や伝え方の改善点等を話し合うなどして、協働的な学びにつなげていたと思う。タブレットを活用しながら課題点を確認し合ったり、ワークシートを工夫して他のグループからの助言を記入する欄が作られており、記入だけでなく伝え合うことを通じて、より深い学びへの到達が図られていた。

以上三点を大きくまとめると、ねらいや生徒の実態に応じて、意図的に言語活動を設定したことで、指導の効果を高めていたすばらしい実践であったと感じた。各学校においても、言語活動を各活動に位置づけて授業実践が行われているが、新学習指導要領で重視している言語活動の充実は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と深く結び付いている。授業に取り入れた言語活動が、どのような資質能力の開発につながっているかを確認しながら、効果的に働くよう授業の中に位置付けていく必要がある。今回のように、対話的な授業展開によって、考えの広がりや深まりが生まれるように授業改善を行っていくことが、今後の研究を更に深めていくことを期待している。本日はありがとうございました。

# 第3学年3組 保健体育科学習指導案

実施日 9月25日（火）3校時  
授業者 鎌田 拓也（T1）  
大門 愛（T2・栄養教諭）  
場 所 3年3組教室

## 1 単元名 健康な生活と病気の予防

### 2 単元の目標

- (1) 健康の保持増進のために必要な生活行動や病気の予防について関心をもち、仲間と協力して資料を集めたり、意見を交換したりしながら、意欲的に学習できる。  
【関心・意欲・態度】
- (2) 健康の保持増進のために必要な生活行動や病気の予防について課題を見つけ、自分の知識や経験、資料、仲間の意見や考え方などをもとにして、選択すべき行動を判断できる。  
【思考・判断】
- (3) 健康の保持増進のために必要な生活行動や病気の予防について、科学的に理解し、日常生活の課題解決に役立つ知識を身に付けている。  
【知識・理解】

### 3 生徒と単元

#### (1) 単元観

日本人の死因の60%以上が生活習慣病であり、その生活習慣病は年々増加・若年化している。生活習慣病は中学生期には何も問題がないとしても、子どもの頃からの生活習慣がその後大きく影響すると考えられる。

本単元では、健康の成り立ちや疾病の発生要因について理解した上で、健康の保持増進のためには調和とれた食事、運動、休養及び睡眠が必要であること、喫煙、飲酒、薬物乱用などは健康障害を引き起こしやすいこと、感染症の予防について学習する。また、保健・医療機関や医薬品の有効利用、さらには社会的な取組の重要性についても学習することで、生徒の生涯にわたる健康の保持増進のために必要な資質・能力を育むことをねらいとしている。

#### (2) 生徒観

男子12名、女子14名、計26名の学級である。

近年、子どもたちの生活行動・生活習慣の乱れが指摘されているが、本校の生徒においてもいくつかの課題がみられる。新体力テストの調査結果（平成29年5月実施、当該学年生徒の数値）によると、運動・スポーツの実施状況に関して「週3日以上」：64%、「週1～2日」：4%であり、残り「月1～3日」：11%、「しない」：21%と3割以上の生徒に運動習慣が定着していないと言える。朝食の有無に関しては「毎日食べる」：96%、「時々かかる」：4%であり望ましい状況にあると言えるが、夜食の有無は「毎日食べる」：3%、「時々食べる」：23%、間食の有無においては「毎日食べる」：14%、「時々食べる」：64%と決して良好な食生活とは言い難い。

また、昨年度からスタートした本校での学校給食においては、摂食量が少なかつたり、残したりする生徒が見られる。※BMI指数：「やせ」男子33%・女子36%、「肥満」男子2%・女子0% 小・中学校を通して9年間で、食事の重要性や栄養バランスの大切さ等については系統的

に学習してきている。しかし、知識はあるものの、具体的な行動が伴わないことが普段の給食の様子からも感じられる。

### (3) 指導観

進学を控えたこの時期、自立へのステップとして、自分の健康に対する意識づけは重要である。調和のとれた生活行動・生活習慣の定着において、食生活に関する課題は生徒によつて様々である。そこで、前述の新体力テストの調査結果を使い、自分の食生活の傾向や問題点、よりよくするための改善点に気づき、主体的にバランスのとれた食事を選択し、自分の健康は自分で守ろうとする態度を育てたい。また、友達の意見を聞いたりクラス全体で話し合ったりする中で、健康な体をつくるための望ましい食生活を理解し、よりよい食習慣に改善していく意欲を育てたい。

食事の重要性、適切な食事量や摂取のタイミング、栄養バランスやエネルギー量について栄養教諭からの専門的な説明を聞き、その内容を基盤とした思考活動を行うなど生徒の関心が高まるような工夫をしていく。

本単元を通じ、単なる知識の習得ではなく、自分のこととして生活にいきる知識となるように指導したい。

## 4 全体計画（総時数 20 時間）

	学習活動	評価規準	時数
ア と 疾 病 の 発 生 要 因 と 健 康 の 成 り 立 ち	1 「健康を左右するもの」 ・健康の成り立ちには主体・環境要因があり、両者を良好に保つことが健康につながることに気付く。	・健康の成り立ちと疾病の発生要因について資料を見たり、自身の生活を振り返ったりしながら考えを深めようとしている。【関心・意欲・態度】 （発表・学習シート）	1
イ 生 活 行 動 ・ 生 活 習 慣 と 健 康	2 「運動と健康」 ・運動が身体の発達を促すとともに精神的にも良い効果があること、健康の保持増進には日常的な運動が大切なことを知る。	・若い頃からの運動は、発育期の骨や筋肉を成長させ、将来起こりうる加齢によるさまざまな疾病を防ぐことに有効であることを理解している。 【知識・理解】（発表・学習シート）	1
	3 「休養・睡眠と健康」 ・疲労の現れ方には個人差があること、健康の保持増進には心身の疲労を回復する必要があること、疲労回復の具体的な方法を知る。	・睡眠には、疲労回復だけでなく成長ホルモンが分泌されることなど健康や発育に重要な役割があることを理解している。 【知識・理解】（発表・学習シート）	1
オ や 医 薬 品 の 有 効 利 用 や 医 保 健 ・ 医 療 機 関	4 「医薬品の正しい使い方」 ・医薬品の使用法について知る。 ・医薬品の主作用と副作用について知り、副作用による健康被害について考える。	・医薬品の有効性や正しい使用法について理解している。 【知識・理解】（発表・学習シート） ・医薬品の副作用による健康被害について考えを深めている。 【思考・判断】（発表・学習シート）	2

イ 生活行動・生活習慣と健康	5 「生活習慣病とその予防」 <ul style="list-style-type: none"><li>・生活習慣によって起こる様々な病気について知る。</li><li>・生活習慣と生活習慣病との密接な関係を知り、予防のための方法を考える。</li></ul>	・生活習慣によって引き起こされる病気に関心をもち、教科書や資料を用い意欲的に調べ学習を進めている。 【関心・意欲・態度】(発表・レポート) <ul style="list-style-type: none"><li>・自らの生活習慣を見直し、生活の質を高めるための改善策や予防策について考えている。 【思考・判断】(発表・学習シート)</li></ul>	2
	6 「食事と健康」 <ul style="list-style-type: none"><li>・健康を保持増進するためには毎日の食事が大切なこと、年齢や運動量に応じた栄養素のバランスや量に配慮すること、適切な食事によって消費されたエネルギーを補給することを知る。</li></ul>	・健康の保持増進のために、日常の食生活を振り返り、自分の課題を見つけて生活を見直している。 【思考・判断】(発表・学習シート) <ul style="list-style-type: none"><li>・食事の重要性、適切な食事量や攝取のタイミング、栄養バランスやエネルギー量について理解している。 【知識・理解】(発表・学習シート)</li></ul>	2 本時 1/2
ウ 喫煙、飲酒、薬物乱用と健康	7 「喫煙と健康」 <ul style="list-style-type: none"><li>・たばこに含まれる有害物質、喫煙における生体への影響、未成年者の喫煙が体に大きな影響を及ぼし依存症になりやすいことを知る。</li></ul>	・喫煙がもたらす健康被害の内容を知り、現在の禁煙や分煙の現状を調べようとしている。 【関心・意欲・態度】(発表・レポート)	1
	8 「飲酒と健康」 <ul style="list-style-type: none"><li>・エチルアルコール摂取が及ぼす心身への影響と依存性の形成、常習的飲酒により発症する疾病、未成年者の飲酒と犯罪との関わりについて知る。</li></ul>	・アルコールが心身の働きに与える影響や健康被害について知り、自分自身のアルコールとの関わり方を考えようとしている。 【思考・判断】(発表・学習シート)	1
	9 「薬物乱用と健康」 <ul style="list-style-type: none"><li>・薬物乱用による心身への影響と薬物依存、社会へも深刻な影響を及ぼすことを知る。</li></ul>	・薬物乱用が身近な問題になっていることを知り、自らの心身に重大な被害を与えるだけでなく、社会的にも大きな影響を及ぼすことを理解している。 【知識・理解】(発表・学習シート)	1

工 感 染 症 の 予 防	1 0 「感染症と病原体」 ・感染症は病原体が原因となって起こり、直接感染や間接感染を通して感染することを知る。	・感染症が病原体の感染によって起こる病気であることを知り、感染する原因について教科書や資料を用い意欲的に調べ学習を進めている。 【関心・意欲・態度】(発表・レポート)	1
	1 1 「感染症の予防」 ・感染症の予防のために、免疫があること、また、感染症予防の3つの対策について知る。	・感染症の要因とその予防の方法について理解している。 【知識・理解】(発表・学習シート) ・身近な感染症や新たにあらわれた感染症とその予防策に関心をもっている。 【関心・意欲・態度】(発表・レポート)	2
	1 2 「性感染症の予防」 ・性感染症の疾病概念や感染経路、その実態や具体的な予防法について知る。	・性感染症の症状や特徴及びその予防について関心をもち、教科書や資料を用い意欲的に調べ学習を進めている。 【関心・意欲・態度】(発表・レポート)	1
	1 3 「エイズの予防」 ・エイズは免疫機能を壊す病気であること、また、正しい知識に基づいて行動すれば予防できることなど、専門家からの講義により知識を深める。	・エイズの原因と特徴、感染を避けるための正しい知識と予防法を理解している。 【知識・理解】(レポート) ・HIV 感染症患者とともに支え合っていける社会づくりの必要性を考えている。 【思考・判断】(発表・レポート)	2
才 や医 薬品 の有 効利 用 や 保 健 ・医 療 機 関	1 4 「医療・保健機関とその利用」 ・地域には健康の保持増進、疾病予防の役割を担っているさまざまな機関があること、また、保健・医療機関はその機能を理解して利用することを知る。	・自分たちの健康を支えている保健サービスにはさまざまなものがり、各機関がもつ機能を有効に利用する必要があることを理解している。 【知識・理解】(発表・学習シート)	1
力 守 る 社 会 の 取 組 力 個 人 の 健 康 を	1 5 「個人の健康を守る社会の取組」 ・健康の保持増進や疾病の予防には社会的な取組が必要であり、地域で行われている保健活動、民間の機関や国際的な機関で行われている保健活動について知る。	・健康の保持増進や疾病の予防には、人々の健康を支える社会的な取組が有効であることを理解している。 【知識・理解】(発表・学習シート)	1

## 5 本時の計画（8(本時)・9／20）

### (1) ねらい（本時の目標）

- ・事例や資料をもとに、日常の食生活を振り返り、健康を維持するために食生活で気を付ける内容について考えることができる。: 本時 【思考・判断】(発表・学習シート)
- ・食事の重要性、適切な食事量や摂取のタイミング、栄養バランスやエネルギー量について理解することができる。: 次時 【知識・理解】(発表・学習シート)

### (2) 展開

段階	生徒の活動	学習形態	教師の支援	評価（方法）
導入 5分	1 ヒポクラテスの名言から本時の課題を確認する。  『自分の食事のとり方について考えよう』	一斉	・古代ギリシャの医学の父の名言『汝の食を薬とし、汝の薬を食とせよ』を虫食いクイズ示し、食事の重要性に興味をもたせる。 [T1]	
展開 40分	2 資料「南子さんの1日」から問題点を考察し、グループで話し合う。	個 ↓ グループ	・「南子さんの1日」を表す資料を配付し、内容を紙芝居風に説明(PPT)してイメージしやすいようにする。 [T1・T2] ・黄色の付箋(イエローカード)に問題点を書かせ資料に貼り付け、グループ内で考えを共有させる。 [T1]	・事例や資料をもとに健康を維持するために食生活で気を付ける内容について考えまとめることができる。 【思考・判断】(発表・学習シート)
	3 グループでの話合いの結果を全体で共有する。	一斉	・問題点をイエローカードに書き出し、側面黒板の紙芝居に貼り付ける。 [T1・T2]	
	4 「新体力テスト」の調査結果を見て、自分たちの実態をつかみ、問題点を考える。	一斉	・間食の摂取状況とその内容に関するグラフを表示して(PPT)、問題点に気付きやすいようにする。	
	5 『間食や夜食はホントにダメ?』についてグループで話し合い、全体で意見交換する。	グループ ↓ 一斉	・グループで話し合い、出された考えをホワイトボードに書かせ黒板に掲示する。 [T1]	
	6 栄養教諭から適切な食事量や摂取のタイミング、栄養バランスやエネルギー量の説明を受ける。	一斉	・1日に必要な栄養分た代謝などを示し、一般的な主食、ファストフード、スナック菓子を栄養成分表示等をもとに数値化し、摂取法をイメージしやすくする。 [T2]	
まとめ 5分	7 本時の学習をふり返り、次時の学習課題を確認する。	個 一斉		

## 6 協議の視点

- (1) 他者との関わりを通して、協働的に問題を解決する活動の充実
- (2) 保健の内容に興味・関心がもてるようにする指導の工夫

## 7 研究協議会記録〈保健体育科〉

司会 金森 道  
記録 小林 明人

### 1 授業者から

鎌田：今回の単元は、生徒にとって興味をもちにくい分野である。「あるあるネタ」などを取り入れながら、身近な問題として感じてほしいと考えた。

自分の普段の朝・夕食について考える場面では、他の生徒との比較にならないように配慮した。

大門：生徒が付箋やホワイトボードに書いた内容を、話し合い等によってもっと深める場面があればよかったです。

### 2 研究協議

【協議の視点】（1）他者との関わりを通じて、協働的に問題を解決する活動の充実  
（2）保健の内容に興味・関心がもてるようにする指導の工夫

大渕：生徒の間食・夜食の捉え方に差があった。部活動に所属している、塾に通っている、遠方からの通学者などの状況によっても違ってくる。

鎌田：違った捉え方が、授業や栄養教諭からのアドバイスによって、正しい知識にもとづいた理解につながっていったと考える。

庫山：体力テストの結果を提示したことで、生徒が自分のこととして考えるきっかけになった。話し合いも深まっていたように思う。南子さんの生活についてのグループ活動では、イエローカードしか準備されていなかった。よい点も出せる工夫があつてもよかったです。話し合いの場面で、間食と夜食の区別なく議論していたのが気になった。分けて考えさせれば話しやすかったかもしれない。

工道：ヒポクラテスの名言を取り入れた導入がよかったです。鎌田先生が半年かけて築いたよいクラスの雰囲気の中、活発な意見が出ていた。本時のテーマ・ねらいが幅広い印象を受けた。他教科・領域と関連する部分もあるのでは。

鎌田：授業後の生徒の感想をみると、一日の摂取量や栄養素などについてもっと知りたいと思った、という内容が複数あった。自分のこととしてとらえるきっかけになったのではないかと感じている。次時では、実際に食事のシミュレーションをする予定。その前段階の準備としてまでは到達できなかつたと感じている。

教頭：学習は最終的に個人に返っていくもの。普段の自分の食生活を振り返ることも大切になる。シートに「サラダを食べるべき」と書いた生徒がいた。知識として野菜を摂取する必要性は理解しても、自分の食事を見直すきっかけにつながる活動がなければならない。

鎌田：生徒は間食は悪いこと、というイメージをもっている。コンビニやファストフードも上手に活用できるということを考えさせたい。

### 3 指導助言（沼倉指導主事）

指導者と生徒との関係がよく、ざっくばらんに友だちと関わりながら授業が進行していたのが印象的だった。よく準備された授業であり、中等部の生徒の姿を見て大いに勉強させてもらった。

今日の授業の成果として、①学習課題を自分のこととしてとらえさせる手立て、②専門的な話を聞く場面の設定、③グループでの話し合いの場の設定、④学習意欲を高める工夫や仕掛け、の4点をあげる。①では、体力テストの結果といった生徒に直接関わるデータを提示したり、南子さんとの比較から自分のことを見つめさせるといったねらいがよかつた。②では、栄養教諭から直接アドバイスをもらうことで、生徒の聞く意識が高まった。間食は「栄養バランスのとれた三度の食事を採った上で」といった押さえもうまく効いていた。③に関しては、自分の考えをもたせてからグループで話し合う場面において、生徒がたくさんの考えを短時間でホワイトボードにまとめていた。生徒の能力の高さを感じた場面だった。指導案を見たときに、内容が多過ぎるのではないかと感じていたが、きちんと時間内に終えることができていた。④では、ヒポクラテスの言葉を用いた導入、パワーポイントの活用など、あの手、この手で生徒を引きつける工夫が随所に見られた。

改善点・課題として、①自分の食生活を振り返る時間があってもよかつたのではないか、②健康保持、増進のための知識・理解をより深める、の2点をあげる。自ら進んで課題を見つけ、その解決策を探ることで、思考・判断の力を高めたい。なぜ決まった時間に決まった量の食事を採る必要があるのか、一日の活動の中で消費したエネルギーをどのように補うのか、といったより多角的な視野の問いかが、生徒側から出るように促したい。

保健の指導では、知識の習得を重視してほしい。健康に対する興味・関心を高め、思考力・判断力・表現力を育くむことが大切になる。目標・ねらいを達成するために最も効果的な手立てを考え、得た知識を活用する学習になるような工夫が必要である。

授業づくりの第一段階としては、意識を喚起し、意識を促し、意識を定着させることが大事。次の段階では、発問を喚起し、発問を促し、発問を定着させる。そして、わかる楽しさを実感させ、言語活動を充実させてほしい。留意点は、本時のねらいを達成するための言語活動になっていることや、生徒が話し合う意義を感じ取れるような工夫をすることである。

評価については、生徒一人一人を多面的に見て、妥当な評価をすることが重要。方法は、観察やワークシートなど多様な方法を組み合わせて行ってほしい。ポイントとして、①観察の視点を明確にすること、②ワークシートの項目立てを工夫することがあげられる。特に②では、生徒の思考の過程が見えるような工夫があるとよい。自分の考えやアドバイスを書き込めるように、また、まとめる時間を十分に確保することが必要である。

新学習指導要領では、新たにストレスの対処について、心肺蘇生法の実技指導が加わる。他の領域と関連付けた指導のあり方（例えば水泳と心肺蘇生法の組み合わせなど）を探ってほしい。

# 第1学年2組 外国語科英語学習指導案

実施日 9月25日（火）3校時  
授業者 金 敬子（T1）  
Emily Mabry（ALT）  
場 所 1年2組教室

## 1 単元名

Unit 6 オーストラリアの兄 (New Horizon English Course 1)

## 2 単元の目標

- (1) 家族や友人などについて、意欲的に話したり関心をもってたずねたりしようとしている。  
【関心・意欲・態度】
- (2) 家族や友人などについて、聞き手に分かるように伝えたり、その人のことについてたずねたりすることができる。  
【外国語表現の能力】
- (3) 家族や友達などを紹介する英文を聞いたり読んだりして、概要を理解することができる。  
【外国語理解の能力】
- (4) 三人称単数現在形を用いた文構造・用法に関する知識を身に付けています。  
【言語や文化についての知識・理解】

## 3 生徒と単元

### (1) 単元（題材）観

本単元は、咲がオーストラリアにいる兄の春樹を紹介するスピーチを行い、アレックスからの質問に答えたり、ベッキーと関連した対話をを行ったりするという展開になっている。本校の学校設定科目「JEコミュニケーション」の授業においても、スピーチの後に同様のやりとりの機会を設けているため、生徒たちにとっては、実際のコミュニケーションの場面としてイメージしやすい単元である。

言語材料としては、一般動詞の三人称単数現在形を扱っている。日本語にはない概念であり、中学生にとっては理解しづらい文法事項であるが、家族（第三者）の紹介や家族のことを話題にした対話という設定から、効果的に導入できるようになっている。これまでには、自分のことについて話したり、相手のことについて尋ねたりする活動が中心であったが、三人称単数現在形の用法を習得することで、第三者について相手に紹介したり尋ねたりすることができるようになり、コミュニケーションの幅が更に広がることが期待される。

### (2) 生徒観

本校入学直後に行った学力推移調査の学習実態調査によれば、約8割が何らかの形で小学校以外の場所で英語を学習してきている。7月に行った学習実態調査の結果、「英語の学習について」で「とても楽しみ」「まあ楽しみ」と回答した生徒の割合は、合わせて85.2%と、第1学年3クラス中もっとも高く、対話やインタビューなどの言語活動を活発に行うなど、積極的な授業姿勢が見られる。同調査において、「英語を身に付けたい程度」については「国際社会で活躍できるくらい（38.5%）」、「英語の授業を通しての興味や関心」については「実際に外国人と話をしたい（38.5%）」と回答した生徒が最も多く、英語をコミュニケーションの手段として身に付けようとする意識が高いことがうかがわれる。

### (3) 指導観

小学校外国語活動での経験により、自分自身のことを伝える表現には、ある程度慣れ親しんでいるため、本単元の各パートの導入部分において、既習単元の本文や帶活動で行っているインタビューシートを活用しながら、教科書の登場人物やクラスメイトについて英語で紹介したり質問を行ったりすることで、動詞につく"(e)s"や"does"に意識を向けさせていきたい。

終末の活動として、自分の家族や友人等を紹介するスピーチの発表を行う。今回は、取り上げたい人物についてペアで対話をを行い、そこで得られた視点を生かして原稿を作成する。相手意識を持って、やりとりを豊かにする発問及び質問の工夫や、相手に伝わる伝え方について、気付きを促していきたい。ペアを替えて対話やリライトを行わせることで、お互いに表現の仕方や構成について学び合い、情報を整理して、まとまりのある内容を伝えられる力の育成を図りたい。

## 4 全体計画（総時数8時間）

	学習活動	評価規準	時数
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JTEの他者紹介を聞き、単元のゴールについて知る。</li> <li>・ Part 1本文の内容を理解し、正しく音読する。</li> <li>・ 三人称单数現在形を用いて、クラスメイトについてインタビューした内容を、他の人に伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 不規則活用をする動詞などに気をつけて、本文を正しく読むことができる。【理解】</li> <li>・ 三人称单数現在形の肯定文を用いて、自分と相手以外の人について伝えることができる。【知識・理解】</li> </ul>	2
第二時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Part 2本文の内容を理解し、正しく発音する。</li> <li>・ 三人称单数現在形を用いて、自分や相手以外の人について尋ねたり、答えたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 三人称单数現在形を用いて、自分と相手以外の人について尋ねたり、答えたりすることができる。【知識・理解】</li> </ul>	2
第三時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Part 3本文の内容を理解し、正しく発音する。</li> <li>・ 三人称单数現在形(否定文を含む)を用いて、自分や相手以外の人について紹介する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 三人称单数現在形を用いて、自分や相手以外の人について伝えることができる【知識・理解】</li> </ul>	2
第四時	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 家族や友人などについて紹介する英文を書く（本時）。</li> <li>・ 写真やイラストなどを用いて、家族や友人などについて発表を行ったり、クラスメイトの発表を聞いて、内容に関連のある質問をしたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一般動詞を使って、家族や友人などを紹介することができる。【表現】</li> <li>・ 家族や友人などについて、相手に分かりやすく伝えようとしている。【関心・意欲・態度】</li> <li>・ 話し手が紹介した人物について聞き取ることができる。【理解】</li> <li>・ スピーチの内容に関連のある質問をすることができる。【表現】</li> </ul>	2

## 5 本時の計画（7／8）

### (1) ねらい（本時の目標）

他者とのやりとりを通して、伝える内容や用いる言語材料、伝え方などを工夫して英文を書くことができる。

### (2) 展開

段階	生徒の活動	学習形態	教師の支援	評価（方法）
導入 (10分)	1 Greeting 2 Warm-up	全体	・本時の活動に必要な語彙及び表現に慣れ親しませる。	
展開 (30分)	3 Model Conversation ・教師のデモンストレーションを見て、本時の活動を理解する。  4 Today's Goal 家族や友人について、良いところが伝わるような紹介文を書こう。	全体	・一往復で終わらず、豊かなやりとりを促す発問を提示する。	
	5 Talk in Pairs ・事前に準備した紹介文を基に対話をを行い、やりとりした内容についてメモを取る。	ペア	・役に立つ表現を、板書で示す。 ・つまづいている生徒には、個別の支援を行う。	コミュニケーションの目的に応じて、伝える内容を整理し、英語で話したり書いたりして互いに自分の考えや思いを伝え合うことができる。
	6 Rewrite the Script ・対話によって得られた視点を基に、紹介文を書き直す。	個	・情報をただ列挙していくのではなく、文と文のつながりを意識しながら、まとまりのある英文を書いていくよう支援する。	
	7 The Second Revise ・ペアを替えて、同様の活動を行い、紹介文を推敲する。	ペア 個		
まとめ (10分)	8 Reflection ・やりとりを通して得た気付きをまとめる。	個 グループ	・グループ内で気付きを共有させる。 ・次時の連絡をする。	

## 6 協議の視点

他者とのやりとりを通してお互いに学び合い、表現を磨き合うための手立ては十分であったか。

## 7 研究協議会記録<外国語科英語>

司会 吉澤 孝幸  
記録 佐々木 智

### 1. 研究協議 <抜粋>

#### 【協議の観点】

- ・他者とのやりとりを通してお互いに学び合い、表現を磨き合うための手立ては十分であったか。

- ・ねらいをみると書くことをねらった授業であるが、三单現の定着をどこまでねらっているか。  
→スクリプトをこれから見てできているか確認する。全員に対して十分確認はできていない。
- ・例えば、sだけは落とさないとか、何をねらったのか?  
→やりとりを通じて伝えることを増やし、それを伝わるように順番を考えて書くのがねらい。
- ・sさえ書いてくれれば目的格はちがっていいとか、分量があればいいとか、どう今回は捉えたのか?  
→文法の正しさは終わってから。伝える中身や書く順番は見とれるかなと思っていた。
- ・最初の長い英語を生徒が先生とやりとりして自分たちのものにしている。半年での成長を感じる。生徒同士のやりとりは、ペアを組んで書いて、別のペアと組んでいた。羅列はよくないよというアドバイスがあったが、そういう力を付けさせようとしているのだと感じた。
- ・伝えたいという気持ちが次第に生徒に大きくなっていて、活動もスムーズに進んでいた。授業で習った質問などをプロジェクトで引き出し、生徒同士がやりとりするときにそれを使っていた。
- ・何となく書かせるのではなく、何のためにやりとりがあるのか。一番最初は、自分が伝えようと思っていることだけではなく、聞いてくれる立場に立って魅力ある活動にするために、自分で想定してきちんと書くだけでなく、他の人に聞いてもらうことでいろんな質問が来たり、意見やコメント、アドバイスが来て練り上げができるやりとりがあればと思った。
- ・ねらいと評価の規準がずれていた。ねらいの書くことの評価規準がきちんとあればよかった。  
→分量を増やし、横にも広げ、羅列でなく中身を考えてほしいと思ったので、違う活動に入る前に、考え方を全体で確認するのもあった。ねらいの書くことについては強く書きすぎた。
- ・書くということでよかったのではないかと思う。子ども達は、英語に関しては、話しができるし聞けるが書けないことがいっぱいある。入試も考えると。研究授業で子どもと交流して、自己紹介して終わる授業があるが最後のゴールとしてより正確なものをきちんと伝えるという所にもつていったというのはよかったです。
- 中1は、無邪気な感じであってもいいのかなと思った。友達知らないことを生の情報で音声で飛んできたというのは、友達のことをよく知れたとか、予期しないことが飛び交うことで中1らしい顔でやるのではないかと思った。金先生は綿密に計画を立てている演繹的なアプローチをしている。一回やらせてみてルールに気付きをさせるという手もあるのではないか。
- 先生が出させて、シェアしてフィードバックする中で、必要であれば共通にやるであれば、中1なので前置詞は落ちてもsはおさえるという形になるのかなと思った。
- メモには2種類あって、理解のためのメモ(自分の頭の整理)と発信のためのメモ(自分のアイデアを練る)がある。聞いて書くなので結構大変なのかなと思った。

### 2. 指導助言 中央教育事務所 伊藤景子指導主事

- (1) 子ども達がペアで学び合うことに慣れている。
  - ・学び合い、協力し合い、課題追究をしている。少しでも成長させたい、変容させたいという授業になっており、新たな気付きになっていた。
- (2) 共通実践事項を意識した授業の展開だった
  - ・他者とのやりとりを通して、協働的に問題を解決する活動が行われていた。それが生徒に表れていた。綿密な計画があった。教材研究、準備があった。
- (3) 即興で話すと言うことを意識している

- ・疑問詞をつかって質問する。普段からの成果が出ていた。

○今、英語科で求められている大事にしたい視点、皆さんの協議での質問等に対する答える形で授業について考える。

①英語でコミュニケーションを図る必然性のある言語活動になっているかどうか。

なぜやらなければいけないのか。子ども達は知りたい、伝えたいに高まっていたか。

質問は、知りたいことがあるから質問をするので、知りたくないのに質問しないといけないになると、ドリルになる。子どもの内で、内容を膨らませるために質問し、それが目的になっていた。知っている質問で、言われてないことを質問するというのが見られた。

話された内容が理解できなくて質問できなかつた人もいた。音声だけでやりとりするというのはそういうことである。わかる部分もあるが、質問するところまでの理解に至っていない。

質問しやりとりをし内容を増やすがねらいだったが、コミュニケーションよりは知っている言葉で内容を増やそうという感じがあった。生きた情報でやりとりするという点では、英語でやりとりしたい思いにかられる言語活動を設定すれば、主体的に活動していけると思う。

先生が途中でまとまりのある英文に意識を向けさせようと話をしていたが、ALTの先生と音声だけで伝えたので伝わらなかつた面もある。→英文を見せてやる。比較・検討させてみるなど。子どもたちのメモ→誕生日とかで、魅力的な紹介文になっていなかつたのではないか。紹介文はどんな情報を伝えるべきだったのか、考える必要があった。

ねらいが書くことだったので、音声ではなく、原稿を読み合って内容を読んだ上で、内容面に対しこういう情報を入れた方がいいのではないか、言語についてある程度ここははずせないという所を互いに見てあげた方がよかつたのではないか。i s が抜けたりしていた。s も含めて早い段階で直したい。音声だけでは難しいので見合って、表現を磨き合うことができないかなと思った。

話すこと・やりとりの言語活動を取り入れたと意図はよく分かるが、何も原稿を準備しない前に、話すことのやりとりで伝える内容のヒントを得たり、伝えることを増やしたり深めたりするため、やりとりをまっさらな状態で、簡単な紹介くらいはして、あとは、相手からの質問でどんどんやりとりをして相手も知らない情報を聞き出すということをした後、音声では曖昧なので、一度書いてみる。そして、その英文を内容面、言語面で磨きあげるという二段構えもいいのでは。

最終的に原稿から離れてスピーチをすると言っていたが、正確に原稿を書いて、暗唱して、伝え方を工夫してスピーチするのも一つではないかと思う。話すことやりとりだけ、内容面だけだとなかなか正確性が身に付かない。書くことにもつながっていないか。今回であれば、最後に正確に原稿を書いて、暗唱をし伝え方を工夫しながらスピーチをし、感想をもらったり、質問でやりとりをしたりできた。書くことがねらいなのでそうした方がよかつた。

子どもの話す力はあるが、書く力はまだ鍛える余地がある。読み合うとお互いこうじやないかと言える。

## ②評価について

本時は、活動は見えていたが、最終的にどうなればいいのか子ども達にどう伝わっていたか。

ねらいと評価規準についてだが、評価規準が研究主題になるようなものであった。書くことの評価規準としては、もう少し教員が見取ることのできる生徒の具体的な姿に。

指導者でどこまでどういう支援をするのかを含めて評価規準の検討が必要。

話すことをメインとするときは内容重視で。しかし、今回は話すことで材料集めをするが最終的に書くことがねらいなので、ある程度の正確性は必要なのではないかと思う。適切な段階で教師のフィードバックを。黒板を上手く利用する手もあった。

金先生のすばらしい英語を聞くことができた。もっと生徒とやりとりしながら進めることで苦手な子どもや聞き取れない子も分かるようになる印象があった。理解度を確認しながら、話させながら確認が必要。

子ども達の英語力、話す・聞くのすごさに圧倒された。グローバルリーダーの育成にはコミュニケーション能力の育成を教科横断的にやると思う。これからも生徒の力を伸ばして欲しい。

## 第3学年2組 道徳の時間学習指導案

実施日 9月25日(火) 4校時  
授業者 中山 つづか  
場所 3年2組教室

- 1 主題名 思慮深い判断と責任( 内容項目1—【3】 )  
2 教材名 ウサギ( 廣済堂あかつき「中学生の道徳3 自分をのばす」 )  
3 生徒と主題

### (1) 主題観

心が落ちている時は、子どもは道徳的な判断を基に行動することができる。この資料は主人公(小学4年男子)は、自身のしてしまったいたずらについて、発覚した場合を想像し、大きく後悔するという内容である。いたずらをやめるという選択肢を主人公は思いつかなかった。話の筋道は生徒にとってとらえやすく、登場人物の立場や心情が把握しやすく描かれている。

道徳の時間の学習は、生徒自身が体験していないことを追体験する場であるといえる。本資料の内容からは思慮深くあることの大切さや、結果に対する責任について考えることができる。さらに、話し合い活動を通して、共通実践事項の「自他の意見や考え方の比較・検討を行うことで出た新たな考えを積極的に伝え合う活動の充実」を図りたい。

### (2) 生徒観

3年生は開校と同時に入学した一期生である。今年4月に全ての学年がそろったことで、中等部最上級生であるという自覚をもつことができた。6月に行われた中総体や合唱コンクールなどの大きな行事では、互いを認め合い、人間的に成長するよい機会であった。このような経験を通して、学級においても生徒同士の結び付きは強くなかった。

生活アンケートの結果を見ると、本校生徒は新聞やニュース番組を見ること、将来の夢や目標をもっていることの割合が比較的高い。世の中のことに関心をもっていて、社会に参画することに希望をもっているといえる。社会で通用・活躍する力を付けるためには、中学生なりに、誠実で責任ある行動をとることが大切となる。それは信頼し合う人間関係をつくるのに不可欠である。

学校生活は社会へ出たときの練習である。生徒たちの多くは、自分が働くことを遠い先の出来事として感じている。しかし、現在の一日一日の生活の延長上に将来の生活はある。中学校生活も将来も、充実した人間関係を築けるよう、人としての生き方を考えさせたい。

### (3) 指導観

主人公の心情を捉えるため、生徒に「もし自分が小学4年だったら共感できるかどうか」、考える時間をつくる。そして、「いたずらを実行してしまうときの気持ち」と、「実行しない場合の気持ち」とについて役割演技を取り入れ、自分と違う立場の気持ちを考えさせ、主人公の心の揺れを感じ取らせたい。

話し合う形態を2人、4人、全体と大きくしていき、自分の気持ちを客観的に見つめようさせたい。また、他人の意見に触れることで、自分と異なる考えを受け入れたり、弱い心を見つめたりすることができると考える。自他の理解を深め、よりよい判断に基づく行動をしようとする、道徳的な実践意欲を養いたいと考えている。

#### 4 本時の計画

##### (1) ねらい（本時の目標）

結果を考えて思慮深く判断し、行動しようとする実践意欲を養う。

##### (2) 展開

段階	生徒の活動	主な発問と予想される反応	教師の支援
導入 (5分)	1 アンケート結果を聞く。	○これまでの他人との関わりで失敗したな、と思うことを紹介する。	○先をよく考えずにした失敗を取り上げる。
展開 (35分)	1 資料1を読む。 2 主人公の心情を考える。  3 役割演技をして、主人公の気持ちを理解する。  4 役割演技の感想を出し合う。  5 先のことを考えて行動することの大切さについて考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ふてくされて横を向いた僕は、どんなことを思っていただろう。           <ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで自分が一番だったのに。</li> <li>・みんなにちやほやされなくなつてしまらない。</li> </ul> </li> <li>○「僕」に心情的に共感しますか。また、あなたが小4の「僕」ならば、いたずらを実行しますか。</li> <li>○「実行する僕」と「実行しない僕」とになったつもりで、対話してみよう。反対の立場でもやってみよう。           <ul style="list-style-type: none"> <li>・だめだと思うけれど、やってしまった。</li> <li>・違ういたずらをしてしまうかも。</li> <li>・ウサギがかわいそうだ。</li> </ul> </li> <li>○役割演技をした感想を4人グループで出し合ってみよう。</li> <li>○自分を守るためにいたずらをした「僕」に、どんな言葉をかけますか。           <ul style="list-style-type: none"> <li>・後悔したでしょうから、もうしないようにしよう。</li> <li>・いたずらしてしまいたいくらいの気持ちだったのだね。</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教師が範読する。</li> <li>○自分の立場を記入する座標を準備する。</li> <li>○両方の立場になって、「僕」が追い詰められていたことを理解できるようにする。</li> <li>○全体で共有するため、ホワイトボードを準備する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <b>評価</b>            結果を考えて判断し、行動することの大切さに気付くことができたか。  <b>評価方法</b>            「シート・発表」         </div>
まとめ (10分)	1 資料2を読む。 2 本時の感想を書く。	○今日の学習で考えたことを書きましょう。	○資料2を範読する。

#### 5 協議の視点

- (1) 自他の意見や考え方の比較・検討を行うことで出た新たな考えを積極的に伝え合う活動の充実が図られているか。
- (2) 自分との関わりで道徳的価値を考える授業構成であったか。

## 6 研究協議会記録＜道徳＞

司会 工藤 薫  
記録 工藤 道人

### ○ 研究協議

#### (1) 授業について

- ・授業提示に当たって、新学習指導要領を意識した部分はあるか？

→重点項目である「自他の意見や考えを聞き出す」につながっていけばよいという思いがあった。  
役割演技を取り入れた意図もそこにある。

- ・資料を分断して提示した意図は？

→主人公の「僕」の気持ちを想像させたかったからである。

#### (2) 協議の視点にもとづく話合い

##### 【協議の視点】

- ・自他の意見や考え方の比較・検討を行うことで出た新たな考えを積極的に伝え合う活動の充実が図られているか。
- ・自分との関わりで道徳的価値を考える授業構成であったか。

- ・座標に自分の立場（気持ち）を表示したが、ネームプレートの使用や張り方など、工夫があつてもよかったです。
- ・自分の立場（気持ち）の変容があったらそれを聞いたり、変容が形として見えるようにしたりするとよかったですかもしれない。
- ・題材が生徒の実態とぴったりと感じた。生徒も自分のこととして考えたのではないか。
- ・共感できるかできないかで役割演技をさせててもよかったですかもしれない。
- ・時間配分を工夫し、役割演技を通しての感想を拾って共有できたらもっとよかったです。
- ・逆の立場が出しづらい題材であると感じた。
- ・役割演技を取り入れたのはよかったですと思う。生徒の本音が出たり、言いやすくなる。  
また、立場の違う人の考えも感じ取れる。
- ・生きたウサギに嫌がらせをするかしないかではなく、人に嫌がらせをするかしないかであれば、反応も違ったのでは。
- ・教師側で意図的に分の悪い方の立場（気持ち）に肩入れをして、最後の主発問につなげていくといった方法もある。
- ・ロールプレイを導入時に取り入れてみてもよいかもしれない。
- ・自分のこととして考え、話合いをしていたのではないかと感じた。
- ・比較・検討を通して、自分の考えを変えていくのが難しい題材と感じた。
- ・役割演技を通して、自分の姿を振り返り、考えることができたのではと感じた。
- ・（役割演技で生徒がどのくらいまで自分を出せたか、という質問に対して）以前勤務していた学校でやったことがあったのだが、本校の生徒（の実態）に対してやるのがどうなのか正直考えた。  
また、学級で似た出来事があったので迷った。ただ、中3といえども幼い部分を感じる。共感できる部分もあるのではと思った。

- ・資料から離れて考えさせること（どこまで資料を用いるか）、自分の考えを変える場面（展開）も大切であると思う。
- ・いい資料であると感じた。共感する、共感しないが拮抗していた。心が揺さぶられた資料である。その部分で話合いができてもよかつたのではと感じた。ただ、資料を分断せず、まるごと与えてもよかつたのではと感じた。
- ・登場人物が小学生であることで、客観的に捉えることができたのではと思う。

### 3 指導助言

- ・中学校の道徳においては、来年度教科化となるが、「目標」についてはこれまでと大きく変わらないが、これがまさに道徳の時間に求められていることであるので、しっかり理解しておく必要がある。また、理解していないと、ねらいが定まらない。新学習指導要領解説をよく読んでほしい。

「第3章 特別の教科 道徳」の「第1 目標」

第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

- ・(本時の授業について) 清子の気持ちに触れてもよいと感じた(他者理解)。主人公僕の後悔につながっている。
- ・価値は大切、でも、なかなかできなし人間の弱さがある、そして、さまざまな捉え方があること、これらの理解が人間の理解につながっていく。
- ・どこを(何を)考えさせたいのかをクラスの実態を踏まえて考えることによって、主発問が絞られてくる。
- ・自己を見つめる(=内省)することで、改めて自己理解を深めることができる。
- ・通っている(育っている)地域が違う、考え方方が違う、これらは、多面的・多角的に考える素地があると考えるべきである。
- ・道徳的価値が見方に変わってくる。特に、生命尊重や家族愛を扱った題材ではその傾向がある。
- ・人間についての深い理解について考えられるような道徳の時間にしてほしい。そして、年間35時間しっかりと頑張ってほしい。
- ・評価に当たっては、学習状況や成長の様子を適切に把握してほしい。
- ・大きくくりなまとまりを踏まえた評価である。また、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが大切である。
- ・生徒の発言、学習シート、振り返りのほかに、生徒の表情やその変化などからも生徒を見取る(特に発表が苦手な生徒など)。
- ・年間指導計画を作成し、その通りにやっていくことが重要である。そして、今やって いることの検証を行い、年間指導計画に取り入れていってほしい。

# クリエイティブサイエンス「新規実施上の工夫と事後検証」

教諭 工 藤 薫

## 1 はじめに

クリエイティブサイエンス(以下CS)は、中等部開校時に本校独自の教科として設定された。学校案内には、中3時に週一時間行い、「自分が興味をもった、数学や理科に関する課題について、解決の方法を探しながら研究を進める。また、研究成果をまとめ、発表する活動を通して、表現力を高める。」と記載されている。中等部1期生が中3に進級した今年度がCS初年度となり、水曜日5校時に3クラス同時展開で、学級を解体し、課題(担当者)ごとに8教室に分かれて実施した。

## 2 指導体制と生徒のグループ編成

生徒への指導は、中高の教員が協力して行った。生徒の課題研究に対する指導は、数学分野が4人、理科分野5人の計9人が担当した。教師1人当たり生徒10人前後を担当し、課題研究の指導に当たった。また、中等部の数学主任と理科主任は、CSの全体計画やガイダンス・発表会等の企画・運営にあたるとともに課題研究のサポートを行った。生徒は、「分野希望調査」を基に数学、物理、化学、生物、地学の5分野に別れ、その内で2~5人のグループをつくり、課題研究に取り組んだ。最終的には数学11、理科14(物理4、科学3、生物3、地学4)のグループに分かれた。

CSの時間における活動場所として、ガイダンス等で80人が一斉に集まる必要がある場合は中等部体育館棟大教室を使用した。分野(担当者)別に活動するときは、数学は中3の教室3室と選択教室1、理科は物理・化学・生物・地学の各実験室をしようした。必要に応じて中等部理科室、中等部PC室、高校PC室を使用した。

## 3 探究活動

4月にCSの1年間の見通しを生徒に示し、「課題研究の進め方」についてガイダンスを行った。その後、分野ごとに担当者と生徒が資料等を調べ、話し合いながら課題を設定した。6月上旬にはすべてのグループで課題が決まり、探究活動に取り組むことができた。また、長期休業中に担当者と連絡を取りながら、探究活動を進めるグループも見られた。インターネットや本の情報に頼るだけではなく、仮説を立て、実験(検証)方法を考えて実施し、その結果を基に検証するということを繰り返し、研究を深めることができた。思い描いた通りにならない場面では、グループで繰り返し話し合ったり、再検証したりして研究を進める姿が多く見られた。

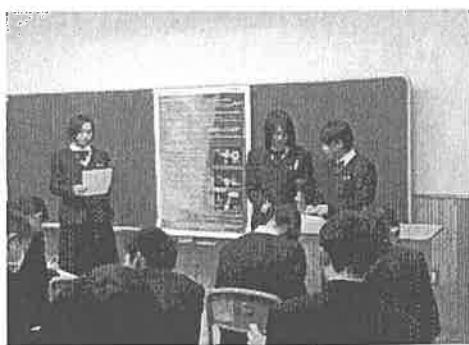
## 4 中間発表会

11月21日(水)5、6校時に中等部体育館棟選択教室1~4・大



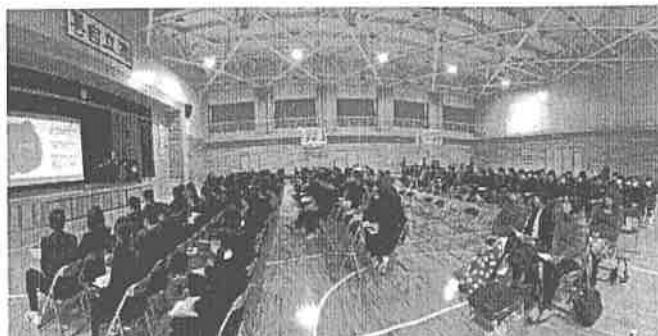
資料1 中間発表会 発表資料

教室の5会場で実施した。1会場で5グループが発表した。発表時間は、10分以内とし、その後質疑応答の時間を設けた。中間発表会では、発表形式をポスターセッションとし、生徒はA4サイズ1枚の発表資料を作成した。生徒が作成したデータを使い、A0サイズに拡大印刷し、発表資料とした。生徒は、緊張しながらも懸命に発表しており、質問や意見が活発に交わされていた。発表を聞いた生徒はアドバイスカードを記入し、中間発表会終了後に交換し、1月に行われる校内発表会への参考としていた。(資料1、2参照)



資料2 中間発表会の様子

1月24日(木)1~7校時に中等部体育館棟アリーナで実施した。高3生38人、中3生の保護者、中1・2生が参観した。発表は、プレゼンテーション・ソフト(パワーポイント)で作った発表資料を用いて行った。中間発表会から期間は短かったものの、生徒は、中間発表会の内容を形式を変えてただ発表するではなく、中間発表会で交わされた質疑応答の内容やアドバイスカードを基に発表内容や資料を改善したり、さらに探究活動を深めたり、新たな考えを導き出したりして校内発表会に臨むことができた。発表時間は中間発表会より2分短い8分であったせいか、いくつかのグループが発表時間を超えてしまったのが残念であった。参観した高3生は、積極的に質疑応答に参加し、校内発表会を盛り上げた。高3生からの質問や感想、アドバイスに対して、真剣に聞き、一生懸命受け答えする中3生の姿があり、中高一貫校のよさを垣間見ることができた。また、参観した中2生にとっては、この校内発表会でCSの時間に行われる課題研究について具体的に考えることができた上、大きな興味と期待を抱くことになり、次年度に自らが行う活動に対して意欲を高められたようであった。(資料3参照)



資料3 校内発表会の様子

## 6 研究のまとめ

CSの一年間の取り組みについて、生徒はグループごとに中間発表会や校内発表会の発表資料・発表原稿を基に5~10枚(A4)にまとめるにした。正式な「論文」という形にまではいかないものの、「研究の動機」「研究の内容と成果」「まとめ」「今後の課題と反省」「参考文献・資料」という内容を必ず入れることを指導した。校内発表会で一年間の課題研究の内容を発表したことで、CSの課題研究は終わりという考え方もあるが、紙面に改めてまとめてすることで生徒一人一人が一年間の課題研究を振り返ることにつながると考え、実施した。

## 7 評価

CSは、「日常生活や社会との関わりなどから数学や理科に関する課題を見つけ、探究的な学習のプロセスを通して課題の解決に取り組むことで、数学や理科への関心を高めるとともに、科学的な思考力や表現力を養う」ことを目標とし、「数学や理科に関する課題を設定し、課題の解決に向けて意欲的に取り組んでいる」「探究的な学習を通して、事象を論理的・実証的・客観的に考察したり、表現したりするなど

数理的な見方や考え方を身に付けている」の2点を評価の観点とした。また、評価する方法として、生徒の探究活動の様子、中間発表会や校内発表会での生徒の発表の仕方や発表する姿勢、聞く態度、発表資料の内容やまとめ方等を用いた。

## 8 今後の課題

今年度のCSの活動を終えて見えてきた課題や要望は以下の3点である。

- ① 中間発表会・校内発表会の時期
- ② 指導体制の見直し
- ③ 生徒の発表の仕方や資料の作り方、研究のまとめ方

①について、中間発表会は11月、校内発表会は1月に実施したが、この時期が適切であったのかは、大いに検討すべき課題である。研究分野の決定や研究課題やグループ編成の決定の時期を早めることができると中間発表会の時期も早くすることが可能となり、中間発表会と校内発表会の間が短すぎるという要望に応えることができる。また、校内発表会の時期が高3生のセンター試験直後であったため、高3生に関わる教員の負担が大きいこともあり、この点についても検討すべきであると思われる。

②について、一人の教員に対して担当する生徒は多くても10人、担当するグループは3グループ以内が適正と思われる。今年度水曜日5校時に実施したが、これには時間内に実験等が終了しない場合は6校時も引き続き活動できるようにという配慮であったので、この点は来年度も是非、考慮していくたい。そのためには、CS担当者は水曜日6校時に授業をもたないこと、物理実験室等を使用しないようにすることが必要となる。

③について、発表資料となるポスターやスライドの作り方についての生徒への事前指導が足りなく、改善点が多く見られた。また、話し方の練習が足りなかつた点も反省点である。原稿を読むだけの発表では、聞き手に伝わらないので、生徒への指導をもっと徹底する必要があると思われる。

## 9 終わりに

CSは、今年度から開設された教科であり、また、本校独自の教科であるため、学ぶ側の生徒にとっても指導する側の教員にとってもすべてが初めての取組で、試行錯誤の連続であったように思う。生徒が自ら課題を設定し、探究活動に取り組み、2つの発表形式を体験し、一年間の学びをまとめ上げたという経験をしたことは、高校進学後の探究活動における土台になると考える。そして、CSの時間が探究することの楽しさに生徒が気付くきっかけになればと思っている。

# 平成30年度 授業アンケート 集計結果と分析

## 1 実施と集計の方法

(1) 1回目：平成30年5月28日から6月12日（高校は20日）までの期間に、Classiのアンケート機能または質問紙を用いて全授業で実施。

2回目：平成30年12月4日（高校は6日）から19日までの期間に、Classiのアンケート機能または質問紙を用いて全授業で実施。

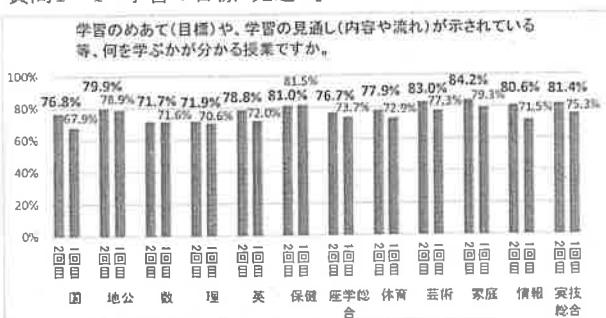
(2) 質問1について、以下の要領で「支持率」を算出した。「①そう思う」を+2点、「②だいたいそう思う」を+1点、「③あまりそう思わない」を-1点、「④そう思わない」を-2点として計算し、回答人数の2倍で割って、支持率とした（支持率は+100%～-100%までの間で算出される）。

(3) 質問2について、同様に+100%～-100%までの間で「困難さ度合い」を算出した。①「難しそう/速すぎた」を+2点、②「やや難しい/やや速い」を+1点、③「ちょうど良い」を0点、④「やや簡単/やや遅い」を-1点、⑤「簡単すぎる/遅すぎた」を-2点としている（+100%に近いほど難易度や進度に困難を感じ、-100%に近いほど楽だと感じている。0%が「ちょうど良い」）

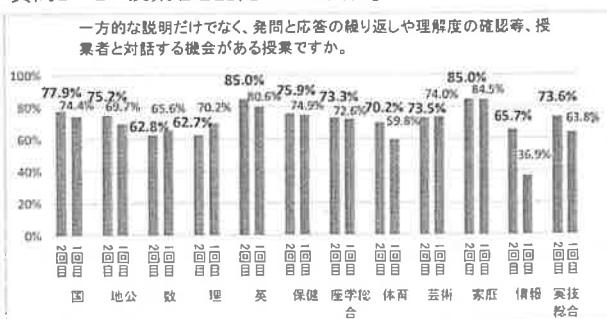
## 2 集計と分析（高校は質問2は省略）

(1) 高校 [※大括弧内は実技系の文言]

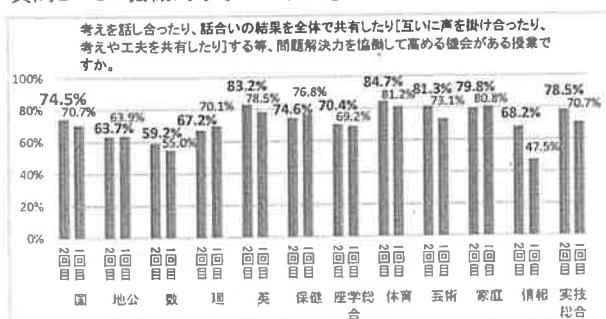
質問1-1 「学習の目標・見通し」



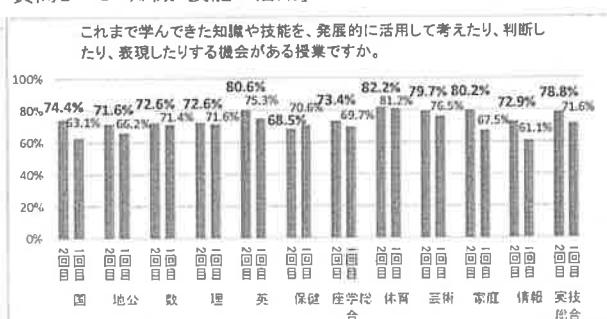
質問1-2 「授業者と生徒の双方向性」



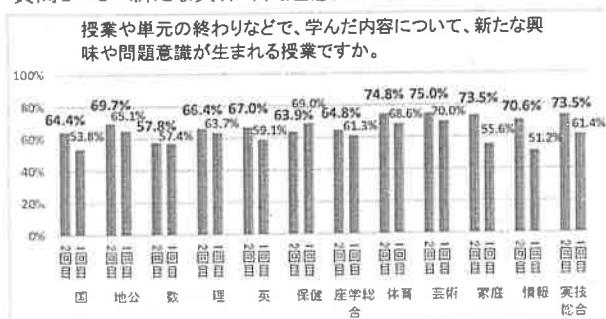
質問1-3 「協働的な学びの機会」



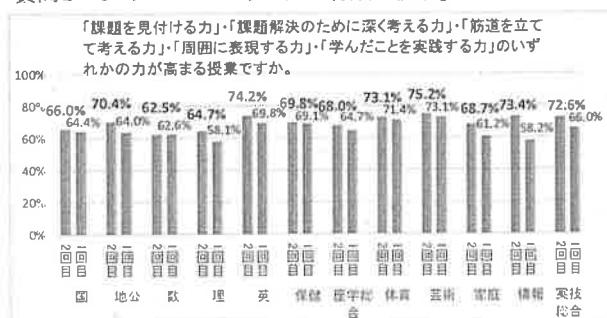
質問1-4 「知識・技能の活用」



質問1-5 「新たな興味や問題意識の起り」



質問1-6 「グローバル・リーダー育成の視点」



### <分析>

- 全体的に2回目の方が数値が上昇しており、授業改善が進んだことが観える。特に実技教科の上昇が際立っている。
- 特に、1回目に課題として挙げた1-5「新たな興味や問題意識の起り」や、1-6「グローバル・リーダー育成の視点」については、大幅な数値アップを見せた教科が多く、SGHカンファレンスを通して教科全体の取組が実を結んでいると思われる。
- 教科間の差が大きかった1-2「授業者と生徒の双方向性」、1-3「協働的な学びの機会」の項目は、2回目も同様の傾向であった。1回目も5～6割という数値であったいくつかの教科が、2回目でさらに数値を下げている。学校全体で取り組んでいる授業研究のポイントであり、改善すべき点である。

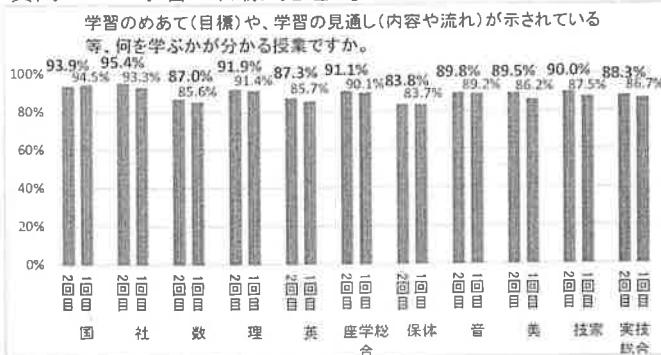
【高校 教科別報告（第2回授業アンケートより）】

教科	評価できる点	今後の課題	その他、意見等
国語	<p>全項目で数値が上昇した。特に質問1-1、質問1-4、質問1-5については10%前後の数値上昇があり、改善が見られた。1回目のアンケート結果をふまえて改善を意識し、改善の手立てを図った成果が出ている。</p> <p>教科の目標と方策に「授業での学び合いを通して思考力・探究力・表現力を伸ばす指導」を挙げ、どの授業者も必要に応じて対話を取り入れながら「授業者と生徒の双方向性」を図り、グループやペア、または教室全体などで生徒同士の「協働的な学びの機会」のある授業をよく実践していた。</p>	<p>全体に改善は見られたが、質問1-5や1-6については、1-1～4に比較して①の回答の割合が低い。特に古典分野の学習指導においては、知識事項の理解・定着に重点を置くことが多くなりがちで、新たな興味・関心の喚起までつなげるような学習展開に至っていないようである。今後は生徒が自ら課題解決に向かう演習の工夫を図りたい。また、現代文も含めて事後の読書活動につながるような教材の準備や広がりのある授業を心がけたいところである。以上を教科内でも研修や実践交流の機会を設けながら授業改善をしていく。</p>	<p>受け持つ生徒数が多いのでClassiでの集計は負担が軽減されてよかった。</p>
地歴・公民	<p>質問1-1～1-2：学習課題を明確にし、生徒の対話を活かして授業を展開するという点は、年間を通じて実践することができた。</p> <p>質問1-1～1-2、4：一年間の授業を通して、生徒は授業の流れをつかめるようになってきた。自分の意見を文章化したり、述べたりする機会も適宜設けている。</p> <p>質問1-2：生徒の思考を引き出す授業への取り組みが相応に評価されていると感じる。</p>	<p>質問1-3：課題の提示の仕方の工夫や、ある程度挙手した生徒が揃ってからの指名など、生徒の思考の時間の確保に留意していきたい。</p> <p>質問1-3、5・6：生徒同士で話しあわせる機会を設定しているが、なかなか深まらない場面が見られた。単元末に演習を行い、思考力や判断力の養成を図っているが、まだ十分とは言えない。ただ、これを地道に続けていくしかないと考えている。</p> <p>質問1-4～6：これまで学んできた知識や技能を、発展的に活用して考えたり、判断したり、表現したりする機会をなかなか設けられず、学習の深まりという点で課題が残った。</p>	<p>※中高共通の「課題」</p> <p>アンケート結果から、中等部社会科においては、生徒の取組の姿勢の高さがうかがわれる。高校生の授業においては、大量の基礎的知識をどうやって身に付けさせていくか、提示された資料から答えを見つける段階から資料（史料）の分析能力をどのように成長させていくかが課題であろう。また問題演習の時間と質をどう確保するか、大学進学に向けた指導を考えた場合、一層の工夫が求められる。</p>
数学	「協働的な学びの機会」が上昇している。ペアワークやグループで活動する際に解答を導き出す話し合いだけでなく、誤答を考えさせたり、振り返りとしてその問題のポイントを挙げさせたりするなど、数学的な思考力を高める指示を工夫している。	「授業者と生徒の双方向性」が低下した。後期になり、教材の難易度が高くなり、双方向性が低下したと考えられる。いかなる単元でも授業の中で、対話を通して考え方や意見を練り上げる場面を積極的に取り入れ、生徒の理解度をさらに深める工夫をしていきたい。	特になし
理科	中等部は概ね上昇した。高校は質問1-6「グローバル・リーダー育成の視点」が上昇した。生徒は今後につながる「課題発見・解決能力」の高まりを実感しつつあるようだ。	「授業者と生徒の双方向性」が低下した。生徒との対話について、演習時間が増えるとどうしても解説に時間が割かれ、双方の学習時間が短くなってしまう。提示する課題や問題、発問を精選することで、生徒のよりよい意見や回答、解答、解法を引き出していく。	特になし
保健体育（座学）	「授業者と生徒の双方向性」、「グローバルリーダー育成の視点」の項目で数値が上昇した。授業者と生徒の両者が活発に発問や応答することができていた。また、グローバルリーダー育成という視点で、生徒が授業の内容や目的、学習後の活用について意義を感じているものと考えられる。	後期の課題研究（2年生）の時間は一人で調べ学習を行う時間が増大し、協働的な学びの時間が減少する傾向にある。課題発見・解決能力や実践力の育成に結びつけられるようにしていきたい。また実社会との関連性を持たせながら、生徒本人が身に付いたと実感できる授業の実践を目指したい。	特になし
保健体育（実技）	全ての項目において数値が上昇した。中でも、「授業者と生徒の双方向性」においては10ポイント以上の上昇であった。運動が不得意な生徒に対して教師側からの個別指導が一番の要因であると考えられる。関連して、生徒が自分の専門性を生かして他の生徒へ指導したり、声をかけ合ったりする場面が多く見られたことは評価できる。	各項目で数値が上昇しているものの、「授業者と生徒の双方向性」、「グローバルリーダー育成の視点」で、まだ改善の余地があると考えられる。授業の中で生徒の発言を引き出す機会の設定や、学んだことを生涯を通じて実践する力の育成につながる授業実践目指したい。	特になし

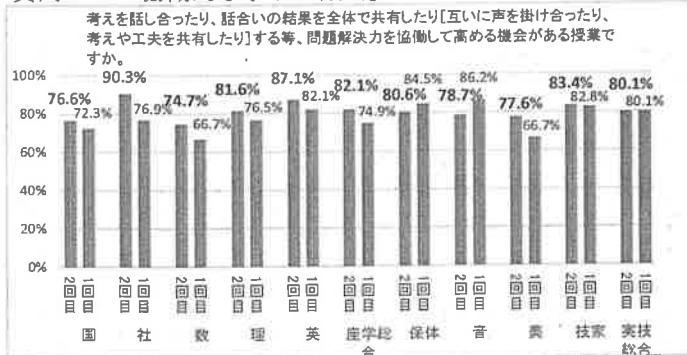
教科	評価できる点	今後の課題	その他、意見等
芸術	「グローバル・リーダー育成の視点」項目においては、芸術が最も高い数値を示している。作品を創り上げることや表現することは直接この評価に結びつくものであり、この教科の学習に取り組む必要性を生徒個々が感じ取っている証明となっている。	「授業者と生徒の双方向性」項目は、比較的他の項目に比べて低い数値となっている。これまで以上に、個別の対話機会を増やすような授業の流れも取り入れていきたい。「協働的な学びの機会」項目とのバランスの取り方についても留意していきたい。	特になし
外国語（英語）	全項目で支持率の上昇が見られた。特に、前回、課題に挙げていた質問1～5での上昇率が7.9%と一番高く、教師一人一人が新たな興味や問題意識が生まれる授業作りを工夫したと考えられる。 質問1～2、1～3の数値が高く、コミュニケーションを重視した授業展開となっている点が評価できる。	数値が上がったとは言え、質問1～5の数値は低い。新たな興味や問題意識が生まれる授業作りは、学年が一つのチームとなって取り組み、アイディアを出し合いながらこれからも改善していくべき課題であると考える。	Classiを使った集計がとても楽でした。準備して下さり、ありがとうございました。
家庭	質問1～5について、大幅な上昇が見られた。前回の課題として取り組み、授業で提示する内容等を工夫したことなどが成果として出たのではないかと考える。	質問1～6にある「学んだことを実践する力」は教科の特性上、日常生活をより豊かにするためには特に重要と考えることから、今後も実践力を高める題材や教材を工夫していきたい。	特になし
情報	これまでの全体指導後に個人でデータ収集し、分析した内容をレポートで提出する授業形態から、「授業者と生徒の双方向性」と「協働的な学びの機会」を意識した指導を心掛けた。その結果、今回の授業アンケートでは両項目とも肯定的な割合が増えた。	これから、さらに進展する情報化時代を生きる生徒の情報活用能力は、社会に出てから不可欠な資質であると考えられる。生徒自身が社会の情報化を自分のこととして学べるような授業展開を検討していきたい。	授業アンケートの項目が、今後の授業に反映しやすい内容になったと感じている。

## (2)中等部 [※大括弧内は実技系の文言]

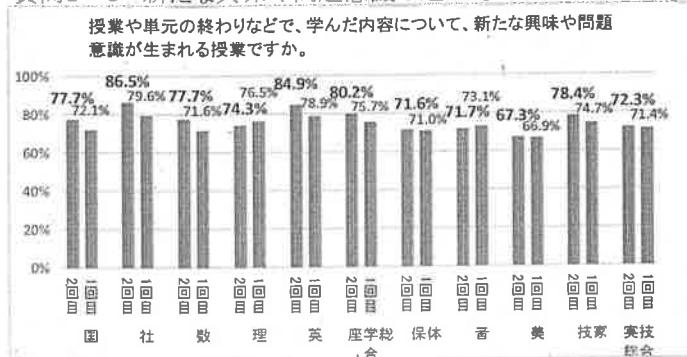
### 質問1-1「学習の目標・見通し」



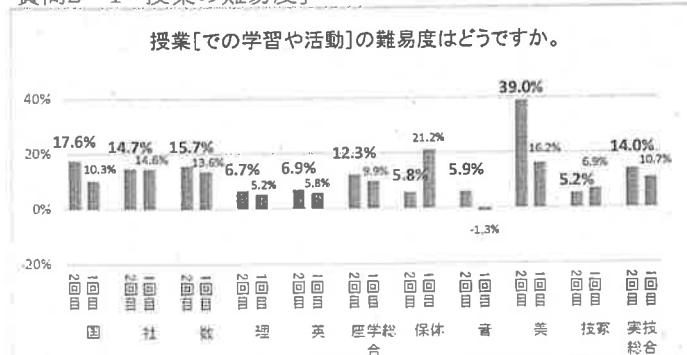
### 質問1-3「協働的な学びの機会」



### 質問1-5「新たな興味や問題意識の起こり」



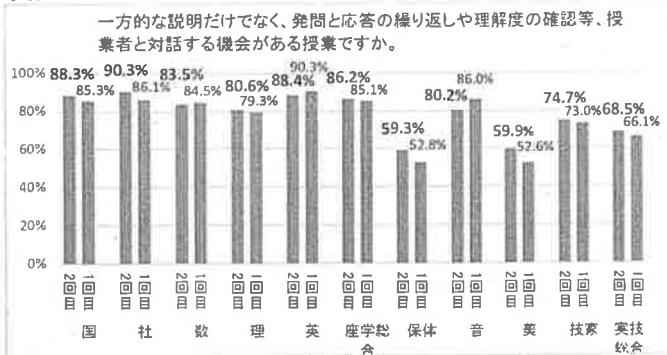
### 質問2-1「授業の難易度」



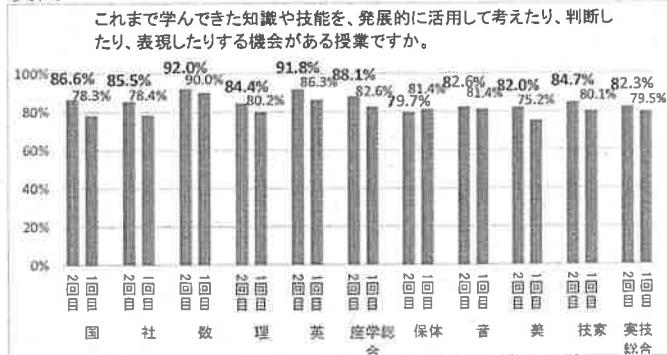
### <分析>

- 1回目・2回目ともに、高校と比較して高い数値が並んでいる。その上で、各項目とも2回目で上昇傾向が見られた。
- 1-3「協働的な学びの機会」について、1回目に低かった複数の教科が大きく改善を見せており、アンケート結果をきちんと授業実践へフィードバックさせていることが見て取れる。
- 1-5「新たな興味や問題意識の起こり」については、概ね1回目からの改善傾向が見られるが、他の項目と比べると若干低いようである。特に高校に比べ実技教科の数値が低い。各教科で、高校の学習につながるような意欲を喚起したい。

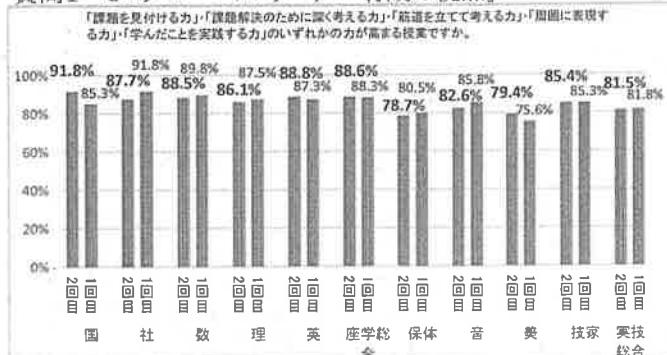
### 質問1-2「授業者と生徒の双方向性」



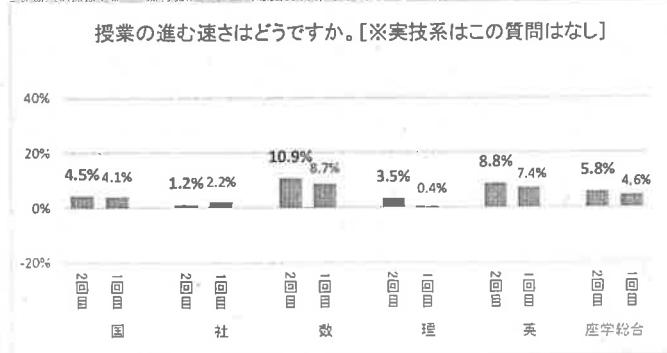
### 質問1-4「知識・技能の活用」



### 質問1-6「グローバル・リーダー育成の視点」



### 質問2-2「授業の進む速さ」



【中等部 教科別報告（第2回授業アンケートより）】

教科	評価できる点	今後の課題	その他、意見等
国語	主体的な思考を伸ばす仕掛けを多くした結果、質問1～4で評価が向上した。 学習活動の意義や学習後の成果、周囲に表現することの重要性などについて意識付けを図った結果、質問1～6に向上が見られた。	協働的な学びの機会は多く設けているものの、生徒自身が問題解決力の高まりを実感するまでには至っていないと判断する。今後は、話合いがより深まるための手立てを講じていく必要がある。	授業アンケートの質問項目について、中1生にも分かりやすい表現（文言）を練り直すべきだと思う。
社会	質問1～1：学習課題を提示し、めあてや見通しをもって生徒が授業を受けることができる様にした。 質問1～3：課題の解決にむけて、多面的・多角的に学習課題に迫ることができるように資料の提示や学習形態の工夫を行った。 質問1～1～1～6：毎時間、研究授業を想定し、いつ参観されてもよい授業を心がけている。	特になし	高校と同じ
数学	質問1～4で肯定的な回答が多くかったが、授業の中で学習した知識や技能を活用して解決を図る問題を解かせたり、「なぜ」「どうして」の部分を考えさせたり、発表させたりする場面を多く設定したことが要因ではないかと考える。	授業の難易度、進度については、「難しい・速い」という意見とともに、「易しい・遅い」という意見もある。開校から3年間行ってきた中等部数学科の授業形態、指導等を検証し、改善を図っていく必要があると考える。	いわゆる「あきた型の授業」をしっかりと行っていくことは大切であると考えるが、基礎・基本の定着を図るために問題演習の時間、さらに伸ばすための問題演習の時間、発展的な内容を扱う時間などを十分確保し、行っていく必要がある。(中・上位層を伸ばし、下位層の底上げを図る。)
理科	※高校と同じ		
音楽	本時の【めあて】と【活動内容】を板書して授業を進めた。ソルフェージュ指導を継続的に行い、音楽の諸能力の伸長に努めた。	生徒に身に付けさせたい力を焦点化し、【できるようになった達成感】と、【全体で調和する楽しさ】を味わわせる活動のあり方を再考したい。1・2年生に対して、より関心・意欲を喚起する教材を厳選したい。	歌唱、器楽、創作、鑑賞の各分野をバランスよく取り入れるよう努めたが、限られた授業時間内で、基本を押さえつつ発展的内容を扱う難しさを感じた。
美術	1回目のアンケートでも全体的に「1そう思う」の肯定的な評価が多かったが、2回目では質問1～5が微減だった以外は、肯定的評価が更に増加した。 特に、1回目で課題としていた双方向性に関わる質問項目1～2の「1そう思う」が7.5ポイント増、1～3の協働的な学びや活動については1.7ポイント増となつた。	「双方向性」と「新たな興味」の部分が、他の項目に比べてまだ低い。授業者と生徒との直接的な言葉のやりとりを更に増やし、習得した知識や技能の活用を進めたい。 高校で美術を選択しないと決めている生徒にも、美術のよさや楽しさを味わわせられるような題材やアプローチの工夫が必要。	時間割の関係で、月曜日の1年生と金曜日の2年生の授業がつぶれることが多く、継続的な指導が難しい。風景画などは景色や気候が変わりすぎて指導が大変だった。1単位の授業の難しさを感じた。
体保健	「質問1～2」における評価が若干ではあるが向上している。授業内で個人やグループで設定した課題に対する取り組み方への問い合わせ、上位生徒・下位生徒のそれぞれのレベルに応じたアドバイスをはじめとする声掛けを中等部担当教諭で共通認識し心がけたことが影響していると考える。	「質問1～3」については、後期の運動領域がタンスと球技になったため、個人スキルの獲得に向けた反復練習が多くなり、グループ内の話合いによる工夫の場面が少なくなったことに関係していると考える。	本校の生徒に多くみられるが、運動経験の少なさ、とりわけ球技における経験値の低さをカバーできるよう、活動時間を確保する必要がある。また同時に、運動理論等の参考資料や視覚に訴える資料を提示することで、スキルの向上を図ていきたい。
技術・家庭	全体的に肯定的な評価を得ている。生徒の知的好奇心を揺さぶり、生徒が知識を身につけ、それを基に思考・判断・表現するスタイルがおおむね出来ていると評価できる。様々な活動を通して体験的に知識・技能を身につけ、思考力・表現力を高められる教科の特性を良く生かした指導が出来ていると考える。	(質問1-2) 生徒の疑問や予想、体験に基づいた意見や感想などを引き出し、他の生徒の発言につなげるなどしていく。 (質問1-3) 単元の内容によって協働的な学びにつなげやすいものがあるので、そうした内容を取り扱う学習の進め方を工夫する。 (質問1-5) 学習内容が実生活にどのようにつながっている（いく）かを単元のはじめや終末で十分にイメージさせる、自他の考えを比較したりしながら考察を深める場面を設定する、などの工夫をする。	学校として何にどう取り組むか方向性を示し、教科、科目を越えて共通に実践する事項を設定するなどして、協働的に研究を進めたい。教育研究班には、その先導役を担ってほしい。
外国語（英語）	全体的に、前回よりも肯定的な評価の割合が増加した。教科の特性から、「やりとり」が中心となる科目であるため、対話を通して学び合う授業が日常的に行われていると思われる。	学んだことを活用して伝え合うだけでなく、他者と関わり合うことで、考え方の深まりを実感できるような場の設定など、発達段階に応じて言語活動の高度化を図っていく必要があると考える。主体的・協働的な学びにつながるような手立てについて、研修の機会を充実させていただきたい。	特になし

## 大学入学共通テストに向けて

今年度、高校では授業改善に向けた取り組みの一環として、大学入学共通テストで予想される傾向を取り入れた、定期考查問題の作問を試みた。以下、各科目の実践例を掲載する。

教科：国語

科目：国語総合（現代文）

対象：第1学年

### 問題省略

#### 1. 出題の意図

平成29年度共通テスト試行調査の第1問・第2問の出題のねらいである、「複数の資料を読み取り説明すること」を意識して、教科書本文と関連のある表現を指摘する力をはかるとともに（問十（1））、一般化された内容を具体化する力をはかった（問十（2））。

#### 2. 実施した結果の分析

問十（1）については正答率も高く、文脈を読み取り関連を指摘することは概ねできていると判断した。一方、問十（2）は設問に対応していない解答が多かった。設問自体の読み取り能力が不足しているだけでなく、知識や体験の不足が具体例の想起に影響していると考えられる。

#### 3. 今後の課題

上記の分析結果から、設問を正しく読み取り解答する力の育成と、一般と具体を行き来する練習が必要と考えられる。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

単語の意味を問う知識問題に加え、読解問題の要素、文学史的知識を総合して解く問題。知識を総合的に用いる力を見る。

### 2. 実施した結果の分析

知識として係り結びを理解しているか、読解問題として理由となる部分を見つけられるか、理由部分から副詞の呼応を適切に訳出しているか、それを実体験を伴う表現で記述することができているか、理由の形で過不足なく解答の形にまとめることができるか。生徒の躊躇ポイントがよく見えた。

### 3. 今後の課題

解答用紙に空欄を残さない意識付けをおこなう。知識を正確に身に付けるようにさせる。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

現行学習指導要領第4現代文B—2内容（1）イ「文章を読んで、書き手の意図や人物、情景、心情の描写などをとらえ、表現を味わうこと」について、主に「読むこと」に関する出題である。問題文「山月記」（中島敦）に関する資料として、典拠となった『人虎伝』訓読文を示し、当該箇所の叙述の構成・内容の相違点から書き手の意図と表現効果を考えさせる問題である。応用的に文章構成に対する理解力・思考力を働かせて読むことを求めた。

### 2. 実施した結果の分析

出題のねらいを捉えた正答が書けた者は、学年全体の中で数名であった。多くは設問文にある「内容・構成等について」「違いを挙げ～表現意図叙述効果が見られるか」という条件をふまえていない解答が多く見られ、表記・表現に関する相違点を挙げていたり、相違点を挙げるにとどまっていたりしていた。残念ながら空欄の者も少なからず見られた。解答例以外にも可とした。

### 3. 今後の課題

今後の課題として、①問題文を読む速さ②設問のねらいを捉え、条件をふまえた解答作成③応用問題に取り組む意欲等について、一層意識して指導していきたい。そのための方策として、生徒相互に記述解答を比較検討し添削し合う活動を今後も機会を見つけて積極的に取り入れていきたいと考える。加えて、漢文および漢文訓読文に対する苦手意識を減らすことが出来るよう、古典Bの漢文指導と連携した取り組みをしていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

現代文では、1年次から初見の応用問題の出題を続けている。共通するテーマ、読解方法の共通性などを意識している。今回は対談を文字化した文章と対談の中に出てくる写真作品を資料として掲げ、「話すこと・聞くこと」と「書くこと」「読むこと」を関連づけて出題、指導要領「現代文B」エ「目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること」に関する力を評価することを意図した。

新傾向として対話形式のやりとりを取り上げることが多いが、実際の対談でのやりとりから、必要な情報を取り出し、さらに写真を使った新聞報道の記事を書くという形で読解力と表現力の評価をねらった。

### 2. 実施した結果の分析

他の問題にてこずり、本問を解答できた者は全体の二割程度と少なかった。新聞記事については、情緒的にならず、客観的な事実を述べ、コメントする、よい解答が多かった。震災を風化させないモニュメント的な意味と復興のシンボルとしての機能を認める一方で、消しがたい震災後の心の傷を思うとき、辛いことを思い出すきっかけとなる一本松の存在の二面性にふれた解答が多かった。

### 3. 今後の課題

今後の課題として、①多面的な資料としての新聞記事の活用、②表・グラフ・写真・絵からの読み取り、③意図的な資料の取捨選択の危険性など、メディアリテラシーにかかわる内容も積極的に取り上げていくとともに、応用問題であることから解答解説段階でのフォローの方法について考えていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

授業で学習した教材に続く場面の漢文を資料として示し、複数のテキストを関連づけながら、共通して読み取れる人物の心情を考えさせた。

### 2. 実施した結果の分析

既習の漢文Iについては置き字も含めて抜き出して誤答となる解答が見られた。初見の漢文IIは古典を苦手とする者には難易度が高かったようである。IIで正答が得られた者はIでも正答である者が多かった。

### 3. 今後の課題

古典の学習では句形や文法など知識事項の理解と定着を目指すことは大事であるが、単純に訓読と口語訳で終始するだけでなく、本文中の言動や詩歌の語句・表現から、人物の心情や考え方などを読み取り、作品に描かれた人物像や主題を考える学習の仕方を指導していきたい。そのための方策として、① 単元の学習の中で心情説明や協議の時間を設ける、② 単元の学習振り返りの際に記述問題で取り上げる、等の手立てを一層意識して行うよう努めたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

同一作者（本居宣長）による、同一作品（『源氏物語』）を取り上げた文章、同一の述語（「もののあはれ」）の出てくる文章を提示（ただし、大問は別とし、設問中で同一作者であることを示した）し、重ね合わせて読解することができるかを試した。合わせて文学史での知識の活用、応用力を確認した。文学史の問題は、新学習指導要領の「言語文化」、「古典探究」の科目も意識し、平安時代の『源氏物語』が江戸時代にどのような論評されたか、革新的な本居宣長の評言を取り上げ、なおかつ『源氏物語』の中 心理念である「もののあはれ」と和歌との深い関わりについての理解を尋ねた。

### 2. 実施した結果の分析

・「もののあはれ」、和歌と物語の関係性についての思考力を問うには、問題が易しすぎた。問一は本文の別な箇所から抜き出しても正解することが可能であった。半数以上の生徒が正解し、無解答はほとんどなかった。文学史の問題は、いわゆる「三大集」（古くは「三代集」とも）と平安時代の勅撰和歌集の「三代集」との違いの知識、『紫文要領』の内容の理解からの判断を問うもので『後撰和歌集』『拾遺和歌集』は、ほとんど正答できなかった。『古今和歌集』は三大集にも含まれるのでほぼ全員が正解した。

### 3. 今後の課題

本居宣長の「もののあはれ」論は、これまで仏教的・儒教的に受容されていた『源氏物語』を、仏教的戒律・儒教的道徳を越えた生身の人間の営みの書ととらえ、物語と和歌というジャンルを越えて、日本人の心のありよう、日本文化を考察したものである。このことを知識として覚えさせるのではなく、自分たちで発見する授業の展開を行いたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

資料から読み取った情報や習得した知識を活用して、歴史的事象の展開について考察する力をはかる。

### 2. 実施した結果の分析

正解はウ。この資料はオーストリア＝ハンガリー帝国の帝位継承者夫妻が暗殺された事件に関するものである。この事件の背景にはボスニア・ヘルツェゴヴィナをめぐるオーストリアとセルビアの対立がある。またセルビアの後ろには、パン・スラヴ主義を唱えるロシアがついている。それを考えれば、セルビア王国内で煽られているのは反オーストリアの気運であり、反ロシアでないことは明白である。

ア・イ・エについては、資料の内容と矛盾がないので正しいことが書いてあると判断できる。受験者93名のうち、正解者は56名、正答率は約60%だった。当時のセルビアをめぐる対立の構図がわからなくても、ア・イ・エの内容と資料を比較して矛盾しないことから消去法でウにたどりつけると思っていた。しかし正答率から見ると、長い文章資料の読解がまだまだ苦手だと考えられる。

### 3. 今後の課題

初見の長文資料を、既習した歴史的事象をもとに読み解き、正誤を判断していく訓練が必要である。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

資料から読み取った情報や習得した知識を活用して、歴史的事象の展開について考察する力をはかる。

### 2. 実施した結果の分析

正解はウ。14世紀の中国の王朝（明）の皇帝がイスラームに改宗していたという事実はない。資料中、明の皇帝が仏教寺院の再建を要求していること、インド（トゥグルク朝）の王がそれに対して人頭税の支払いを求めていることを読み取れれば判断できる。非ムスリムには人頭税が課せられるという、イスラーム世界について習得した知識と、初見の文字資料から読み解いた内容を結び付ける力を問う問題として出題した。

受験者の正答率は約67%。資料は長文であり、見慣れない語句も多く出てくるが、読み取り自体はさほど難解なものではないことを考えると、この数値はいささか残念であった。

### 3. 今後の課題

普段から資料を読み解いたり、複数の知識を組み合わせて考えたりする演習、訓練がもっと必要であると感じた。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

複数の資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりを類推するという、思考力と判断力をはかった。また判断した理由を文章で説明させたので、表現力もみることができた。

### 2. 実施した結果の分析（正答率や誤答のパターンなどから、生徒の現状を分析）

フランスを示しているグラフはCが正解で、正答率は49%だった。しかし、そう判断した理由となると、2つのグラフとも正しく読み取り類推できている生徒は23%にとどまった。よって、正解した生徒の半分は、不確かな知識でたまたま当たっただけと考えられる。ただ、問題全体の得点合計が30点代でも、グラフの読み取りだけはしっかりとできている生徒が2名いたのは興味深い。

### 3. 今後の課題

一問一答的に覚えている歴史的事象を活用して、グラフや表、文字史料をいかに読み解き正誤を判断していくか、まだまだ訓練が必要である。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

資料から読み取った情報や習得した知識を活用して、歴史的事象の展開について考察する力をはかる。

### 2. 実施した結果の分析

正解はア。グラフから、1879年から82年にかけて物価が高騰している事実を読み取り、インフレの起こる仕組みや明治初期の財政についての知識と結び付ける力を問う問題として出題した。

正答率は約70%で、受験者の解答を見ると、ウを選択する誤答が目立った。恐らく、資料の読み取りそのものはできていたものの、重要語句である「開拓し官有物払い下げ」に反射的に反応したのではないかと思われる。落ち着いて、市場に生糸が出回ると価格は下落するという経済の仕組みについての知識を思い出せれば、正解はアしかないことが分かるはずである。

### 3. 今後の課題

資料読み取りは難しいものではない。資料から読み取れることと既習の知識とをつなぎ合わせるような考え方の訓練を、日頃より行っておくことが必要である。

## 問題省略

### 1. 出題の意図（何の力をはかったのか？共通テスト試行問題に照らし合わせて）

史料分析能力をはかる。特に、同じ歴史的出来事であっても、記録する立場の違いによって記載方法が変わることに気付いて、客観的な情報を引き出せるかどうかということを判断したい。

### 2. 実施した結果の分析（正答率や誤答のパターンなどから、生徒の現状を分析）

- ・出典名を答えられた者：理系 3 / 33、誤答 12 / 33、白紙 18 / 33  
文系 20 / 94、誤答 31 / 94、白紙 43 / 94  
合計 23 / 127、43 / 127、61 / 127
- ・根拠を答えられた者：理系 10 / 33、誤答 9 / 33、白紙 14 / 33  
文系 26 / 94、30 / 94、28 / 94  
合計 36 / 127、39 / 127、42 / 127

### 3. 今後の課題

問題文に「史料分析能力をはかる問題なので、白紙で出さないで、必ず解答すること」と書いたにもかかわらず、出典名の白紙が約4割、判断の根拠が3割と、取組みの姿勢が心配な状況である。直前に問題演習を行い、出題する候補であることを指摘したのだが……。

特に出典名（『吾妻鏡』と『玉葉』）は1問1答形式でも問われる基本事項であるが、覚えられない生徒が半数以上で、思考力を問う以前の状況であった。取組みの姿勢から指導しなおさなければいけない。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

明治初期、特に自由民権運動の開始前の日本政府がどのような国作りをしようとしていたのか、これまでの知識をもとに、政府の意図を資料をもとに推測させる。

### 2. 実施した結果の分析

時代設定が、自由民権運動後のことと捉えて、文章を書いている生徒がほとんどであった。時代設定をまず考えさせる練習をしたい。それ以外の部分では、出題の意図に則した解答が数名見られ、授業の中で単なる暗記だけでなく、歴史を考える力がついているようだ。

### 3. 今後の課題

白紙の生徒が依然として多い。授業の中で考えさせて、文章を書かせる訓練が必要だと考えた。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

- ・写真から、地形に結びつけてとらえる判断力
- ・階段状の地形をどう描けばよいかを考える思考力
- ・等高線の性質をとらえた上で正しく表現する地理的技能

### 2. 実施した結果の分析

「河岸段丘」を答えられたのは半数程度。河川地形については基本的なものの一つであり、資料集にその写真が載っていることを考えれば、正答率は低いといわざるを得ない。また、等高線の性質について正しくとらえていない解答が目立ち、正答率は10%ほどであった。

### 3. 今後の課題

地形図を用いた出題は必須であり、いかに地形図や等高線について触れる機会を増やしてその感覚を掴むかが課題である。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

地理学習の深化・発展の方法としてICTを活用すること、とりわけ空間情報の読図は重要な手段である。その目的のひとつは、学習活動にリアリティをもたらすことにある。伝統的、特徴的な「衣食住」および「都市」について作問した。「住」については、雪国秋田の伝統的な家屋も扱った。

### 2. 実施した結果の分析

「文化」は生徒たちにとって興味・関心の高い分野ではあるが、「食」および「都市」の正答率が低かった（それぞれ65%前後）。写真⑤～⑦は、スーパーでも容易に手に入るようになった食材であり、生徒の生活体験に関連しているものと考えられる。「都市」の写真⑧～⑪は、作問者が撮影した。写真⑧では、ココヤシのほか北東貿易風によるモンキー・ポットツリーの気候景観が読みとれる。

### 3. 今後の課題

世界規模でのQOLの向上は、伝統文化に大きな変容をもたらしている。教科書で取り上げられている景観写真は、かなり速いスピードで古いものになりつつある。そのため授業・出題者がいかにリソースを収集できるか。生徒が初めて見る写真をどのように提示するかが課題となる。印刷物をカラーにしてみたいものである。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

「創造的破壊」の意味について、多面的に理解しているか。

「創造的破壊」の反対の概念を、指定語句を用いて適切に表現することができるか。

### 2. 実施した結果の分析

解答例①：これまでの製法（伝統）を大切にしている商品

解答例②：長く大切に使うことを意図した商品

(3点)

	人数	割合
正答者	209名	88.6%
誤答者（うち無回答）	27名（7名）	11.4%

### 3. 今後の課題

当初は、解答例①のみを想定していたが、教科書では創造的破壊を「古いものを破壊し、新しいものを創造する」と表記していたことから、答案回収後に解答例②を設けて採点を行った。

今回は大意が掴めていれば正答としたこともあり、予想以上の正答率であったが、今後は指定語句の工夫や字数制限などで難易度を調節していきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

- 「プラトンの哲人政治」の考え方について、理解しているか。
- 安倍首相に関する資料を基にして、「プラトンの哲人政治」を行うに際して必要な要素を、安倍首相への助言のかたちで表現することができるか。

### 2. 実施した結果の分析

解答例：あなたは哲学者ではない（哲学を学んでいない）ので、哲学を学ぶべきですよ。

傍線部各2点

得点	人数	割合
4点	26名	26.8%
3点	0名	0.0%
2点	21名	21.7%
1点	1名	1.0%
0点（うち無回答）	49名（9名）	50.5%（9.3%）

### 3. 今後の課題

基本的な記述問題であるにも関わらず、出題の形式に惑わされたためか「大学を中退せずに学びなさい」といった誤答も見られた。1割弱が無回答であったことも併せて、問題の趣旨を適切に把握させることを意識させていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

与えられた2次関数のグラフの特徴を読み取り、立式し、答えにたどりつけるかをみた。授業で扱っていない初見の問題である。(2)は軸が正、(4)はグラフの「-1」のヒントに気づくことができるかがポイントである。(2)と(4)は2次関数の式とグラフの関係性を正しく理解した上で高い思考力がないと解けない問題である。

### 2. 実施した結果の分析

(1) 答え「負」 正答率 89.0%

「正」7.3%, 「負」89.0%, 「0」0.0%, 「空欄その他」3.6%

(2) 答え「正」 正答率 63.0%

「正」63.0%, 「負」25.6%, 「0」3.7%, 「空欄その他」7.8%

(3) 答え「正」 正答率 87.2%

「正」87.2%, 「負」3.7%, 「0」3.7%, 「空欄その他」5.5%

(4) 答え「正」 正答率 24.8%

「正」24.8%, 「負」27.1%, 「0」37.6%, 「空欄その他」10.6%

(1), (3) は予想通り正答率が高い。

(2) は予想より正答率が高い。(4) は予想通り正答率が低い。

### 3. 今後の課題

今回の出題から「グラフから必要な情報を読み取り、立式する」ことが苦手であると感じた。「式からグラフを描き、解く」問題とは逆の思考である。「話し合いの時間を多く取ること」や「次に問題を解くためのヒントを考えさせ、残しておく」など思考力を高めることはしているが、より思考力を高められるような工夫が必要である。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

(1), (2)は授業で扱っていない形の乗法定理を利用した問題。定理を正しく理解しているか、計算を正確にできているかを見た。

(3)は文章を読解し、自分で工夫しながら立式していく問題。10万人を上手く使えば、ウイルスAに罹患している人が100人になる。さらにその100人を除いた、99,900人から誤診される人を求め、乗法定理を利用していくわけであるが、しっかり問題を読まない・読めない生徒、10万人から誤診の人を求めてしまうミスが多かった。

### 2. 実施した結果の分析

#### (1), (2) 配点 8点

得点：0点	57%	1点	0%	2点	0%	4点	6.3%	5点	0%
6点	0.7%	7点	0%	8点	36%				

#### (3) 配点 8点

得点：0点	82%	1点	0.6%	2点	3.4%	4点	4.8%	5点	0%
6点	0.6%	7点	0%	8点	8.6%				

(1), (2)については身に付いていれば非常に簡単に解ける問題であったが、0点が57%ということで、授業で扱った内容以外の周辺の知識について自ら模索して身に付けようという意識が低いように感じられる。

(3)については、簡単な文章では類題を扱っていたが、今回の問題では読解力不足を露呈した生徒が多くかった。

### 3. 今後の課題

今回の出題から、問題の難易度に関わらず、初見の問題に対して既習事項を応用したり、何を訊かれているか正確に判断して立式したりする能力が不足しているように感じた。一人で考える時間・グループで話し合う時間を適切に設定して思考力を高められるように工夫していきたい。

また、授業の教材についても教科書をもう少し活用して基礎学力の定着を意識する必要性を感じたので、学力の隙間ができないよう気をつけて指導していきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

三角関数に、対称式(変数を入れ替えても変わらない式。ここでは  $\sin \theta + \cos \theta$  や  $\sin \theta \cos \theta$ )の考え方を用いて、2次関数に帰着させる問題である。誘導に沿って解く中で、式の形から適する解法(三角関数の最大最小、合成、不等式など)を選択して答えを求めていく。

特に、一見して三角関数で用いるとは思えない意外な解法に対しても、適切に公式を選択して取り組めるかを測る。

### 2. 実施した結果の分析

(1)	正答率	71.6%	(2)	正答率	33.8%
(3)	正答率	10.3%	(4)	正答率	1.6%

冒頭の2問は教科書でも類題を扱っており、予習した生徒の正答率は高かった。

一方、類題で見られない解法を模索する(先述の思考力を本格的に問う)3問目以降で正答率が落ちていることから、思考力や応用力がまだ不十分だと考えられる。

### 3. 今後の課題

指導が類題のパターン学習に陥らないよう、また生徒がパターン学習で受験対応できると誤解しないよう、普段の学習から思考力の養成を頻繁に取り入れなければならない。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

平面のベクトル、及び空間のベクトルにおける1次独立性を正しく理解し、数式処理へと結び付けることができるか否かを問題にした。

### 2. 実施した結果の分析

各設問の得点率は以下のとおりであった。

(アイウ)	正答率	8 6 %
(エ)	正答率	1 0 0 %
(オカキ)	正答率	5 9 %
(クケコ)	正答率	3 2 %
(サ)	正答率	4 1 %
(シ)	正答率	4 1 %
(ス)	正答率	8 2 %
(セソタ)	正答率	8 6 %
(チツテ)	正答率	9 1 %
(トナ)	正答率	3 6 %

(アイウ) (エ) は高い正答率を示したが、(オカキ) では正答率が低下した。特に、(オカキ) で正答を導いた生徒の約半数が(クケコ) は誤答となっている。同様に、(セソタ) (チツテ) で正答を導いた生徒の半数以上の生徒が(トナ) では誤答となっている。この結果は、「空間内の任意のベクトル(平面上の任意のベクトル) は、1次独立の関係にある3つ(2つ) のベクトルを用いて表すことができる」という知識は有しているが、それをもとに計算処理を進め、正答を導くことができなかつたことを示している。

### 3. 今後の課題

今回の結果から、多くの生徒は学習内容に対する知識を有していると推察される。しかし、その知識を活用して最後まで計算処理を行う力が十分身につけられていないために、学習の成果を感じ取ることができていない生徒が少なくないと考えられる。学習内容を理解することと、確実な計算力を身に着けることは数学学習の両輪である。

今後は、学習事項の知識を習得させることに加え、確実に計算処理をして正答を導くという「知識を活用させる学習」にも焦点を当てて対策を講じる必要がある。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

今回の試験範囲では、微分法の応用、積分法とその応用基問題からの出題となっている。この制限の中で、積分漸化式を利用して定積分の値を求める問題を出題した。センター試験の解答を誘導する解法を考えれば、「誘導に従って解法する」ことも大事である。

### 2. 実施した結果の分析

予想では、漸化式を利用できない生徒や部分積分法ができない生徒が多いのではと考えていたが、結果は予想通りではあったものの、解答に不備のある答案も多く完答しているものはごく少数であった。

115名が受験し、12点満点で最高は12点、最低は0点、平均は2.25点、無回答は24人であった。各設問毎の正答率は、次の通りである。

ア	イ	ウ	エ	オ	カ
74%	39%	37%	50%	4%	5%
キ	ク	ケ	コ	サ	シ
4%	3%	2%	1%	2%	1%

### 3. 今後の課題

考查の後半部分で出題したためか、時間が足りず、この問題にたどり着かなかった者も多かった。基本事項が曖昧なままだったり、計算力が不足していたり、そもそも全く問題を理解していない者も多く、今後は繰り返し指導や、授業ごとに確認テストを行うなどの対策を取っていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

整数問題からの出題で、東北大学の問題の改題である。ただ単に誘導するのではなく、試験時間にどのようなことを考えてほしいかを伝える意図がある。実際の試験ではこのようなことを自問自答しながら解いていくことも多く、この問題を通して、問題にどのように立ち向かうかを指導したい。

### 2. 実施した結果の分析

問題の意図は理解していたが、(3)の数学的帰納法で証明するという基本事項が身に付いていないため、完答者は5名と少なかった。数学に関する文章を読むことは得意でない者が多く、(1)での正答率は95%であったものの、(2)は2択であるにも関わらず誤答者が増え、本当に理解して解いている者はさらに減ると思われる。

### 3. 今後の課題

習った問題と形式が同じ問題でないと、生徒は初見だと考えてしまう。文理問わず数学が苦手な生徒が多いだけに、本質が同じである問題をどう結び付けさせるかという思考過程の指導をしていきたい。また、基礎事項の定着に向けては地道に確認していくなければならない。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

3年文系の発展数学②では、数学ⅡB分野の基本事項の確認は一通り終わっているが、今回の試験範囲ではベクトルについて基本分野のみの出題にとどめることになっている。この制限の中で、ベクトルの内積の基本性質を使って不等式の証明をすることで、2次から3次へ発展して扱えることの有用性に気づいてほしいということから、「Schwartzの不等式」を取り上げてみた。センター試験の穴埋めも、全体像を見て「何を利用するのか」を考えることが大事であるということにも気づいてほしいと考えて作問した。

### 2. 実施した結果の分析

$$\text{予想では } ① -1 \leq \cos\theta \leq 1 \Rightarrow 0 \leq \cos^2\theta \leq 1 \quad , \quad ② 0 \leq \cos^2\theta \leq 1 \Rightarrow (\vec{x} \cdot \vec{y})^2 \leq |\vec{x}|^2 |\vec{y}|^2$$

①⇒②の段階で迷うのではと思って作問した。

得点率は①21%②45%であり、さらに①○②○9%、①○②×13%、①×②○36%から、①と②の相関関係は見えない。むしろ②は、問題文を見ればすぐわかるのであり、①で1/5しかできなかったところに課題がありそうである。

(3)(4)は空欄がほとんどであり、(3)解答率53%、その内○は53%、(4)解答率25%、その内○は43%であった。内積の成分表示が定着していない状況が見て取れる。

### 3. 今後の課題

考查問題の後半部分で出題した。前半部分で時間がなくなり、この問題にたどり着かなかつた者も多く、空欄が25%もあった。作問者としては、かつてないほど簡易な出題をしたつもりだったが、基本事項が曖昧なままであつたり、計算力のなさが際立つたりしている。この辺の強化を図らなければならない。

なお、今回のような問題を出題する際には、各小問毎の通過率と難易度に適度な相関関係が見えるような設定が望まれるので、次回作問する際に工夫したい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

特に、大学入学共通テストで求められる思考力・表現力の定着を図る目的で出題した。

### 2. 実施した結果の分析

電池の直列接続と並列接続では、直列接続の方が大きな電圧がかかるので、同じ抵抗であれば、直列接続の方が消費電力は大きい。また、抵抗は両端が同じ電圧であれば、直列接続の方が一つあたりにかかる電圧が半分になることもあり、消費電力が小さい。並列接続の方は、その電圧がそのままかかるので、消費電力が大きくなる。よって、電池は直列、抵抗は並列に接続するとよかったです。

結果は、電池の直列が正しく描けている生徒は、46.3%。抵抗の並列が正しく描けている生徒は40.2%。すべて正しく描けている生徒は32.9%であった。

予想より正答率は低かったが、今回の問題はテストの最後の問題であったことからか「記入なし」の解答も結構あった。時間があれば、解答できた生徒が10%ほど増えたと思われる。

### 3. 今後の課題

抵抗と電池のそれぞれについて、並列と直列の場合の消費電力はどうなるかを考えると解きやすかつたのだが、普段から初見の問題にも対応できるよう本質を押さえて学ぶ姿勢、粘り強く考える姿勢を身に付けさせたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

今回の定期考査のねらいは2次試験に良く出題される力学の総合演習と波動の証明問題の確認である。難易度としては中堅国公立大学の問題程度で、複合問題が多く、やや高めに難易度を設定している。力学も物体にはたらく力の性質から各法則の適用の条件などがしっかりと分かっており、その上で適切に立式していくかないと解答ができないようになっている。各運動の法則が複合的に取り込まれているので、しっかりと論理的に考えなければならない。特に「内力しかはたらいていないときは運動量保存則が使用できる」→「その後、単振動につながる」という流れは非常に頻出の分野であるので、リード文と図の状況をしっかりと確認した上で順序よく解答ができなければならない。

最近は全統マーク、進研マーク、駿台マークなどを分析してもマーク模試でさえ単問で終わる問題ではなく、前問の解答がうまく導き出せなければ解答できないつながりのある問題が増えてきた。問題を解くための材料をしっかりと学習した上で適切に使用することを学習しなければならない。

### 2. 実施した結果の分析

#### ◎大問1 力学総合演習

力学的エネルギー保存則 → その後個別の状態に合わせて運動の法則を適用というスタイルの問題である。与えられた初期条件から等加速度運動、運動量保存、単振動までを適用し、解答を求めていくか。思考力が問われる問題である。正答率は概ね良く、こちらが想定していた以上に記述式の解答にも適応していた。しかし、立式の段階でのミスがまだ多く、特に最も基本的な「力がどちらの向きにはたらくか」などでミスをする生徒が多く、もったいないと感じる。教科書レベルの知識をもう一度確認する必要を感じた。

#### ◎大問2 単振動

難関大でよく出題される単振動の問題である。鉛直方向の単振動であるために、重力の影響で振動中心がずれていることをしっかりと学び取っていたかが鍵を握る。リードしながらの問題なので、解きやすかったはずである。しかし、ここでも中位から下位層では単純な力学のルールを曖昧に覚えている者が多く、しっかりと条件を見極めて解くことができていない生徒が多かった。「なんとなく」では物理は解けない。公式になんとなく当てはめて解こうとするクセをなくしていかなければいけないと感じる。

#### ◎大問3 ヤングの干渉

オーソドックスなヤングの干渉の干渉条件の証明問題である。前半はしっかりと授業で確認しているので、記述問題にも対応していた。全体的に力学よりもしっかりと解けていた。証明の問題は非常に大切で、公式の成り立ちが理解出来ていれば、大概の物理的現象に対応できる。この部分をより強化しなければならないと感じた。

### 3. 今後の課題

記述の演習はしっかりと行えたので、予想よりもしっかりと解答は出来ていた。しかし、立式の甘さなどの減点箇所が多く、平均点はやや低めだったと考える。東北大AOⅡや前期で難関大を目指している生徒は非常に平均点が高く、しっかりと適応しているところが見えるが中位から下位層は教科書レベルの定義がまだ定着していない様子が見られた。今後はセンター試験もにらんで、基礎基本の確認を再度行っていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

問2 (エ)

化学的な事物に関する原理についての理解を基に、必要な情報を抽出して現象に関する数的処理をする力をはかった。

大抵の元素は原子番号が大きくなると原子量が増加するが、出題した  $^{18}\text{Ar}$  と  $^{19}\text{K}$  を含め、その関係性が逆転するところが4ヶ所存在する。問題文の「アルゴンとカリウムの原子量の大小関係は、(4) の大小関係と異なる。」の文章と表1より、自然界でのアルゴンの同位体のうち、存在比が最も大きいものは、相対質量40のものであることを導き出す問題。

生徒は「原子量は自然界に存在する同位体の存在比と相対質量の平均値である」ということは理解しているが、この問題を解くには「原子量と大小関係と原子番号の大小関係が異なる場合がある。」という情報を読み取り、合わせて考えなければならない。

### 2. 実施した結果の分析

正答率： 42% … 数的な処理ができなかつた。

無回答： 17% … 問題から必要な情報を得ることができなかつた。

正解できなかつた生徒は、文章の中から問題を解くために必要な情報を抽出し、関係性を考えながら、数学的な処理をする力が足りていなかつた。

### 3. 今後の課題

他単元・他科目・他教科の知識や法則を横断的に理解させる必要がある。また、考え方や計算の仕方には、複数のアプローチがあることに触れていく必要がある。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

思考力をはかった。

### 2. 実施した結果の分析

そもそも1年次の学習内容と2年次の学習内容に難易度の差がある。正答率は当然低い。問3の正答率は2%程度。

### 3. 今後の課題

内容を正しく、深く理解させることを心がける。

問題省略

1. 出題の意図（何の力をはかったのか？共通テスト試行問題に照らし合わせて）

思考力をはかった。

2. 実施した結果の分析（正答率や誤答のパターンなどから、生徒の現状を分析）

気体の性質と化学反応の量的関係を併せて複合的に考えなければならない問い。まだ、複数の知識を併せて考えるには至っていないといえる。問2□は完答した生徒は4%程度。

3. 今後の課題

内容を正しく、深く理解させることを心がける。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

共通テスト試行問題で出題された、対話形式のリード文と実験手順に関する問題を組み合わせた。初見の問題に対して、リード文と既習内容とを組み合わせて考えることができるか、科学的思考力・表現力、実験における技能を問うた。

### 2. 実施した結果の分析（正答率や誤答のパターンなどから、生徒の現状を分析）

- ・正答率 25%
- ・無解答 … 問題の意図を把握できない。
- ・表現が不適切 … リード文の理解が浅い。リード文と既存の知識を融合させることができない。語彙力が不足していて、適切に表現することができない。

### 3. 今後の課題

- ・「○○が○○で○○だから」など、適切な科学的表現をしやすいよう発問し表現する習慣を確立させる。
- ・既習内容との融合を図ることで、単元間の横断的理解を深めさせる。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

初見の問題に対して、リード文と既習内容とを組み合わせて考えることができるか、科学的思考力を問うた。

### 2. 実施した結果の分析

- ・正答率 6%
- ・無解答 … 問題の意図を把握できない。
- ・塩基配列に T を記入 … リード文の理解が浅い。DNA と RNA の区別をつけられていない。

### 3. 今後の課題

- ・単元間の横断的理解を深めさせる。
- ・生物基礎の内容を授業内で取り込み、復習の必要性を促す。
- ・引き続き、小単元ごとに大学入試問題を配付し、学習内容と入試問題との関連性を意識しながら復習に取り組ませる。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

「生命現象と物質」「生殖と発生」「生物の環境応答」各分野にまたがる総合問題とした。代謝の中の光合成と遺伝子の発現、植物ホルモンや光受容体といった生命現象を通じて植物とは何かを理解し考察できるか解答する問題とした。

### 2. 実施した結果の分析

記述、論述力が物足りない。説明のための重要語句がヒントとなっているが活用できていない。

### 3. 今後の課題

授業校時内で演習し、解説する時間を充分に増やしたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

「生物の体内環境の維持」分野の「体内環境としての体液」、「血液凝固のしくみ」、「自分たちの身体の仕組み」について理解を深めて考察できるか。思考の過程を踏まえて解答する作問を行った。

### 2. 実施した結果の分析

基礎用語の定着が曖昧であったり、血液凝固のメカニズムについてうまく説明できなかつたりする解答が見受けられた。

### 3. 今後の課題

思考過程を表現する問題に対する解答に慣れていない。今後は授業の校時内でそのような演習を増やしていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

「固体地球とその変動」分野「地震」を取り上げた。

地震波に関する内容より、初期微動継続時間について正確な知識を持っているか、実際の地震が発生した設定から活用するべきデータを読み取ることができるか、またそのデータの活用について深い考察ができているかを測る。

### 2. 実施した結果の分析

2年文系の生徒 117 名のうち、問 1 [22 秒] の正解率は 96%、問 2 の  $V_p$  [6km/秒] の正解率は 71%，発生時刻 [午前 5 時 31 分 50 秒] の正解率は 66% であった。

計算は難しくないが、リード文中に時刻や距離のデータが複数あり、これらを整理することで必要なデータを取捨選択する必要がある。問 1 がほぼ全員正解なのに対し、問 2 はどのデータを使うと良いか判断できず、 $270\text{km} \div (20\text{秒})$  という誤答が数名いた。また、無回答（空欄）も 10 名ほどあった。

### 3. 今後の課題

これまでの計算問題は、図やグラフの読み取りと組合せはあったものの、不必要的データ数値は問題文からはずす傾向があった（問題文中の数値は計算に使う）。実際の実験や観察に基づいた設定では、必要なデータがどれかを各自で判断することが要求される。設問を丁寧に読み、それぞれのデータ（数値）の意味を理解して計算をする必要がある。今後、授業内で「実験や観察に基づいたデータ」を利用して、それぞれのデータの意味を考えさせる時間を多めにとるよう改善したい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図（何の力をはかったのか？共通テスト試行問題に照らし合わせて）

「宇宙の構成」分野「太陽」を取り上げた。

太陽の表面温度と太陽大気（コロナ）の温度などの、太陽の構造に関して正確な知識を持っているか、その知識を整理・活用して図として正しく表現する深い考察ができているかを測る。

### 2. 実施した結果の分析（正答率や誤答のパターンなどから、生徒の現状を分析）

3年の文系の生徒112名のうち、問(1)の正解[②]を選択している生徒は75%以上いるが、問(2)の説明を正確にできている生徒は20%（25名）ほどであった。

[根拠① 中心からの距離70万kmが太陽の表面で、

表面温度が6000K ( $10^3$ Kより大きく  $10^4$ Kより小さい) である]

[根拠② 中心からの距離70万kmより遠くは太陽大気（コロナ）で、

表面温度は6000Kより高い200万K ( $10^6$ Kを超す) 程度になる]

### 3. 今後の課題

地学だけでなく理科の問題は、これまでにも図やグラフを読み取る問題は出題されている。マーク式では多くの生徒が正解となるが、何を根拠に正解を導き出したかの思考過程や、正確に表現する力については意識が薄いようである。今後、授業内で「根拠となるポイントを明確にする」ことや「文章として書きあらわす練習」の大切さを伝え、時間を多めにとるよう改善したい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

大学入試（国公立二次試験・私立大学）で実施される小論文・口頭試問・筆記試験等を見据え、データ（今回は図による資料）を読み取る力、知識・分析・考察・問題解決を論述する力が養われるようを作問した。

### 2. 実施した結果の分析

- (1)：知識問題で正解率は高かった。正解率9割。
- (2) (3)：図から読み取り、知識（病名と原因）と時代の変遷を考える問題。複合的な問題になると正答率がかなり下がった。正解率は5割程度。

### 3. 今後の課題

考查の結果を分析すると単純に知識を問う問題に関しては正解率が非常に高いものの、複合的な問題や思考力を問う問題になると正解率がかなり下がっていることが言える。知識は持っているので、その活用方法や時代の背景、その時代に起きた問題とその原因について、これまで以上に関連性をもって計画的に授業内で取り組む必要がある。また、これからわが国の健康問題における課題について明確に述べることができるよう指導したい。

## 問題省略

1. 出題の意図（何の力をはかったのか？共通テスト試行問題に照らし合わせて）

[問2] で、知識の活用と組み合わせ（思考力・判断力）

問題文を基に、長所と短所を組み合わせて考える問題。（長所だけ見ると似たようなものもあるが、短所と組み合わせることで正解を導き出せる。）

2. 実施した結果の分析（正答率や誤答のパターンなどから、生徒の現状を分析）

[問1] で（B）・（C）・（D）の語句の正答率は、語句の説明文から、[問2] の正しい組み合わせを導き出せる者も多く、全て正しい組み合わせができた者が70%と、こちらが狙った通りの正答率となつた。

3. 今後の課題

今回は文章から判断して答える方法を記号による選択にしたが、今後は記述式の解答を求め、判断力・思考力を基に「論理的に文章を書く力」を図る作問を考えたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

授業で取り扱った英文を要約文に直し、適語を考えさせる問題であり、英文の内容をしっかりと理解していなければ、適語を答えられないようにした。また、語義を英語で表現し、表す単語を本文中から抜き出す問題では、語の意味を日本語に置き換えて覚えるのではなく、しっかりとイメージして意味を考えさせるために出題した。

### 2. 実施した結果の分析

store は名詞の意味しか覚えていない生徒は解答できていなかった。品詞を意識して適語を解答していた生徒の正答率が高かった。単語の語義を英語で説明した出題は三回目であるが、語の意味を日本語に置き換えて覚えるだけでは不十分だと感じた生徒は毎回徐々に正答率が上がっている。

### 3. 今後の課題

即興的なコミュニケーションの力が求められるので、英語を英語で理解する力が必要となる。その意識が、スピーキング力やリスニング力の向上にもつながっていくと思うので、出題を工夫し、目指す力が身に付くような学習を促したい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

プレテストでは正しい選択肢の数を明示せず、当てはまるものを全て選ばせる問題が出題されていた。確かな知識と判断力が無ければ得点にならないような問題を作成し、生徒が、自分自身に欠けていた知識に気づくことができるようとした。特に3の問題では名詞節と副詞節の見分けについて、1つの判別方法では正答にたどり着けないように工夫した。

### 2. 実施した結果の分析

各クラスで3問全て正解した生徒は0～2人であったが、1と2についてはおおむね正解していた。3については名詞節と副詞節の本質的な理解が不十分であるため、あと一歩のところで正答たどり着けていないようだった。

### 3. 今後の課題

まずは、このような出題形式を継続することで、知識を確実なものにしなければ考查で点数はとれず、小手先のテクニックではなく本質的な理解と英語力が必要であるという意識付けをしたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

試行調査では、英語（リーディング）において、必要な情報を整理する力を問う問題として、本文の内容と合う英文を解答数を設げずに答える問題が出題された。その正答率は、共通テスト試行問題第2問で14%、第6問で6%と大変低い正答率であったため、普段の学習の中でもこのような問題に対応しうる力を養うべく、必要な情報を的確に捉えて整理する力を問う問題として、同様の問題を2題出題した。

### 2. 実施した結果の分析

上記E5の問題での正答率は35%、I2では17.5%と、試行調査に比べるとよく出来ていた。しかしながら、解答数を指定して答えさせる問題に比べると、正答率は低いと考えられる。言い換えられた英文の内容と本文を照らし合わせて、正しいか否かを的確に判断する力が不十分であると考えられる。

### 3. 今後の課題

次の2点が考えられる。第一に、正確に英文を解釈する力の育成である。必要な情報を整理しながら英文を読む力の育成が大切である。第二に、本文の内容を自分の言葉で置き換える、すなわち、リテリング指導の強化である。現在、リテリングの際、教科書の内容をそのまま使って英文を作る生徒がいるが、そうではなく、自分の言葉で言い換えることを奨励していきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

的確に知識を活用することができるか。

### 2. 実施した結果の分析

正答率は 1. 80% 2. 69% 3. 48% 4. 40% 5. 53% であった。文法事項や語法が確実に身に付いていないため、3～5番の正答率が低くなつた。

### 3. 今後の課題

文法事項等をしっかりと理解させ、確実に活用できるように定着させなければならない。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

共通テスト試行問題（筆記〔リーディング〕）では、複数の選択肢の中から、正しい答えを複数選ぶ問題（正答数は示されない）が出題された。これに倣い、与えられた情報を正確に処理する問題として、上記の問題を出題した。

### 2. 実施した結果の分析

設問10問のうち、すべてを正しく答えることができた生徒は1%に満たなかった。従来型の、すべての文に誤りが含まれており、その箇所を指摘する問題に比べると、解答時間も長くかかったと思われる。

### 3. 今後の課題

与えられた情報の内容を正しく読み取ることに加え、それが言語として正確かどうかを判断する力も求められる。文法事項を繰り返し練習することで定着させるとともに、正しく活用できるようになるため、インプットに加え、アウトプットの機会、量を増やすことが必要である。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

試行調査では、必要な情報を読み取る力を問う問題として、本文の内容に合っている英文を、解答数を指示せずに過不足なく答える問題が出題された。その正答率は、共通テスト試行問題第2問で14%と大変低い正答率であったため、必要な情報を的確に捉えて整理する力を問う問題として、同様の問題を2題出題した。

### 2. 実施した結果の分析

上記の問題での正答率は1%に満たなく、各クラス、1~2名しか正答することができなかった。その要因としては、言い換えられている表現に気づかなかったり、文脈から判断することができていなかったりなど、正確に読み取る力が不足しているからだと考えられる。

### 3. 今後の課題

まずは、英文を正確に読み取る力を養う必要がある。ディスコースマーカーを手がかりに要点をとらえつつ、パラグラフの流れを意識しながら読む活動を強化していきたい。また、物語文などでは、行間の意味もとらえるような指導も必要である。さらに、同義語習得の促進にも努めていきたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

問1) 知識を問う基礎問題。

問2) 入試の小論文では家庭生活分野の内容が扱われることも多いことから、入試で比較的多い文章読解型の小論文に取り組ませた。出題内容は新聞の時事的テーマ「遺伝子組み換え食品」とした。今回は遺伝子組み換え食品を取り巻く環境の変化や現状をA、Bの新聞記事より読み取らせたい。

### 2. 実施した結果の分析

問1) 正答率 72.5%

問2) 配点4点

0点(未記入) 0%    2点 7.5%    3点 12.5%    4点 80%

多くの生徒は、筆者の意図を理解した上で自分の考えを肯定的または批判的に述べることができていた。授業だけではなく国際探究でも食料自給率について学んでいたことから、より的確に理解していたのではないかと感じた。

減点については、正確な事実に基づいた内容ではなく、誤った内容で文章をまとめたことによる減点の生徒がほとんどであった。

### 3. 今後の課題

今後は、1年次での学習内容が受験の小論文の題材になるということを意識付けながら取り組ませたい。

## 問題省略

### 1. 出題の意図

生徒の思考力や表現力を生かした効果的なコミュニケーションの実現のため、データ（文章・図・資料）を読み解き、問題解決に活用する能力（目的に応じて整理し、その情報を分析して、問題解決に役立つように知識として蓄積する）があるのかを見る問題。

### 2. 実施した結果の分析

【9】解答例：<問題点は>文字は詳しい説明に向いているが、瞬間に理解することは難しい。また、漢字があるため、漢字の読めない人や子どもにはわからない可能性がある。

<改善点は>文字と図形を組み合わせるとより早く注意を促すことができる。

【10】解答例：<印象として>健康改善を実感した人が多い印象を与える。

<理由として>グラフの中心をずらし、手前の要素を大きく（多く）見せている。

ほとんどの生徒が、解答例に沿った考え方を述べていて、データ分析の能力はあると判断できた。間違いや減点などもあったが、データを読み解こうとする努力の跡はうかがえた。

### 3. 今後の課題

今後は、これから的人工知能（AI）時代を生きていく生徒にとって、情報活用能力は社会に出てから不可欠な能力ということを意識付けながら取り組ませたい。

（「大学入学共通テスト」については、今の小学6年生が受験する2024年度（25年1月実施）から、新科目の「情報I」を出題することが政府の方針として確認されている）

### III. 校 内 研 修

## Classi ポートフォリオ研修会

【日時】 5月18日（金） 15：40～16：50

【場所】 会議室

【目的】 Classi の活用方法を学び、ポートフォリオ機能活用の可能性を知る。

【対象】 全職員

【内容】 （司会：探究部教育研究班主任 齊藤 雅子）

### 1 講話

#### ①「生徒の主体性を育むポートフォリオの活用」

講師：ベネッセコーポレーション 白川 隆朋

- ・ノートの効用（羽生結弦・大谷翔平・本田圭佑等の練習ノート）
- ・e ポートフォリオの効用→学習評価を引証づけるエビデンス
- ・記録する、自問自答する、自ら調べる等の生徒は学習時間・学力が向上する可能性がある。
- ・「振り返り」の数が多い生徒ほど習得を活用することに転化していく傾向が強い。
- ・e ポートフォリオを単に導入しただけではだめ。目的をはっきりさせて、「どうして？」  
「それでいいの？」「どうやった？」「次どうする？」等の教師からの声かけが大事。
- ・主体性の深化＝振り返りの深化＝五角形をつくる＝（実践→内省→気付き→教訓化→応用や転化）



#### ②「学習管理力を育てる Classi の活用」

講師：探究部教育研究班 Classi 担当 深井 裕之

- ・学習時間記録をベースに Classi を使って学習を Planning する。
- ・学習 Planning のポイントは、
  - ア 達成可能で自己評価できる目標設定
  - イ 無理のない計画立て
  - ウ 肯定と課題の二面で書かせる
  - エ PDCAサイクル
  - オ 学習量を増やし受験体力を付ける
- ・データや推移を検証しながら、振り返りの内容を確認し、面談などにも役立てる。
- ・教科バランスがとれてきた、上位者が増えてきた、目標がレベルアップされている等効能は多いが、主体性については今後も課題だ。

#### ③「ポートフォリオを活用した指導要録・調査書の作成の提案」

講師：探究部教育情報班主任 中村 東

- ・他校も活用を始めている。ポートフォリオ機能は、この先、生徒にも担任にもメリットがある。今日はその有効性を皆に知ってもらいたかった。時間がなく、実際の活用法等は、またの機会にしたい。

## 2 校長謝辞

- ・振り返りのレベルがあるということを知ることができた。
- ・振り返りを、気付きのレベルまで指導することで、改善の糸口がみえてくるのではないか。
- ・日々多忙であるが、これを活用することで、それが解消されたり、生徒にとっても教員にとっても実りあるものがもたらされたりすればよいと思っている。

### 【事業を振り返って】

多くの職員は Classi 活用の有効性については疑いのないものだと感じてはいるが、どのような場面・活動で有効なのか、実際どのように活用できて、生徒にどのような有効性が認められているのか等、具体的に知るきっかけとなった。

ポートフォリオの集積は、生徒の能力向上の面だけでなく、一層多面的に求められる書類の作成等において、教員の多忙化を解消するヒントになるかもしれない。

単純な活用では、今年度から授業アンケートの回答入力と集計に使われる。

それ以外でも、使ってみないことには、効能は実感できないと思うので、尻込みせずに、なるべく積極的にやってみないといけないと感じた。

(記録：腰山 潤)

## 高大接続改革職員研修会

【日時】 7月18日（水）15：45～16：45

【場所】 会議室

【目的】 「秋田南SGHカンファレンス2018」に向け、大学入学共通テスト試行問題の分析をもとに、高大接続改革で求められる学力やそれを身に付けるための授業づくりについてヒントを得る。

【対象】 全職員

【講師】 株式会社ベネッセコーポレーション東北支社秋田県  
担当 河野 仙一 氏

【内容】

### 1 P D C Aサイクルとカリキュラム・マネジメントの関係

カリキュラム・マネジメントとは各学校が特色ある教育活動を進めるために地域や学校の実態を考慮しながら生徒が「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を組み立て、学校の特色を生かした教育課程を編成・実施、継続的に評価改善していくP D C Aサイクルを回していくことを指す。実行するために、

- ①「学校教育を通して育成すべき生徒の資質・能力」の設定＝学校のグランドデザイン
  - ②「各教科等を通して育成すべき生徒の資質能力」についての設定
  - ③④に応じた年間計画の作成
  - ④各教科等の単元ごとの指導案作成
- が必要である。



### 2 大学入学共通テストの概要と導入のイメージ

大学教育を受けるために必要な能力を測定。思考力・判断力・表現力を中心に評価する。現行学習指導要領下では「教科型」で出題。次期学習指導要領（2024年度以降）では出題教科、科目を簡素化も含めて見直す予定である。

実施大綱の予告は2019年度の予定であり該当学年が2年生となった時期に確定することになる。1年生のうちには幅を持って指導していくことが求められる。

### 3 大学入学共通テストの試行調査（プレテスト）の概要と特徴

2017年11月に記述式+マーク式で国語、数学ⅠAを、マーク式で数学ⅡB、理科、地歴公民（現代社会）を、2018年2月にマーク式で英語を実施した。

特徴としては、各教科科目とも社会とのかかわりや探究活動を意識した出題が増加している。また、「複数の資料」を読み取り、情報を統合・考察する力を重視している。さらに解答形式が記述式+新形式のマーク式など、多様化している点が顕著である。

#### 4 大学入学共通テストの試行調査の実施結果と今後の見通し、生徒の課題

大学入試センター試験に関する既存データでは蓄積されていないタイプの問題に関するデータの収集を重視し、探究の過程などの設定を通じて、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解く問題を出題することを前提としている。科目ごとの総合平均得点率5割程度を目標とし、正答率が中程度からやや高い程度の問題を増やし、多様な学力の識別ができるすることを目指した。今後、実施結果を踏まえ、問題構成や内容等の決定、また、素点以外の成績提供の在り方の検証をする。

生徒に関しては、記述式問題に対応できる力の養成と、正確な自己採点ができることが課題である。

#### 5 「進研模試」として

入試改革・教育改革を見据えて現行1年生から「新傾向問題」を出題していく。記述式問題に対応できる力を育成するため、受験後の「振り返り機能」を強化する。

#### 6 他校の取り組みの紹介

##### 【事業を振り返って】

本講義では進研模試で新傾向問題への対応について尽力していくことがわかった。

必要なのは、どの教科、科目とも新しい学習観に対応できる学力を身に付けさせることである。大学入学共通テストでは、設問の意図を理解し、知識を使ってその間に適した形で表現していくことが重要視されるということである。そのために必要なのは知識の力、基礎力である。授業や考查問題の作成を通じて大学入学共通テストの形に合った問題に対処していくとともに、基礎学力の充実をおろそかにしてはいけないと改めて感じた。

(記録：樽田 雪子)

## 教育相談職員研修会

【日時】 11月26日（月） 15：45～16：35

【場所】 会議室

【目的】 学習や部活動、友人関係等で日々ストレスを感じている生徒が多数いる中、そのストレスに立ち向かう強い心を育てるための考え方や関わり方を学ぶ機会とする。

【対象】 全職員

【講師】 スクールカウンセラー 横尾裕紀子 氏

【内容】 テーマ：「逆境に負けない心を育む～レジリエンスを強める関わり～」

### 1 自己紹介

初回面接時に、ここでの会話は基本的に秘密である。話したくないことは話さなくても良いと伝える。しかし、生徒も保護者も先生たちにわかつていてほしいと思っていることが多い。よりよい形で情報を共有しながら連携していきたい。

### 2 レジリエンスとは

「復元力」「回復力」「弾力」 → 「逆境に対する反応としての精神回復力や自発的治癒力」「しなやかな強さ、また立ち直れる力」

レジリエンスの3つのイメージ → 回復力としてのレジリエンス（適応力・順応力）

～今日の話題

抵抗力として

（元々の力）

再構成力として

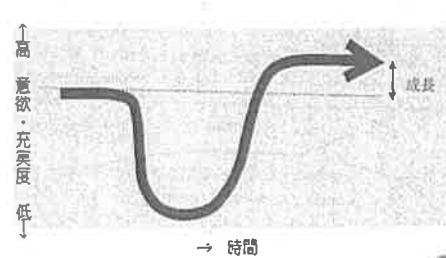
（変化した後の力）

※日本でこの考え方方に注目が集まるようになったきっかけは東日本大震災後。震災で様々なストレスを受けたが、そのストレスからの立ち直りに注目し、健康的な部分に目を向け研究された。

何か困難なことがあっても時間とともに立ち直ることができるが、悪い考え方の癖があると「この状態がいつまで続くのだろう？きっとこの先ずっとなんだ」というような考え方をしてしまう。

【ありがちな悪い考え方の癖】	
レジリエンス低い	レジリエンス高い
（ネガティブ）	（ポジティブ）
永続的	一時的
全面的	限定的
自己分化する	自己分化しない

立ち直り曲線



悪い考え方の癖に陥ると立ち直るのに時間がかかるてしまう。自分の考え方の癖を知ること（メタ認知）が大切。癖は直すことができる。自分を客観的に見ることができれば変われる。

### 3 レジリエンス・コンピテンシー（態度・行動様式）

#### ①自己の気づき

自分の思考、感情、行動、生理的反応に注意を払う能力

#### ②自己コントロール

望ましい結果を得るよう自分の思考、感情、生理的状態を変化させられる能力

#### ③現実的楽観性

ポジティブなことに気づき、期待し、コントロールできるものにフォーカスし、目的を持った行動が起こせる能力

#### ④精神的柔軟性～リフレーミング

状況を多角的に見て、創造的かつ柔軟に考えられる能力

#### ⑤強み※1としての徳性（キャラクターストレンジス）

強みを活用して自分の真の能力を発揮し、困難に打ち勝ち、自分の価値観にあった人生を創造する能力

※1～強みの分類表～

**知恵と知識**：創造性、好奇心、柔軟性、向学心、知恵

**勇気**：勇敢さ、忍耐力、誠実さ、熱意

**人間性**：愛情、親切心、社会的知性

**正義**：チームワーク、公平さ、リーダーシップ

**節制**：寛容さ、謙虚さ、思慮深さ、自制心

**超越性**：畏敬、感謝、希望、ユーモア、スピリチュアリティ

#### ⑥関係性の力

強い信頼関係を築き、維持する能力

～いろいろな役割を受け持つことで、いろいろなネットワークがつながる

小さな失敗を経験することで、困難な状況を乗り越えられる力が身に付く

### 【事業を振り返って】

“レジリエンス”の中でも回復力としてのレジリエンスについて学ぶことができた。様々な困難の中にあっても、本来、立ち直り適応していく力は誰もが持っている。その力を引き出したり、育てたりしていくことが大切だと感じた。学校生活の様々な活動を通して、連携しながら一人一人の問題解決のための支援ができるよう、今後も相談活動の充実を図っていきたいと考える。

(記録：長山 葉子)



## IV. 研修講座等受講報告

# 新規採用栄養教諭研修を終えて

栄養教諭 大門 愛

## 1 栄養教諭を目指した理由

学生時代、小学校へ教育実習に行き食育の授業を行った際、子どもたちの「分かった」と目を輝かせた瞬間に出会い、子どもたちと関わる楽しさを体感したことが学校で働きたいと思ったきっかけです。飽食の時代を生きる子どもたちにとって、正しい知識に基づき食べ物を選択し、自分の健康を自分で管理していく力は必要不可欠であると考えます。私は子どもたちが将来健康に生き生きと生活していくための食生活の基盤作りをしたいと考え、栄養教諭を目指しました。

## 2 校外研修について

一般研修では、教員としての心構えや生徒指導、生徒理解等、学校現場すぐに生かせる実践的な内容を幅広く学ぶことができました。他の初任者の先生方とも各校での取組について情報交換をする機会があり、生徒との関わり方や指導法等について新たな視点を多く得ることができました。

専門研修では、栄養教諭の役割や職務内容を自覚するとともに、学校給食や食に関する指導の意義や重要性を学びました。特に、中堅栄養教諭との合同研修では食に関する指導の模擬授業を通して授業構成の仕方、発問の仕方、他の教職員との連携の仕方等を学ぶことができました。先輩栄養教諭の実践を間近で学ぶことで、今後自分が目指すべき姿を描くこともできました。

## 3 校内研修について

一般研修では、学校経営方針や校務分掌、学習指導要領や学習指導案の作成等の研修をしていただいた中で、学校目標を達成するためには教職員一人一人が連携・協力して「学校組織」として職務に取り組んでいくことの重要性を学び、私自身もその一員として日々の職務に邁進していきたいと心に留めました。

専門研修では、学校給食における衛生管理や学校給食を教材として活用した食に関する指導の進め方等の研修の中で、「安全・安心な学校給食の提供が行えてこそ、食に関する指導が行える」ということを学び、今後、常に心掛けながら職務に励んでいきたいです。

## 4 これから栄養教諭として取り組みたいこと

「学校給食の管理」においては、衛生的に管理されたおいしい給食の提供を目指し、調理員と連携しながら進めていきたいです。「安全・安心な学校給食の提供」を基盤とした上で、学校給食を教材として用いた「食に関する指導」を行い、子どもたちが実際に味わいながら食について学べる機会を積極的に作り出していけるよう日々努力していきたいです。

最後に、一年間ご指導いただきました、秋田県教育庁保健体育課 健康教育・食育班 指導主事 加賀由美子先生、初任者研修指導者 保坂正子先生、秋田県立秋田南高等学校・中等部教職員の皆様、並びにご支援いただきました皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

# 高等学校教職5年経験者研修講座を終えて

教諭 金森 康臣

## 1 はじめに

秋田県教育委員会は、本県教員が高度専門職としての職責、経験及び適性に応じて身に付ける資質を明確化した秋田県教員育成指標を平成30年3月に策定した。この教員育成指標は、本県教員が主体的に資質向上を図る際、教員としてのキャリアステージ全体を見通し、自らの職責、経験、適性に応じて、効果的・継続的な研修を行うための目安であり、平成30年3月に県教育委員会が策定した教職員研修体系（研修計画）もこれを踏まえている。この指標の中で、教員はその経験年数等により4つのキャリアステージに分けられ、そのキャリアステージで求められる資質・能力を身に付けるため、様々な研修が設定されている。「教職5年経験者研修」は実践的指導力を向上させる「第2ステージ」に位置づけられており、積極的に学年経営に参画しようとする姿勢をもち、個々の個性・適性・分掌等に応じた資質・能力を向上させることを目標としている。

## 2 研修の概要

### ◎Ⅰ期

#### ○生徒理解と人間関係づくり

- ・認知の考え方
- ・生徒理解の一つの視点
- ・人間関係づくり

#### ○学校組織の一員として - マネジメントの視点 -

- ・多様なマネジメント
- ・学校プレゼンテーションシートの作成
- ・まとめ

#### ○生徒の実態を踏まえた授業改善①

- ・学習指導要領の基本的な考え方
- ・生徒の実態に応じた指導
- ・テーマ別協議・演習

### ◎Ⅱ期

#### ○教師が使えるカウンセリングの技法

- ・教育相談に当たって大切な考え方
- ・話を聞く（傾聴）ということ
- ・教育相談で使える技法
- ・演習・協議

#### ○生徒の実態を踏まえた授業改善②

- ・授業提示・協議

### 3 課題の解決に向けて取り組んだ事例

「言語活動を効果的に位置づけた授業展開についての工夫と実践上の課題」をテーマとして、課題解決を試行錯誤した。Ⅰ期の「生徒の実態を踏まえた授業改善①」におけるテーマ別協議・演習において、先生方と意見交換をした。その後、指導案作成、教材研究、授業実践を行い、Ⅱ期の「生徒の実態を踏まえた授業改善②」において授業提示・協議を実施した。具体的には次の通りである。

#### 【実践1】言語活動を効果的に位置づけるための単元計画の作成

指導案の中に単元計画を作成し、計画的に言語活動に取り組むよう試みた。下記に作成した単元計画を記載する。

#### 6. 単元計画(総時数10時間)

	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準と評価の方法
1 ( 1 ～ 2 時 限)	・剣道の歴史的変遷を理解することができる。	・木刀や学習シートを用いて学習する。	・生徒の理解が深まるよう、学習シート、木刀を活用する。	【評価規準】 剣道の歴史的変遷を理解しているか。 (知識・理解) 【評価方法】 学習シート
	・礼儀作法・礼法・足さばきを丁寧に行うことができる。	・礼儀作法・礼法・足さばきをする。	・礼儀作法の重要性を理解するために、日本の伝統的な視点を交えて説明する。	【評価規準】 礼儀作法・礼法・足さばきを丁寧に行おうとしているか。 (関心・意欲・態度) 【評価方法】 観察
2 ( 3 ～ 4 時 限)	・素振りが基本通りできる。	・正面素振り、左右面素振り、跳躍素振りを行う。	・示範することで、生徒の技術的向上を目指す。	【評価規準】 素振りが基本通りできているか。(技能) 【評価方法】 観察
	・素振りをよくするために何が必要か考えることができる。	・試合形式で素振りを評価し、自己の課題を考える。	・互いに評価する場を設けることで、自己の技術を考える。	【評価規準】 お互いの素振りを評価することで自己の課題を明確にできたか。 (思考・判断) 【評価方法】 学習シート

3 （5～6時限）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・踏み込み動作を理解することができる。</li> <li>・踏み込み動作を通して、空間打突を丁寧に行うことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・足さばき、素振りを確認し、踏み込み動作をする。</li> <li>・踏み込み動作を通して、打った形、残心を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・踏み込みを理解するために、足さばき、素振り動作の延長線上にある技術であることを説明し、示範する。</li> <li>・有効打突の条件を説明することで、形、残心を理解することができる。</li> </ul>	<p><b>【評価規準】</b> 踏み込み動作の特性を理解することができたか。(知識・理解) <b>【評価方法】</b> 観察</p> <p><b>【評価規準】</b> 空間打突を丁寧に行うことができるか。(技能) <b>【評価方法】</b> 観察</p>
4 （7時限）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防具の特性・着装の仕方を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防具を付けることで特性・着装を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業が円滑に進むよう、経験者を活用し、着装の指導を行う。</li> </ul>	<p><b>【評価規準】</b> 防具の特性・着装を理解しているか。 (知識・理解) <b>【評価方法】</b> 観察</p>
5 （8～9時限）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕掛け技を積極的に打つことができる。</li> <li>・仕掛け技を丁寧に打つことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕掛け技を打つ。</li> <li>・仕掛け技を打たせる。</li> <li>・仕掛け技を打つ。</li> <li>・仕掛け技を打たせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・示範することで、生徒の技術的向上を目指す。</li> <li>・グループで技を確認することで、自己の課題を明確にする。</li> </ul>	<p><b>【評価規準】</b> 仕掛け技を積極的に打つことができるか。 (関心・意欲・態度) <b>【評価方法】</b> 観察</p> <p><b>【評価規準】</b> お互いの仕掛け技を評価することで自己の課題を明確にできたか。(思考・判断) <b>【評価方法】</b> 学習シート</p>
6 （10時限）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的に技を出すことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地稽古を通して、積極的に技を出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技の攻防を楽しむために、打突の機会を説明し、示範する。</li> <li>・試合形式で技を評価し自己の達成度を確認する。</li> </ul>	<p><b>【評価規準】</b> 積極的に技を出せたか。(関心・意欲・態度) 技が上達したか。 (技能) <b>【評価方法】</b> 観察 学習シート</p>

## 【実践2】生徒の考える視点の明確化

言語活動の一環として、常に授業で実施してきた「素振り」を試合形式で評価し、お互いに確認する場面を設定した。素振りは入学年次より指導しており、技術は非常に高くなっている。互いの素振りを審判として評価することで、一つひとつの動作の意味を考えることができ、素振りをより深く理解することにつながると考えた。その後、学習シートに審判をして考えたこと、周りの生徒の素振りの評価、改善点、評価を踏まえた自己の素振りの改善点などを記入することで、深い学びを求めていく。その結果を踏まえ、グループ学習などで、それぞれが考えたことを全体で共有する場面を設定し、これから授業でも更なる素振り技術の向上を目指していく。

授業を進める上で工夫したことは、素振りの評価の視点を明確にしたことである。以下の4つのポイントを示した。

- 1)足の動きに手が合っているか。
- 2)振り上げ時、左拳が相手の見えるところまで振り上げているか。
- 3)左拳が正中線から外れていないか。
- 4)大きな声を出しているか。

以上の4つの視点をもとに演技者を見て、評価するよう指導した。この授業における評価は、審判の実技と、なぜそのような判定をしたかについて記入した学習シートで行った。使用した学習シートを次ページに記載する。

## 4 まとめ

「言語活動を効果的に位置づけた授業展開についての工夫と実践上の課題」をテーマとした2つの実践を通して、次のような成果を得ることができた。

まず「実践1 言語活動を効果的に位置づけるための単元計画の作成」では、言語活動をやりっぱなしで終わるのではなく、教師側の「これができるほしい」「こうあってほしい」という姿に近づけたかを明確にすることができた。事前の計画を密にすることで、授業に一貫性がもて、どのクラスも偏りなく授業を実施することができた。

次に「実践2 生徒の考える視点の明確化」では、「なぜこの活動をしているか」「なにを考えればいいのか」という、行う前段階でのやるべきことを明確化することで、深い学びにつながっていくことを理解することができた。授業後に生徒が、「素振りの振り上げが雑だったから、次の授業で改善を目指そう」「跳躍素振りの手と足がまだ一致しないから次頑張ろう」などといった声を聞くことができ、次時へつなげることができた。

高等学校教職5年経験者研修を終えて、多くの新しい知識を学ぶことが出来たが、改めて、当たり前のことを徹底する大切さを学んだ。今回の研修を通して学んだことを、今後の実践に活かして、日々精進していきたい。

## 剣道学習シート

年 組 番 \_\_\_\_\_

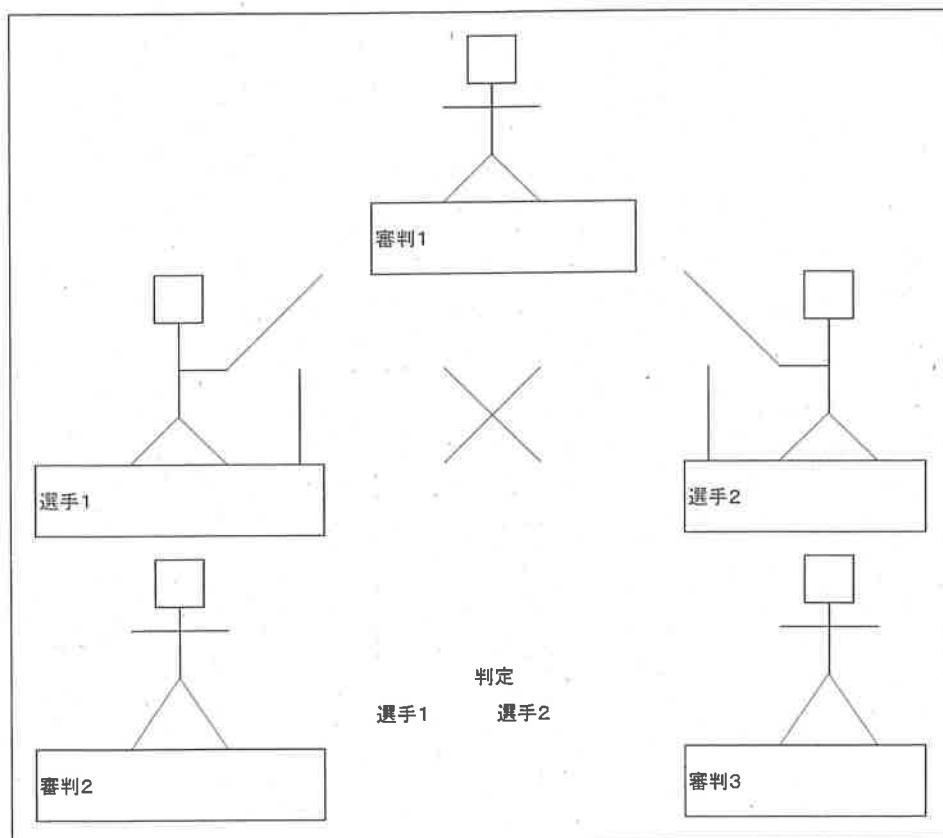
目標 素振りを良くするために何が必要か考えよう。

ポイント 1、足の動きに手が合っているか

2、振り上げ時、左拳が相手の見えるところまで振り上げているか

3、左拳が正中線から外れていないか

4、大きな声を出しているか



選手1			
1	A	B	C
2	A	B	C
3	A	B	C
4	A	B	C

選手2			
1	A	B	C
2	A	B	C
3	A	B	C
4	A	B	C

感想	素振りを良くするために何が必要だと思うか
----	----------------------

# 高等学校実践的指導力向上研修講座を終えて

教諭 伊藤孝紘  
教諭 松田達也

## 1 はじめに

秋田県教員育成指標では、4年目～10年目を第2ステージ「実践的指導力向上期」と位置づけており、本研修は教職経験8年目の教員を対象に、自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質・能力の向上を図ることを目的として平成30年7月9日と8月23日の2回に渡つて実施された。

## 2 研修の概要

### (1) 実践的指導力向上研修講座Ⅰ

#### ① 事例を通した生徒理解と対応

「自殺をほのめかす生徒」という仮想事例をもとに、グループで生徒指導の仮説・計画・立案を行った。仮説を立てる際、事例の捉え方は人それぞれであるということを理解し、円環的思考を持つことが重要である。生徒理解においては、(1)困っているのは誰か(2)行動の目的(3)感情制御の3つの視点が必要である。

#### ② 学校組織の一員としてー自己理解に基づく目標設定ー

資質・力量マップの作成を通して自己理解を深め、それにに基づく目標を設定した。

#### ③ カリキュラム・マネジメント

学習指導要領改訂の背景・要点を踏まえ、「学年で育成する資質・能力」、「各教科で行う活動」についてグループで話し合った。

### (2) 実践的指導力向上研修講座Ⅱ

#### ① 授業評価による継続的な授業改善

最初に評価と現状についてワールドカフェ形式でそれぞれの実践を共有した。その後教科に分かれ、次期学習指導要領の各科目の目標を読み込み、グループでキーワードを拾った。論理性や言語使用の適切な場面設定、他教科との連携が具体的に書かれており、授業を考える際の方向性が見えた。

## 3 まとめ

伊藤孝紘：本研修では同期採用の教員とワークショップで議論する機会が多くあったが、それぞれの学校や分掌での経験を踏まえて様々な視点から意見を交わすことが出来た。採用から7年経ち、各学校で自分の特性に応じて活躍している様子を見聞きし、改めて自己理解の重要性と教員としての今後の見通しを明確に持つことの必要性を実感した。このタイミングで中高一貫教育校、スーパーグローバルハイスクール指定校である本校に赴任してきたことを好機と捉え、自らの教員としての資質・能力の向上に具体性を持って取り組んでいきたい。

松田達也：はじめに書いたように、現在は「実践的指導力向上期」であり、今後は指導を受ける立場から指導する立場になる。そういう意味で自己理解や学校マネジメント等を学び、学校組織の中での自らの役割を考える良い機会と捉え研修に臨むことができた。

## V. 校外研修

# 平成30年度教員派遣スキルアップ研修 先進校視察報告

教諭 中 村 東

【訪問先】立命館守山中学校・高等学校

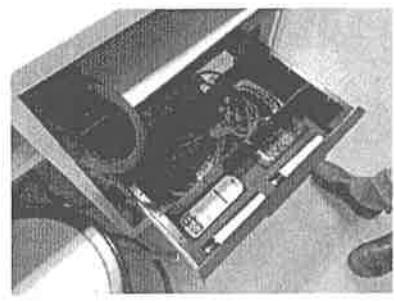
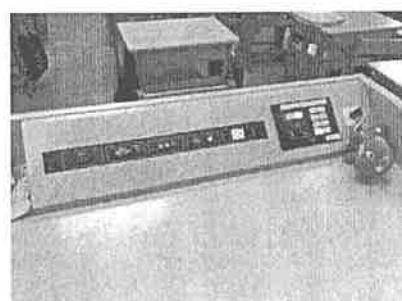
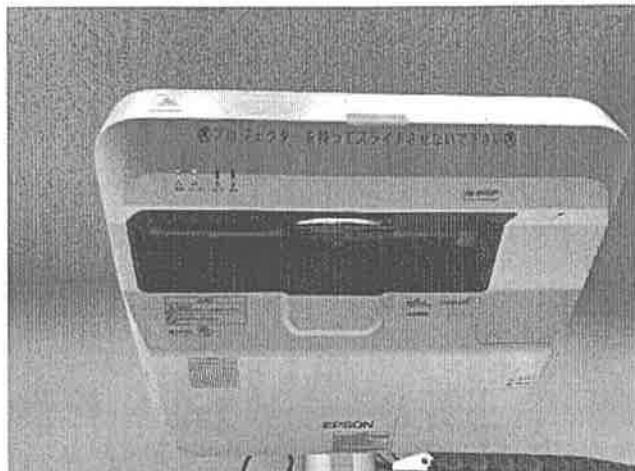
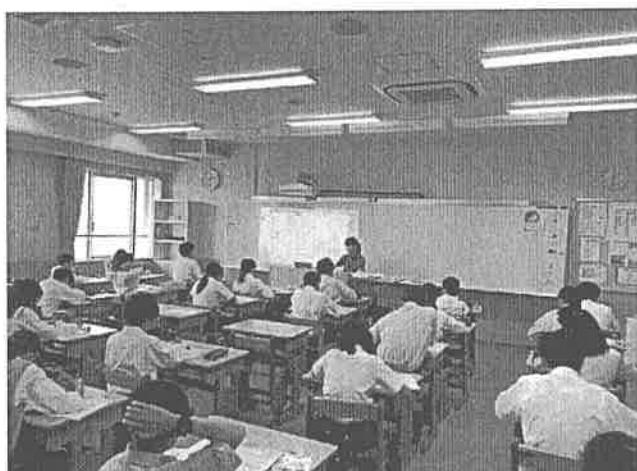
【訪問日】平成30年6月11日（月）

## 1. Classiの活用について

- 朝のS H Rで、各学年のグループに1日の連絡を入力したものを確認。
- 学習時間を入力させる。
- 夏休みなどの長期休業中は、生徒全員に同じメッセージを配信して、状況確認。
- 学習時間で声掛けをしていると、学習が原因の不登校が減少した。
- 学習時間をつけさせることで、確実に学習時間が増えた。
- 学習時間の入力をさせるのが上手な先生は、コメントを書いてきた生徒にはコメントを返す。それ以外の学習時間を入力した生徒には「check！」とだけコメントを入れている。
- 保護者の活用に関しては、4月のP T Aなどに時間をとって一斉にログインさせた方が活用状況が良い。

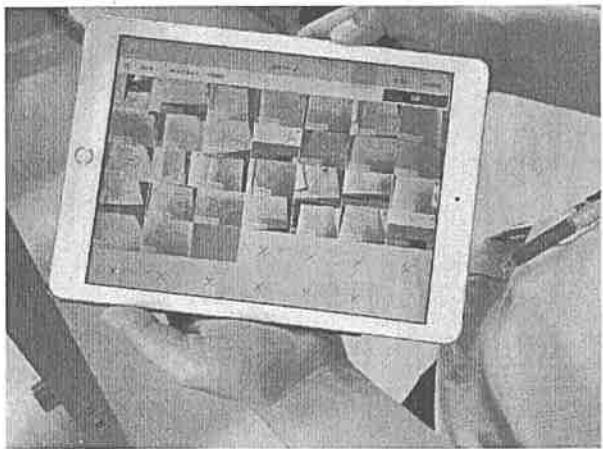
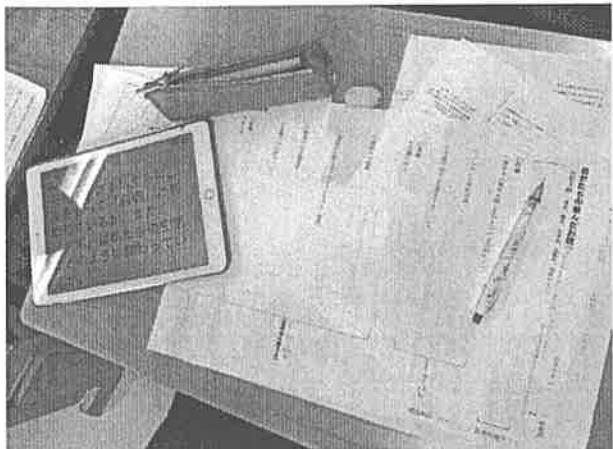
## 2. I C Tを活用した授業について

- 中学校の5教室は今年から4400ルーメンの明るいプロジェクターを配備。
- 上下に動くホワイトボード上に、左右に可動式のプロジェクター。



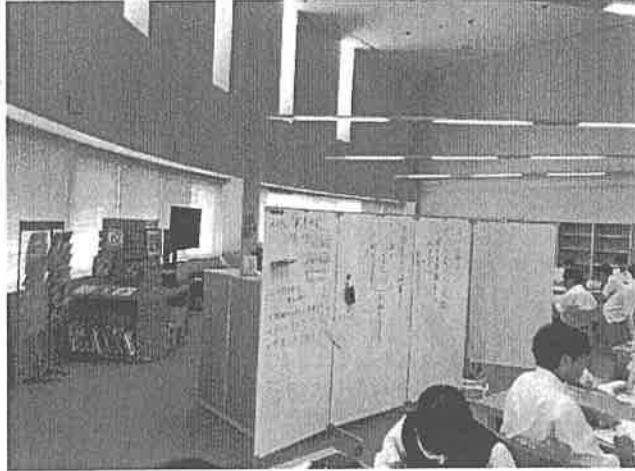
- 教卓にプロジェクターなどの接続端子がついている。
- 教室に1台のP Cがあり、教材を置けるサーバーと接続されている。
- ケーブル類も教卓内にある。
- 以上の設備を整えるのに、1クラス260万円。

- ・英語の授業での活用が盛ん。
- ・数学ではロイロノートの活用がみられる。来年以降はアップルペンシルの活用を検討中。
- ・Classi NOTEにしなかったのは、ロイロノートの方が早かったから。機能的にはほぼ変わりない。
- ・1人1台iPadを持っている。入学時に各自で購入してもらい、一度預かって設定を行っている。
- ・教室にはwifi環境が整っている。
- ・生徒はiPadがあってもスマホは持っている。
- ・導入時は3月に突然全員に買ってもらうことになった。しかしその後授業での活用の様子が見られず、保護者から質問が来たこともある。



### 3. ICT公開授業 with Classi での公開授業の様子について

- ・全教員の授業を公開。とにかくできる範囲でICTを活用した授業を見せた。
- ・各教員A4用紙1枚でそれぞれのICT活用の様子を報告し、冊子にしている。



## 【訪問先】京都府立清明高等学校

【訪問日】平成30年6月12日（火）

単位制の学校で、秋田県で言うと明徳館高校のイメージ。学力も上から下まで幅広くおり、京大志望者から地方国公立志望者、就職希望者まで幅広くいる。そこでICTを、学力差を埋めるために活用している。

校内はWi-Fi環境が整っている。

### 1. Classiの活用について

- ClassiのWebテストを利用して10分トレーニングを行っている。場所はどこでやってもよく、1単位に換算している。出席はClassiのログでとっている。

### 2. ICTを活用した授業について

- 1年生にはiPadを貸与しており2年目から購入。購入方法はソフトバンクからダイレクトに購入している。
- 3月や4月だとタブレットが不足している（入学時に購入する人が多い）ため、3月だとiPadを60台しか確保できず、契約を1か月早めて2月から契約をしている。
- MDM管理画面を使って、Appleストアを消している。学校からの配信以外できない。
- バージョンアップも一斉に行う。（誰かの環境が違うと、エラーが起こる可能性があるため）
- クレジットカード決済か代金引換で購入。学校での集金は行わない。ネット経由で購入してもらう。
- 専用のサイトを開設して、そこから手続きを行う。
- 商品は学校に届く。そのあと一斉に学校で設定を行う。
- 卒業時にMDMを外して返却する。
- 小売店との契約だと手数料がかかるので、ソフトバンクから購入している。
- 有償のアプリの導入方法はVPPという仮想通貨を使い、あとで請求書を発行する。
- 生徒への連絡方法に活用しているアプリ

ガルーン 個別の連絡 サイボウズ社のグループアプリ 校内サーバー上のみ（個人情報など）

ednity 授業の講座ごとの連絡ができる クラウド上（外に出してもいい情報）

Classi 保護者への連絡など

- 難関大志望者向けのチューター制（教員による相談役）を行っている。
- 教科担当者は自分の教科のことだけを見てしまいがちなので、チューターが間に入って教科のバランスをとりながらClassiで動画配信を行う。
- 難関大希望者のみ、オプションの学習動画パックを申し込ませて、動画配信をしている。
- 1・2年生は教科書発展や合格への100題を配信予約をかけて指導している。
- 学習動画などは既存のものを利用する方針。自分で作るときりがない。
- 授業の板書の写真をとって、後で共有している。
- スクールタクト（Classiノート）、ロイロノート、メタ文字クラスルームという3つのサービスを1年間試しで使ってみて、みんなで話し合ってロイロノートを正式に導入した。
- ロイロノートを学校説明会で利用 1人1台タブレットで職員室との連絡が取れる。
- 前回授業の振り返りを受けて授業を開始、最後に振り返りアンケートを入力させる。
- 「アンケート 学習 振り返り」で配信すると、生徒カルテで見ることができる。

設問1 授業の態度はどうでしたか？

設問2 今日の授業から学んだこと

- ①何をしたか ②何を理解したか・何ができるようになったか ③感想

設問3 今後の課題

- ①何がわからなかったか・できないか ②次回の目標 ③目標達成のために何をすべきか

設問4 今日の授業内容で質問したいことや、話したいことがあれば記入してください。

# 平成30年度教員派遣スキルアップ研修 先進校視察報告

教諭 平 田 哲 久  
教諭 伊 藤 孝 紘

【訪問先】東京都立国立高等学校

【訪問日】平成30年7月12日（木）

## ●学校概要・進路指導（北澤良浩副校長）

東京都の進学指導重点校に指定されている。都から現役で東京大学5名以上、難関大学（東京・京都・一橋・東工）及び医学科合わせて15名以上の合格を目指すよう指導されており、近年は達成することができている。国立高校の生徒・卒業生は「国高愛」が非常に強く、9月に開催される国高祭の目玉であるクラス演劇（全学年全クラスが各HRで開催。一教室に定員80名の観客が入り、何回かに分けて上演されるが、常に満員御礼）や、4月に開催される第九演奏会（生徒が有志で参加。参加率は高い）など、高校生活を満喫したい生徒がほとんどである。昔から3年間同じクラスであり、演劇も年々手の込んだものになっていく。担任も3年間同じことが多く、同じ学年でありながら他クラスの状況がつかみづらい。近年生徒の質の変容を感じており、クラスになじめず長欠したり進路変更したりする生徒が徐々に増えつつあり、時代に対応していかなければならぬと感じている。1、2年生の通塾率は10%程度。3年10月（国高祭後）から猛勉強を始める生徒も少なくないが、以前よりも「現役で行きたい大学を目指す」生徒が増えてきており、保護者からの要望も増えてきている。部活動も大変盛んであるが、学習時間確保のため部活動は18時で終了としている。都の「外部人材による自主学習支援事業」を活用して、「サポートティーチャー」として卒業生（大学生・大学院生）に自習室の監督を依頼し、在校生の学習指導や進路相談に対応している。謝金は都の予算及び後援会から支出している。

## ●生物…1年生物基礎（板山裕指導教諭・大野智久主任教諭）

### 3年理系生物（大野智久主任教諭）

いずれの授業も教師が黒板にスクリーンや掲示用紙、板書等の準備をしている間、生徒がグループ編成（板山…カードで4人×10班 大野…好きな人と人数は程々、条件「皆ハッピーになること」）をしていた。板山先生曰く「毎回の授業で行うことに最初は抵抗があったが、やってみると効率がよくなつた。グループ間の理解度の差の解消の一躍を担っている」とのこと。板山先生の授業ではその後、遺伝子の転写と翻訳に関する動画の検索ワードを指示し、グループ内の1名のスマホで視聴が始まった。黒板には準備段階で記載された本時の問い合わせ（「転写どのようにして起こる？」など）が複数並び、生徒は視聴した後に教科書やノート、スマホ、グループ協議等によって解答をノートに記入していく。「4月当初はスマホを使って調べる光景が見られるが、ひと月もすると wiki や某知恵袋では求める答えを得られにくく、まとまりも悪いことに気づく。そして教科書や資料集が最も活用しやすいことを悟り、自然と教科書・資料集中心の学習に進めていくようになる」とのこと。要所で専門的な説明（転写の方向、コドン表は全生物共通など）を加えていったが、授業の7割以上は生徒の活動の時間に充てられていた。大野先生の生物基礎では、配付されたプリントの課題（「半保存的複製とは？」など）にグループで協働して解答していく形で、板山先生の授業と同じようなスタイルであった。スマホも活用していたが、板書をスマホで撮影する生徒が散見された。学校全体でスマホの取り扱いに関する規定がないとのこと。あまりにひどい場合は没収するそうだ。グループの一人が中心とな

って解説していく流れが自然とできていた。大野先生曰く「この授業スタイルになってから落ちこぼれていく生徒が少なくなった。センター試験も上下問わず全体で点数アップした」

### ●英語…1年生コミュニケーション英語I（池田教諭 ALTとのTT）

重要無形文化財に登録すべきと思うものをユネスコに推薦する内容の手紙を書く、というゴールを設定してグループ活動を行っていた。1時間で完結できる内容ではないと思っていたが、どのグループも最後の発表まで終わっていたことに感心した。こういった活動を普段から継続していくなければできないことだと思った。スマホを使ってトピックについての情報を収集していたので、充実した内容の発表になっていたのだと思う。しかしながら、授業の内容とは関係の無いことにスマホを使っている生徒もあり、授業内での活用の難しさも同時に感じた。

【訪問先】東京都立両国高等学校

【訪問日】平成30年7月13日（金）

### ●中高一貫（小林正人副校長）

中学校入学3クラス、高校入学2クラスの計200人が各学年に在籍している。中学校で高校の内容を一切先取りしないので、高校1年次で中入生と高入生が混在したクラス編成している。中高一貫校発足当初は2年次から混成クラスにしていたが、うまくいかなかった。文理選択は2年次から緩やかに進み、ほぼ文理が半々になる。3年次には私立文系クラスが1クラスできるため、理系では48人在籍するクラスができてしまう。

国公立大学を目指している生徒が多く、大半が現役で大学に入りたいと思っており、そのために両国高校を選んでいる。したがって志望を下げて安全な方に行こうとする傾向がある。昨年度の国公立大学合格率は、31.9%で都立ではトップ3に入る。合格者60名中28人は高入生で、東大や医学部医学科も出ている。

### ●生物…3年理系生物（黒田淳子主任教諭）

「動物の反応と行動」の「刺激への反応」における鶏の筋肉の収縮実験を先週実施していたので、骨も有効に活用すべく、軟骨と硬骨の組織切片を作成し、プレパラートで観察・スケッチする実験を参観した。現行教科書では組織の扱いが減少し、二次試験でも出題する大学が減少しているが、骨細胞や骨髄について理解を深めることができるので、生物基礎でも実験材料として扱ってもよいかもしれない。教科書に記載されている実験はすべて実施されているとのこと。毎週実験しているだけあり、実験準備はスムーズであり、プレパラート作成もそれほど難儀している様子は見られなかった。顕微鏡で観察する際、おもむろにスマホを取り出して撮影する生徒がいた。学校全体でスマホ使用の細かい規定がない。休み時間廊下で使用している生徒が散見された。

理系生物は3年4月から始まり、週6時間実施。金曜は2時間連続実施し、主に実験に当っている。10月末に教科書を終え、以後は演習を実施する。生徒は18人とやや少なめで、他クラスの選択者と合わせても40人程度のこと。都全体の傾向として「成績が良く医学科を志望している生徒は物理を選択する」があり、そのように指導する教員もいる。生物選択者は農学・理学生物・獣医学・私立薬学部（理科は化学のみで受験可能）と、主に生物に関心がある生徒に限られている。

●英語…コミュニケーション英語Ⅲ（布村奈緒子主任教諭 ALTとのTT）

カードをランダムに配布し、毎時間違う席で違うメンバーとグループ活動をする。両国高校を志望する架空の中学生Ryota君に対しアドバイスをすることを単元目標に設定し、その過程で教科書の本文を読んだり、教師が用意した内容に関連するauthenticな文章や動画を見せたりして知識を深めディスカッションさせる。ジグソー法を用い、動きのある授業の中で生徒たちが協働して学んでいた。グループでは活動ごとに生徒それぞれにspeakerやlistener、monitor、notetakerなどの役割が与えられ、それが数分おきに目まぐるしく変わっていた。

リーディングに関して中学校1年生から高校2年生までは概要把握のみに留めアウトプットの機会を多くしている。高校3年生で構文など細かいところを取り扱う。年7～10回のプレゼンテーションを全員に課しており、評点の4割をそれらの評価が占める。高校3年生になつてもクラスで活発に英語を使えるのは中学校からの指導の影響が多く、中学校ではほとんど文法の説明はせずに、英語を使うことを中心に授業を展開しているそうだ。中学校で行っている英語劇は、今では脚本から全て生徒の力で作っており、高校に入ってもESSなどで続ける生徒もいる。たとえペーパーテストの成績が悪くとも英語を話すことに抵抗のない生徒が育っている。

## 情報と主体的に関わり、論理的な批評力を育成する授業の実践 —対話を通し情報の妥当性を吟味する—

秋田県立秋田南高等学校 伊藤 史

### 1 はじめに

本校は平成27年度にSGHの指定を受け、その翌年に中高一貫教育校として新たなスタートを切った、創立57年目の進学校である。「高い志をもち、ふるさとや世界に貢献するグローバルリーダーの育成」を重点目標として掲げ、目標達成のため、「基本的知識・技能・習慣」「探究力」「協働力」の3資質と、「課題設定能力」「課題探究能力」「論理的思考力」「プレゼンテーション能力」「実践力」の5能力の育成を目指して、組織的な授業改善とカリキュラム開発に取り組んでいる。

本校国語科では新聞記事をはじめとする実用的な文章を読むことを通じて、「ことばの力」を育成するとともに、多様な考え方の存在を理解し、社会を取り巻く課題について自ら考え、行動する意識を育てる研究授業を継続的に実施してきた。これまでの実践を総合・発展させた授業実践を通じ、その汎用性について検証したいと考え、本主題を設定した。

### 2 研究のねらい

本校の生徒、特に高校1年生は、知識や情報をそのまま受容して納得・感心するという、素直な生徒が多いが、物事についてより深く考察し、自ら課題を発見し探究できるまでには至っていない。現在の1年生は、総合的な思考力や判断力が問われる大学入学共通テストを初めて受験する学年であり、未だ全容が見えない新テストに向けて、手探りで対策を立てていかなくてはならない。そこで、本校の重点目標を鑑み、国語科のこれまでの取り組みを踏まえつつ、新学習指導要領や共通テストを視野に入れた研究授業を「秋田南 SGH カンファレンス2018」の場で公開した。

今回の研究授業においては、特に平成29年度共通テスト試行調査第1問・第2問の出題のねらいを意識し、複数資料の比較や関連付けを通して的確に情報を読み取る力を育成していくことを考えた。

### 3 本校国語科の先行研究授業の検証

本校はSGH指定に先立ち、秋田県NIE推進協議会認定校(平成25~27年度)としても授業研究・実践をしてきた。以下に本校の先行する実践事例を挙げる。

#### (1) 平成27年度(国際探究Ⅰ※国語総合／現代社会) 日豪EPAをめぐる地方紙の社説比較

この授業は、SGH指定による学校設定教科「国際探究Ⅰ」の教科横断型学習の単元として実施し、第20回NIE秋田大会で公開した。同じ事柄についての地方紙の社説の比較は、地域性や書き手の読者に向ける意識をうかがうことができ、文章自体やデータ・資料の取り上げ方を比較吟味する活動に適合する。この授業はこうした提案でもあった。

#### (2) 平成28年度(国語総合) オバマ・スピーチをめぐる全国紙の社説比較

本校が主催したSGHカンファレンスにおいて、国語総合の研究授業として実施、公開した。全国紙の社説を用いて、同じ事柄について書かれた異なる文章を比較する活動は、NIEではスタンダードな取り組みになりつつあるが、本授業は見出しの違いに着目して二つの社説の主張の違いに気付かせるとともに、言葉や文の持つ意味をより厳密にとらえる姿勢を培うという、国語科としてのアプローチを明確にした取り組みであった。

校内授業参観期間に実施した中学1年生国語の授業である。(本来は中学2年生を対象としているが、実験的に1年生で実施した。)広告を用いて制作者の意図を批判的に読み解くという目標に加え、映像を言語化する活動も盛り込んだ授業である。

本校国語科では、研究授業に際して授業のアイディアを出し、指導案を作成する段階から教科内で協議を重ね、意見を交換している。他の教員の取り組みやアイディアを、作成経緯も含めて共有しているため、普段の授業実践においても各自で適当な事例を選択し、活用することができている。本校では来年度初めて中等部の生徒が高校に進学することもあり、中高の指導の一貫性や発達段階に応じた指導について、いっそう情報の共有や共通理解を進めていきたいと考えている。

## 4 平成30年度授業実践

### (1)「羅生門」の発展学習(国語総合)

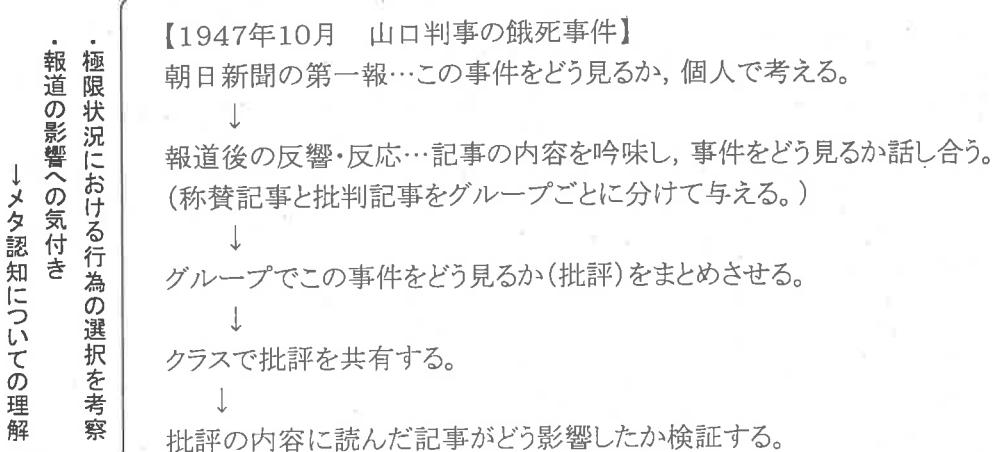
国語総合では、第1回定期考查終了後に単元小説(一)で芥川龍之介「羅生門」の授業を実施した。本文読解後、「善悪の価値観」について考察を深めることをねらいとした発展学習に挑戦した。

下人と同様に極限状態に置かれた人物を取り上げ、複数の資料を読んだうえで、その行為の是非を批評するという活動を通じ、下人の行為また善悪の価値観について考察する機会を設けたいと考えた。そこで、終戦直後の日本において、「人を裁く身で閑米は食べられない」とし、配給食糧だけで生活した東京地裁判事の山口良忠が栄養失調により死亡した事件に関する報道を教材として扱うこととした。

本活動においては、生徒が主体的に考察することをねらいとし、考察を深めるためのメタ認知能力育成も併せて企図した。

- 単元の目標
- 登場人物の心理をおさえ、小説を読み味わう。
  - 比喩や情景描写等の効果的な使い方を理解する。
  - 「善悪の価値観」について考察する。※

授業の展開：通読→初発の感想→内容読解→発展学習※→学習後の感想



グループ協議の際の資料として、各班に恣意的に編集した異なる内容のプリントを配付し、生徒たちにそれと知らせずに読ませるという仕掛けをして、自分自身の考察がどのように行われているのかを意識させようという試みを取り入れた。結果、授業者の意図した通り、各グループの意見が配付したプリントの内容に応じて、判事に肯定的・否定的なものに分かれた。仕掛けの種明かしをすると、ほとんどの生徒が驚き、「怖い」という声も各クラスから複数上がった。

### ■発展学習のワークシート(考察)

- ・情報というものは、何を基準とするかによって、その事件の印象ががらりと変わり、自分の感想・意見にも影響してくると分かりました。だから、一つの情報から内容をとらえるのではなく、複数の情報をを集め、客観的にとらえていく必要があると考えました。
- ・(配付されたプリントが)肯定的な情報か否定的な情報かで意見がきれいに分かれることには驚きました。実生活においてもメディアから与えられる情報にどれだけ影響されているかが分かり、気をつけて情報を見ていくこうと思いました。善と悪の境界は紙一重だと思いました。一つの行動に対して様々な意見があり、人の価値観の多様性を実感しました。
- ・肯定的な反響・反応を読んだ班と否定的な反響・反応を読んだ班では考えに大きな違いが見られた。周りの意見に影響を受けやすいものなんだなと思った。このように簡単に印象操作ができるてしまうのだから、情報を手に入れるときなど、普段から気をつけておくべきだと思う。

### ■生徒の感想

#### 【「羅生門」初発の感想】

- ・私は話を読み進めていくなかで、下人の善悪に対する考え方次々に変わっていくことに驚いた。はじめは主人に解雇され、途方に暮れた下人は自暴自棄に近い感情で盗人になるのも仕方ないと考え、次に老婆の行為を見てその考え方馬鹿馬鹿しかったのだと悟る。私はここで話が終わると思っていたが、最終的に下人は老婆の着物を奪って姿を消す。老婆の話を聞き、“生きるための悪は許される”と感じたからではないだろうか。下人の行動を通じて、人間のエゴがかいま見えた気がして、なんだか胸がやきもきしたが、私たちが向き合うべき姿でもあるように思えた。



#### 【単元学習後の感想】

- ・私は羅生門を初めに読んだとき、自分の善悪の判断力を攪乱させられたように感じた。下人や老婆の行為が悪とも善とも捉えられたからだ。山口判事の事件にせよ羅生門にせよ、あらゆる行為は多面性があり、どの面から見るかによって善悪の判断が異なってくることを学んだ。これから問題に直面したとき、偏見にとらわれず、理屈を伴った判断をすることが必要になるだろう。

#### 【「羅生門」初発の感想】

- ・今まで読んできた話とは全く違い、悪事を犯してしまった主人公が改心するなどというような救いもなく、逆に主人公が悪人へとおちていく内容には、恐怖まで感じた。老婆にせよ、下人にせよ、生きるためとはいえ、盗みを犯すという行為は決して肯定してよいものではないと強く感じた。



#### 【単元学習後の感想】

- ・初めて読んだときは、どんな状況下であれ、罪を犯すことは絶対悪であり、決して許されないと感じた。しかし、この授業を通して、この行為をいろいろな視点から見るとどうだろう。悪事は悪事だ。しかし、自分の命と天秤にかけたとき、どちらを優先してしまうだろう。その瞬間悪事は自分の中で正当性のあるものとなってしまうのではないだろうか。人の行いも、さまざま視点で見ると、大きくその意味が変容してしまうことの恐怖を作品から感じた。

ワークシートの書き方や話合いの進め方について、指示の出し方が明確さを欠いたため、事件について感想を述べるにとどまっていたり、自身の考察をメタ思考をもって振り返るに至らなかつたりする生徒も多くいたが、本授業での経験が、提供された情報自体を吟味するという姿勢を身に付ける一助となり、今後の授業や日常生活の中で発揮されることを期待している。

## (2) 情報と主体的に関わり論理的な批評力を育成する授業の実践

第2回定期考査終了後、単元を独自に設定し、投げ込みで本授業を実施した。今後同様の方法を用いて、教材を入れ替えながら実践していくことも想定して構成した授業である。詳細は指導案のとおりだが、実際は新学習指導要領の文言と大学入試共通テスト試行調査のねらいを踏まえた内容となっている。

〈参考：本単元の指導案と新学習指導要領との対応〉

### 2 単元の目標

- (1) 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりしようとしている。  
（関心・意欲・態度）
- (2) 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすることができる。  
（読む能力）（「C 読むこと」の(1)のエ）



「現代の国語 2 内容〔思考力、判断力、表現力等〕 C 読むこと(1)イ 目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めること。／(2)イ 異なる形式で書かれた複数の文章や、図表等を伴う文章を読み、理解したことや解釈したことなどをまとめて発表したり、他の形式の文章に書き換えたりする活動」

- (3) 連続的テキストと非連続的テキストを関連付けて読む方法を理解することができる。  
（知識・理解）



「現代の国語 2 内容〔知識及び技能〕 (2)ア 主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。／エ 情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。」

### 3 取り上げる教材

教 材：秋田の観光に関する資料

（新聞・パンフレット・ウェブサイト等からの記事抜粋と各種統計資料）



「現代の国語 3 内容の取り扱い(4)ウ(I)情報を活用して、公正かつ適切に判断する能力や創造的精神を養うのに役立つこと。／オ科学的、論理的に物事を捉え考察し、視野を広げるのに役立つこと。／ウ広い視野から国際理解を深め、日本人としての自覚を持ち、国際協調の精神を高めるのに役立つこと。」

### ■ワークシート(3)の1 II

- ・変化（時代・質・量）を見付けやすい。
- ・それぞれの長所・短所・特徴が分かりやすい。
- ・情報量そのものの多少を知ることができる。
- ・書き手の意図（対象・目的）が分かる。
- ・比較することにより多方面（複数の視点）から見ることができる。
- ・情報を組み合わせることで分かることがある。
- ・より客観的に見ることができる。
- ・自分の考えの妥当性が確かめられる。

1時間での資料比較においては、こちらの意図した範囲で変化を読み取ることができていたが、当初全部の班から出でることを想定していた「移動手段として飛行機の記載が加わった」「新幹線での移動時間が短縮された」を挙げる班が実際には少數であった。また、2時間（公開授業）においても、項目自体の有無や情報量の多寡について着眼する班が思ったより少なく、デザインやレイアウトといった表面的な変化に注目する班が多くいた。同一テーマを扱った資料の比較においては、情報自体の有無や数値の変化など、事前に着眼点を提示しておいた方が情報を処理しやすかったかもしれない。

2時間の後半、資料AB間の変化と資料Cの関連を指摘する場面においても、あらかじめ「キーワードを探そう」と指示しておけば、もっと効率良く作業が進められたと思う。（生徒からも、授業後に「指摘する部分って結局みんな同じ言葉になるよね」という言葉が出ていた。）

3時間は1・2時間までの学習をまとめ、一般化しようという試みであった。各班から概ね授業者が意図した答えが出でていたが、考えを言語化し表現する力については個人差が生じていた。

#### ■生徒の自己評価（振り返り）

##### 単元の学習活動振り返り

	1	2	3
① 課題に応じて情報を読み取ることができたか	70.7%	29.2%	0.0%
② 自分の考えをみんなに話すことができたか	46.2%	48.1%	4.7%
③ 他の人の考えを聞き、考えを深めることができたか	83.0%	16.9%	0.0%
④ 資料作成者の意図をとらえることができたか	67.9%	31.1%	0.0%
⑤ 課題について自分の考えをまとめることができたか	66.0%	33.0%	0.0%

1 よくできた 2 まあまあできた 3 あまりできなかった

本単元で目標に挙げた各項目についてはある程度自己評価できているようだが、②「自分の考えをみんなに話すことができたか」のみ際だって評価が低い。今後は表現力や発信力を育成する取り組みにも力を入れていきたい。

#### ■生徒の感想

- ・今回は他のグループの発表を聞いて考えが深まることが多かったです。自分の視野をもっと広げて、（自分）一人でもたくさんの気づきを得られるようにしたいです。
- ・秋田のパンフレット一つでこんなに深く考えることができると思っていたので、とても楽しかった。他県とも比べる活動をしてみたいです。
- ・読み取って言葉にするというのが難しかった。秋田のPRに自分も関わるらしいなと思った。
- ・たくさんの資料をじっくりと読み、感想を持つことで、単に資料の見方だけ無く、自分が作る立場になったときに重要視すべき事、例えば本当に伝えたいことを精査する必要があることなども学ぶことができました。これは今後に生かしていくと思います。
- ・資料から提言することで国語の学習内容を生かすことができてよかったです。
- ・今までこのように資料を深く読み取ることをあまりしたことになかったので、いろいろな気づきを得ていくのが楽しかった。これからは自分でも資料や情報を比較して取捨選択したい。
- ・（授業で用いた資料が）パンフレットの一部だということに最後に気づいて悔しかったです。これからはそのようなことをしっかり見据えていきたいです。

本単元については、授業構想を立てることよりも教材選定に苦労した。生徒が当事者意識を持ち得るテーマで、比較対照がしやすく、かつ表現の根拠となる書き手（制作者）の意図が明らかであるという条件の題材をなかなか見付けられなかつた。「秋田の観光」というテーマに行き着いてからは、せっかく集めた資料をできるだけ使いたいという欲が出て、単元を通して扱う資料の数が多くなってしまった。生徒が何を見ればよいのかと混乱している場面も多々あったので、資料の精選と指示の明確化を心がけた

い。欲を言えば、3時間の授業において、「羅生門」発展学習で触れたメタ認知の視点をもって臨む生徒がもう少し多く出てほしかった。資料として提示された情報は授業者が編集したものであるから、自分たちの出した提言はそれ以外の部分に記載されているのではないか、また別のところで既に実施されているのではないかという発想が話合いの段階であまり出てこなかつたのが残念だった。

## 5 研究成果

### ■授業アンケート結果にみる生徒の変容

**H30授業アンケート6月  
(ABC組国総現文)**

	1	2	3	4	5
質問1－1 学習の目標・見通し	68.6%	29.7%	1.7%	0.0%	
質問1－2 授業者と生徒の双方向性	69.5%	26.3%	2.5%	1.7%	
質問1－3 協働的な学びの機会	62.7%	35.6%	0.8%	0.8%	
質問1－4 知識・技能の活用	42.4%	51.7%	5.9%	0.0%	
質問1－5 新たな興味や問題意識の起り	37.3%	48.3%	13.6%	0.8%	
質問1－6 グローバル・リーダー育成の視点	61.9%	35.6%	2.5%	0.0%	
質問2－1 授業の難易度	4.2%	37.3%	55.9%	2.5%	0.0%
質問2－2 授業の進む速さ	2.6%	16.2%	80.3%	0.9%	0.0%



**H30授業アンケート10月  
(ABC組国総現文)**

	1	2	3	4	5
質問1－1 学習の目標・見通し	77.6%	22.4%	0.0%	0.0%	
質問1－2 授業者と生徒の双方向性	78.5%	19.6%	1.9%	0.0%	
質問1－3 協働的な学びの機会	78.5%	21.5%	0.0%	0.0%	
質問1－4 知識・技能の活用	61.7%	37.4%	0.9%	0.0%	
質問1－5 新たな興味や問題意識の起り	49.5%	43.9%	6.5%	0.0%	
質問1－6 グローバル・リーダー育成の視点	64.5%	34.6%	0.9%	0.0%	
質問2－1 授業の難易度	3.7%	29.0%	67.3%	0.0%	0.0%
質問2－2 授業の進む速さ	2.8%	18.7%	75.7%	2.8%	0.0%

質問1－1～1－6…1:そう思う 2:だいたいそう思う 3:あまりそう思わない 4:そう思わない

質問2－1…1:難しすぎる 2:やや難しい 3:ちょうど良い 4:やや簡単 5:簡単すぎる

質問2－2…1:速すぎる 2:やや速い 3:ちょうど良い 4:やや遅い 5:遅すぎる

※質問1は「授業について」、質問2は「あなたの成長や進路実現という観点で考えて」のカテゴリ

本校では探究部教育研究班の主導により、年2回生徒を対象にした授業アンケートを全教員が実施している。自身の担当する国語総合現代文の3クラスについて、第1回定期考查終了後に実施した6月アンケートと、今回の研究授業終了直後に実施した10月アンケートを比較し、次のような結果を得た。

- ・質問1では全項目で改善が見られた。
- ・質問1－3, 4, 5において改善率が高かった。一方、質問1－6は改善率が低かった。
- ・質問2－2では、授業進度の感じ方が分散していく傾向が見られた。

質問1－4の改善理由については、授業の中で獲得した知識や技能が6月時点に比べて増加し、活用する機会が多くなったことを反映したと考えられる。授業の際に既習事項の振り返りを意識的に行ってきたことも影響しているだろう。

質問1－3が改善したのは、日頃の授業におけるペアワークやグループワークが定着してきたことの表れと考える。

質問1－5は、今回の研究テーマにある「主体的」に関わる設問であり、最も改善したい部分であるが、なかなか効果的な指導ができずにいる。今回数値がやや改善したのは、研究授業で地元秋田の観光という身近な話題を教材に用いたことで、生徒が関心を持って学習に臨むことができたためと考える。今後も興味や問題意識を喚起していくためには、国語の授業時間内に限らず、生徒たちの知的好奇心をうまく刺激する仕掛けを設けていかなければならないと感じている。

質問1－6については、例えば今回の研究授業においてインバウンドの視点まで教材や課題に盛り込めば、国際的な話題を扱ったということでまた異なる数値になっていたと思われる。本校の目指す「グローバルリーダー」は必ずしも外国との交流に長けた人物を想定しているわけではないのだが、そういったイメージから脱却しきれない生徒も多い。「グローバルリーダー」の定義について、ことあるごとに共通理解を図っていくことも必要だろう。

## 6 今後の課題

### ■評価方法

現在は授業内で作成した成果物(文章、ワークシート)を評価したり、考查で発展学習を意識した出題をしたりといった形で評価を行っている。しかし、現時点ではまだ、短答式・選択式問題での評価に依るところが大きい。ゆえに、授業を通じて得た気付きを、生徒が日常生活に落とし込んで考察を深めることができているかどうかの検証があまりできていない。判断力や思考力の変容について、客観的に評価していく方法を確立し、検証していくことが必要である。いずれ生徒の記述を評価することにシフトしていくかなくてはならないと考えてはいるが、教員の負担とのバランスをいかにとるかが問題になってくるだろう。

### ■教材の選定

新学習指導要領を受け、教科書が全面的に改訂されることになるが、実際どのような内容・構成になるか現時点ではまだ見えてこない。このような状況下で新学習指導要領を先行実施するにあたっては、単元の学習目標または教科書と効果的に結び付く、実用的な文章や資料を利用した教材の開発も必要となるだろう。しかし、授業者個人の負担が過度に求められることがあってはならないと今回の研究授業準備を通して痛感した。実際、参観者からも、「自分で挑戦するならば、教材探しが大きな壁だと思います」という感想が寄せられた。いかに効果的な学習方法であっても、継続性や汎用性の低いものは一度きりのイベントで終わってしまう。どの教員も等しく実践できる指導方法を確立・共有していくために、今後ますます教科・学校・地域のチーム力が問われることになるだろう。

## 7 おわりに

本校国語科ではこの数年、新学習指導要領の先取りを意識した研究授業を重ねており、科内では学習目標に応じてこれまでの実践事例をアレンジして実践することが可能となっている。SGH指定校としての課題探究活動に対応した授業の枠組みとして、これからは教科を横断して活用できるよう、さらに研究を重ねていきたいと考えている。

実社会で必要な国語力の育成と同時に、大学進学に際して求められる学力をいかに培っていくか、上述した以外にも様々な課題が山積している。大学入学共通テストで要求されるレベルの課題を解決するには、言語能力に加えて社会経験値や教養の蓄積も必要である。秋田の子どもたちの良い面を生かせるように、さらに研鑽を積み、周囲と協働して課題解決に努めていきたい。

# 第71回全国造形教育研究大会秋田大会 実践発表報告

教諭 深井 裕之

大会テーマ あきた発 新たな美を拓く～わたしを問い合わせ、発信する造形活動～

義務教育を主体とする造形教育の全国研究大会が、平成30年7月30日(月)・31(火)の両日、秋田市の各会場で開催された。近年の大会では校種間連携の観点から高校分科会も設定されており、高教研美術部会の異校種連携担当理事として分科会運営と発表を引き受けた。

分科会テーマは、本大会の性格を考慮して、特に中学校の先生が参加しやすいように「中高一貫教育校」を柱に据えた。実践発表は本校の実践1本で行い、分科会協議では、本校を含む県内の県立中高一貫教育校3校の教員が話題提供を務めた。私も含め、高校生と中学生の両方の授業を受けもっている高校籍の教員である。

実践発表は、「高校美術の内容を中学美術の発展的授業として行ったら」というコンセプトで、当初は、本校中等部3年生を会場校に引率して生の授業を公開する予定だったが、諸事情により、直前になって、高校で行っている元の授業を事例発表することになった。

分科会には全国の小中高大から約二十名の先生、大学生、美術関連企業の担当者が参加し、積極的に協議や情報交換を行った。なお、高校分科会では指導助言者を設定しなかったが、当日は、『全高美工研2014秋田大会』で指導助言を仰いだ武蔵野美術大学の三澤一実教授が飛び入りで参加してくださいり、貴重なご意見と多くのご助言をいただくことができた。

## 実践発表

題材名 「デザイン考察～掃除機ヘンリーが変えたもの～」(高校美術Ⅰ)  
発表者 秋田県立秋田南高等学校・中等部 教諭 深井裕之

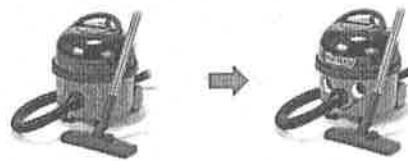
### 1. 発表者から

デザインについて、表面的な意匠のおもしろさではなく、本質の部分を生徒が深く考える機会とするため、あえてかわいい外観をもつ掃除機を考察対象に選んだ。

この掃除機の見た目がかわいいから人気が出たとかたくさん売れたということではなく、この掃除機が、この掃除機を取り巻く人々や状況にどのような影響や変化をもたらしたのかという観点から、「デザインがもつ力」を切り口にして題材を設定した。

確認：掃除機の変化について

[Before] [After]



色や形……目と口と「Henry」の文字がシールで追加されただけです。  
(差別) 元の製品の色や形はそのまま生かされている。  
性能……吸引力、騒音等まったく変化なし。  
製造コスト……シール代とそれを貼る手間程度。  
その他……名前がついた

表面的に色  
や形が変わった  
程度のわずかな変化

[はじめ左の状態で販売され、のちに右側の外観になった]

これは高校美術Ⅰで取り扱っている内容だが、中学3年でも発展題材としても行ったので、中高両方の授業を動画で紹介しながら発表を進めたい。中高どちらでも生徒のまとめの中で、「デザインとは美術による問題解決。」「デザインには生活を豊かにする力がある。」という意味の発言が出てきた。教えた知識としてではなく、生徒同士の学び合いの中から、自らの気付きとして出てきたことは大きいと感じる。

## 2. 協議（参加者の発言より）

- ・美術には正解はないが多様性があり、他者と違う自分に気付けるよさがあるが、それを引き出す生徒同士の活動ができている。教師の適切な声かけや助言が重要だと感じた。
- ・自分も中高一貫教育校。地域の中学校の教師と自分とではデザインへのアプローチのしかたや考え方には差を感じモヤモヤすることがあったが、すっきりした。生徒がデザインは役に立つ、身近なものとしてとらえれるように、本質を考えさせることが大事になると思う。
- ・美術の中で、デザインは実社会につながる要素がある。デザインを専門とする先生が少ないからこそ、デザインの本質についてしっかりと指導できるよう進めていきたい。 等

### 三澤先生による講評的な発言

- ・デザインを専門としたり、デザインの本質や考え方を生徒にわかりやすく指導できる先生が少ないので、絵に文字を入れさせてポスター制作をやりました的な形式的な授業に走るもののがよくある。今回の提示はデザインの意味をきちんと考へる場を設けてから制作に入るという点で意味のある授業になっている。中学生でもここまで深く考えさせることができるので、単発の題材にせず、学んだことを生徒が自分のこととして実感し、自分で気付けるように、あと1時間でいいので、この続きの授業を行って欲しい。

### まとめにかえて

この研究大会のあと、三澤先生の「1時間でもいいので続きをやって欲しい。」という助言を受けて、中等部3年生で、『デザインがもつ力②「私の提案」』という授業を4時間かけて行った。これは、身の回りから、改善・工夫する余地のある「もの」や「こと」を一つ選び、その改善策を一枚のプランシートで視覚的にわかりやすく説明し、プレゼンする授業である。



かなり本格的な授業になってしまったが、これは、生徒に示した以下の目標からわかるように、この題材がデザインの題材であることに加えて、本校SGHの問題解決力育成授業研究で掲げるグローバルリーダー育成のために伸ばす5つの力のうち、「課題設定能力」、「課題探究能力」、「論理的思考力」、「プレゼン能力」の4つに加えて、最も基本的な「課題発見能力」を伸ばすことができると考えたためである。

題材の目標 ①身の回りから不便だと思う「もの」や「こと」を見つけることができる。  
②デザインの力によってどのように解決や改善できるか考へることができる。  
③解決・改善のための具体的なプランを、わかりやすい絵と文で提案できる。

対象の条件 ①専門知識や特殊な加工技術がなくても発想力で実現できるもの。  
→既存の生産技術で、あまりコストをかけないでできるもの。

実施した感想だが、手応えの大きい授業になった。単に外観をいじるだけでなく、本質を理解し、意図やねらいが明確なプランが多く出された。また、プランシート自体のデザインも、情報量の多さよりも視覚的にわかりやすいほうが人に伝わりやすいということに気付いた生徒もいた。1月に行われたSC発表会でも、そのことを意識したようなプレゼンが見られた。中等部生のこの気付きと学びが生きるように、高校での更なる発展的な題材を研究したい。

## **VI. 平成 27~31 年度文部科学省指定 スーパーグローバルハイスクール事業**

## 「秋田南SGHカンファレンス2018」について

探究部SGH班主任 教諭 關 友 明

10月26日(金)、「秋田南SGHカンファレンス2018」と題して、これまでのSGH事業の成果を公開した。指定4年目の最大の成果普及事業と位置付けたもので、午前は本校を会場に、公開授業研究会を実施した。午後からは会場を秋田駅前の公共ホールである「秋田アトリオン音楽ホール」に移し、高2課題研究「国際探究Ⅱ」の公開成果発表会を開催した。

午前は、中高合わせて7つの授業を公開し、複数のメディア情報を基に表現する学習や、タブレット機器を活用した探究活動など、多様な学習活動の在り方を提案した。この公開授業および分科協議会には県内外の教員・教育関係者・連携機関・大学生など106名の方々に来校いただき、本校が進めてきた探究的な学習を取り入れた授業をご覧いただいた。

また、午後の成果発表会では、本校のSGH研究構想『「こまちの里」秋田の高校生が、「地球村」の食糧問題に挑む!』のもと、グローバルな諸課題の解決を目指した研究活動について、高校2年生の代表6グループがプレゼンテーション発表した。発表は、質疑応答や生徒の司会進行も含めて、すべて英語で行った。保護者・他校生徒を含めて168名の方々に来場いただき、本校生徒・教員と合わせて約600名の聴衆を前に発表を行った。

【日時】 平成30年10月26日(金)

【場所】 (午前) 公開授業研究会 秋田南高校・秋田南高校中等部各教室  
(午後) 「国際探究Ⅱ」公開成果発表会 秋田アトリオン音楽ホール

### 【内容】

#### (1) 全体会

挨拶 校長 佐藤 利正  
研究概要説明 探究部教育研究班主任 齊藤 雅子

#### (2) 公開授業研究会

研究主題 高大接続を展望した「主体的・対話的で深い学び」の実践  
～確かな知識・技能を活かした思考力、判断力、表現力を育成するために～

校種	教科・科目	授業者	学年・組	単元名
中	J.E. Communication	志田 裕子 杉山 芙美子	1年3組	めざせ!スピーチの達人!!
高	国語総合 (現代文)	伊藤 史	1年C組	情報と主体的に関わり、論理的に批評する ～秋田の観光に関する考察と提言～
中	社会	門間 裕之	1年1組	世界の諸地域～南アメリカ州～
高	数学Ⅰ	中村 東	1年B組	空間図形への応用
高	生物基礎	平田 哲久	1年D組	神経とホルモンによる調節の仕組み
中	外国語 (英語)	吉澤 孝幸	3年1組	Unit 6 「Striving for a Better World」
高	コミュニケーション英語Ⅰ	伊藤 孝紘	1年F組	Lesson 6 The Story of PlayPumps

#### (3) SGH課題研究 高2「国際探究Ⅱ」公開成果発表会

詳細については、154ページに記載する。

【公開授業研究会 来場者アンケートより】回答数:99

質問1 どの公開授業をご覧になりましたか。

授業	回答数	授業	回答数
① 中1社会	15	⑤ 高1国語総合	9
② 中1J.E.Communication	7	⑥ 高1生物基礎	24
③ 中3英語	14	⑦ 高1コミュニケーション英語 I	14
④ 高1数学 I	16		

質問2 ご覧になった授業で参考になったところはどこですか(複数回答可)

参考になったところ	回答数	①中1 社会	②中1 J.E.	③中3 英語	④高1 数 I	⑤高1 国総	⑥高1 生基	⑦高1 コ英
主体的学び	56	6	3	8	10	5	13	11
協働的学び	57	6	5	6	12	4	17	7
思考力育成	52	11	4	5	6	4	11	11
表現力育成	43	4	7	11	7	4	7	3
知識・技能の活用力育成	24	2	2	4	1	3	6	6
課題設定の工夫	33	8	3	3	2	5	8	4
発問の工夫	22	2	2	4	3	5	6	0
評価の工夫	23	1	1	2	1	4	6	8
言語活動の工夫	37	1	5	7	6	6	8	4
教材の工夫	40	8	1	4	8	2	12	5
学びの深まり・発展	54	5	2	5	8	6	13	15
高大接続を意識した指導	6	1	1	1	1	0	2	0

質問3 今後の教育動向について、どのようなことに関心を持っていますか(複数回答可)

関心のある点	回答数
主体的・対話的で深い学びの授業実践	46
カリキュラムマネジメント	15
社会に開かれた教育課程	7
大学入試改革を含む高大接続改革	21
中高(小中)一貫教育	5
総合的な探究の時間等、探究活動の実践	21
再編・新設される科目の学習指導	7

質問4 今回ご来校いただいたきっかけは何ですか

来校のきっかけ	回答数
本校の案内書面	19
本校のホームページ	7
管理機関からの紹介	5
知人からの紹介	7
公開授業への興味	9
自分の学問や研究のため	8
学校訪問や視察を兼ねて	7
何らかの研究指定校に所属している	5

質問5-1 良かった点・感想などを書きください(自由記述) ※抜粋

- ・[中高英語]対話式で自由に会話させるところが素晴らしい。教室と言うより家庭内での会話の雰囲気があった。先生も素晴らしい。
- ・[中3英語]中学生の意欲的に活動する姿が印象的。今後、秋田南高校でさらに伸ばしていただき、秋田をリードする人材に育ってほしいと思った。
- ・[高1数学・生物]しっかりと生徒どうしで教えあっていて素晴らしい。ICTの活用も効果的だった。
- ・[高1数学]数学の授業で班ごとに教えあいをしている際に「自分ではそのひらめきなへい。」と言っていた。こういった気づきがあることに、数学→SGHのつながりを強く意識した成果だと、感動した。
- ・[授業全般]授業内の各活動に生徒も慣れている印象を受けた。中から高への学びの発展を感じられる展開であった。
- ・[全般]生徒が落ち着いて学ぶことができている。日常の指導が行き届いている。
- ・[全般]PRなども洗練されていてよい。
- ・[全般]進行がスムースだった。

質問5-2 改善すべき点・助言等をお書きください(自由記述) ※抜粋

- ・[中1JE]ディスカッション後の発言はgreatだが、教師の質問にはYesかNoのみだったのが残念だった。
- ・[高1英]グループディスカッションがほとんどで生徒のプレゼン時間が少ない。プリントにも英語で書いてみるべきではないか。
- ・[高1生物]話し合いをしている生徒もいたが、一部あまり参加していないような生徒も見受けられた。
- ・[授業全般]生徒から教師への質問はないのか?たとえどんな小さなことでも質問すると授業も深まる。
- ・[全般]全体会場からの移動が若干わかりづらかった。2年生は午後の発表で難しいのかもしれないが、発表した2年生の授業やSGHを過ごした3年生の授業を見てみたかった。

【「国際探究Ⅱ」公開成果発表会】来場者アンケートより】回答数:40

質問1 本校生徒とのご関係を教えてください。

本校生徒との関係	回答数
保護者・家族	8
来賓	5
SGH連携機関・指導者等	4
県外学校教員	3
県内学校教員	15
その他	5

質問2 発表(研究内容)はどうでしたか。

研究内容	回答数
大変良かった	29
良かった	10
普通	1
あまり良くなかった	0

質問3 発表(プレゼンテーション)はどうでしたか。

プレゼンテーション	回答数
大変良かった	34
良かった	5
普通	1
あまり良くなかった	0

質問4 発表(質疑応答)はどうでしたか。

質疑応答	回答数
大変良かった	23
良かった	11
普通	4
あまり良くなかった	1

- 質問5 発表・質疑応答について、具体的なご感想がありましたら、ご記入ください。(自由記述) ※抜粋
- ・質問も応答もしっかりしていて素晴らしい。日頃から自分の考えを発言することに慣れていることがうかがえる。自分たちの研究をきちんと理解しているからこそその発表、応答なのだろうと感じた。
  - ・長い時間をかけて今日にいたったと感じる素晴らしい発表であった。良い緊張感が感じられた。今日発表されなかつたグループもとても頑張ったのではないかと思う。
  - ・プレゼンスキルがどのチームも高かった(話すスピードやジェスチャーなど)。質疑にも的確に答えられていた点など対応力の高さを感じた(質疑をする南高生もすごい)。
  - ・発表者以外の生徒もしっかりと質問者の話を聞いて反応している姿に感心した。質問に対してその場で答えをまとめて発表できるのが素晴らしいと思った。
  - ・質疑応答もオールイングリッシュで行われており、ほかの生徒も英語技能が高いと感じた。
  - ・プレゼンテーションはどのグループも良く練習されていると思う。課題設定も着眼点も面白いなと思うものがいくつかあった。ただ、会場からの質問でデータ不足(欠如)を指摘されたところもあった。プレゼン技能は上がっているので、今後は研究そのものの向上がより求められるかなと思う。
  - ・実験や観察がなされていて、客観性に基づいた提案ができていて良かった。探究の必要性についてもつと紹介されても良かったと思う。(いかにこの研究が必要なのか)。質問者が回答をもらった後、thank you の後にもう一言あれば発表者のためになるのではないか。いろいろ書きましたが、高校2年生でこれだけの発表ができるのは素晴らしいと思う。
  - ・質問に対し、必ず相談するのはどうかと思う。すぐ答えられるときはすぐ返答する方が自然ではないかと。
  - ・研究の内容は興味深く面白かった。出典が website の URL ばかりだったので出典先の信用性にはやや欠けると思った。もう少し、具体的な名前を明記した方が良いかと。
  - ・何を基にしているのかを明記してほしかった。そのテーマにしたきっかけが薄い。
  - ・生徒一人ひとりが一生懸命で大変感動した。

- 質問6 その他、お気付きの点や改善すべき点などありましたら、ご記入ください。 ※抜粋
- ・進行、受付など、すべて生徒がやっていて良いと思った。
  - ・司会、進行等、会場の運営に携わった生徒さんたちの印象がとてもよかったです。南高生であることに自信をもっている生徒さんが多いなと感じた。
  - ・ヘッドセットを使用された生徒さんが身振り手振りで発表していてとてもよかったです。
  - ・どのグループもフィールド調査(現地調査)を行っていると聞いている。どんなところにいて、その結果がどのようにプレゼンテーションに活用されているのかが分からなかったのが残念だった。
  - ・今後は、どのように結論が導出されたのか、研究の方法(アプローチ方法)を明示すると良いのではと思った。総じて、良い発表の場であったと思う。
  - ・斬新なアイデアもいくつかあり、楽しく拝聴した。質疑応答も臨機応変に英語で回答していて頼もしく思った。英語を通じて世界を知り、社会で活躍してくれることを期待している。
  - ・国や県に研究結果について提言する機会を作ってほしい。



600名を超える聴衆



身振り手振りを交えて発表



成果発表会ポスター

## 国際探究Ⅱ 「公開成果発表会」

教諭 林 克至

【日時】 平成30年10月26日(金) 14:00~

【場所】 秋田アトリオ音楽ホール

### 【目的】

・「国際探究Ⅱ」での探究成果を発表するとともに、参観者との質疑応答を通して探究内容を深める。

### 【内容】

- ・SGH課題研究「国際探究Ⅱ」選択生徒の代表6班が、研究成果を英語で発表し、参観者との英語での質疑応答を通してプレゼンテーション能力と英語コミュニケーション力を高め合う。
- ・発表時間は10分、質疑応答は5分とする。時間超過は審査規準には抵触するが、これまでの成果を発表するという観点から、10分を超えて発表は最後まで行われる。
- ・代表6班以外のグループは、研究内容を英語でまとめたポスターを会場内に掲示する。

### 【参観者】

- ・本校2年生(201名)、1年生(195名)、保護者、本校職員(約50名)
- ・由利高校国際科2年生(32名)、引率者(2名)
- ・湯沢高校(秋田県SGHアソシエイト校)1年生(37名)、引率者(2名)
- ・一般参観者、運営指導委員、教育委員会(計約70名)

### 【評価の規準と評価の観点】

1 テーマ(課題設定能力)	本校の研究構想(『こまちの里』秋田の高校生が、『地球村』の食糧問題に挑む!)に沿って、明確な課題意識をもってテーマに取り組んでいるか。
2 内容(課題探究能力)	課題について基礎的知識をもち、課題解決のために必要な資料・データを適切に用いているか。
3 考察(論理的思考力)	資料・データをもとに論理的に主張を展開し、考察を深めたうえで、結論を導くことができているか。
4 表現(プレゼン能力)	発表の仕方などを含めて、聴衆をひきつけるような発表方法や表現手法の工夫をしているか。
5 態度・応答	時間内に発表し、また、質疑に対して誠実に応答しているか。

### 【審査員】

東北公益文科大学 学長(秋田南高校SGH運営指導委員)	吉 村 昇 氏
聖園学園短期大学 教授(秋田南高校SGH運営指導委員)	五十嵐 隆 文 氏
秋田県立大学生物資源科学部 助教	曾 根 千 晴 氏
秋田県教育委員会高校教育課英語教育推進班 副主幹(兼)班長	下 橋 実 氏
秋田南高校・秋田南高校中等部 校長	佐 藤 利 正

【発表要旨(発表順)】

① Gr- No.11 【優秀賞】

米ぬかで先進国の栄養不足を救う！～米ぬかハンバーグ～  
Rice Bran ~ a solution to malnutrition in developed countries ~

2E 工藤美色 佐藤未夢 原田すみれ 三春凜佳

近年、日本を含めた先進国では、栄養の偏りによる新型栄養失調患者やその予備軍が見られる。私たちは、その解決策として米の大半の栄養が含まれている米ぬかに注目した。分析の結果、米ぬかを食べることで日本人の成人が一日に必要とする最低限の栄養分を補えることが分かった。

そこで、米ぬかを使用したハンバーグをパテとして加工したものを、世界の人々へ届けることを提案する。

② Gr- No. 6

若者の健康問題を間食で解決する  
Tasty treats, Healthy me!!

2D 仙葉遼輔 高橋真優 2E 大山楓子 崔 明俊 中川汐音 畠山みほ

私たちが目指しているのは、誰もが有意義におやつを食べることができる世界である。おやつは世界中で親しまれているものであるが、多くの若者がカロリーを数値としては理解できても、その意味について正しく理解できていないことに問題があると考えた。

私たちはその解決策として、販売商品のカロリーを均一にした自動販売機の設置を提案する。自動販売機で扱う商品を工夫することで、健康への意識を促すことができると考える。おやつの時間をカロリーに対する正しい知識を身に付ける機会を提供したい。

③ Gr- No. 9 【最優秀賞】

雪下野菜で世界の雪国の農業収入を上げる  
Snow Vegetable Project ~ increase the agricultural income in snowy countries with snow vegetable ~

2E 菊池風花 白渡萌々子 畠澤英恵 和田彩那

私たちは雪下野菜を広めるていくことで、雪国の冬の農業収入を上げることを目的とした「Snow Vegetable Project」を提案します。雪下野菜は農地を拡大する必要がないために、環境を大きく変えることなく野菜を栽培できることや、雪下では長期的な保存が可能であるため、市場の様子に応じて出荷量を調整できるといった利点があります。

私たちはこの農業方法を他国に広めるためにワークショップを実施することや、効率的な販売のために都市近郊と地方とで売り分けを行うこと、また、商品価値を高めるために雪下野菜をブランド化することを提案します。

④ Gr- No. 8

シジミで水質浄化

Fresh water clams:improving water quality

2D 大野滉史 佐藤雪菜 畠山倫和 2E 小林芽以

世界各地の湖では、アオコで汚染された水が人や食糧となる家畜に危害を及ぼしている。私たちはアオコの被害を受けていいる例として、地元の八郎湖の水質に着目し、そこから採取した水を用いて実験を行った結果、シジミに水の浄化作用があり、シジミの種類によって浄化能力に差があることが分かった。

しかし、シジミを用いた浄化方法は、湖の環境や他の生物へ影響を与えるなどの課題がある。本研究では、先行研究に基づいた課題解決を提案したい。

⑤ Gr- No. 3

おやつで野菜を食べる習慣をつけて、野菜嫌いをなくす

Adding Vegetables to "OYATSU"

2D 浅利玲奈 鎌田美羽 佐々木風菜 佐藤妃奈乃 2E 斎藤若葉

現代人の死亡率第1位は、いわゆる生活習慣病であり、国際的にも問題となっている。また、ほとんどの家庭では間食が本来の目的を果たしていない。

私たちは幼少期から野菜を食べる習慣を身に付けさせるため、おやつとして野菜を摂取してもらうことが問題解決につながると考えた。

子どもの野菜嫌い克服のため、さらには健康増進のためにも、3段階の方法で調理したおやつとしての野菜を間食で摂取することを提案したい。

⑥ Gr- No. 7 【第三位】

オーストラリアの海をワカメから守れ！

Protect the Australian Sea from Threat of Wakame

2D 石黒千愛 長谷川この 2E 朝香真鈴 中泉咲良 平泉李雪

近年、オーストラリアの海ではワカメの大量繁殖により漁業が被害を受けていいる。そのため、本研究では問題解決策として、ワカメの新しい活用方法を提案する。日本のワカメは食用のイメージがあるが、オーストラリアのワカメは様々な原因によって食用ではないことが分かった。

私たちは、食用には用いられないワカメを「重金属吸着剤」と「バイオマス燃料」として活用することを提案したい。

## 【事業を振り返って】

今回の発表会では以前から交流のある由利高校国際科に加え、今春より秋田県SGHアソシエイト校の指定を受けている湯沢高校の1年生有志にも参加をいただいた。また、新たな挑戦として、英語での質疑応答時のコーディネートを含めた司会と進行を本校生徒に任せた。

各班とも選抜班の名に相応しく、これまで積み重ねてきた探究内容を発表し、また、発表後の質疑応答でも丁寧に受け答えをする姿が見られました。これまで公開成果発表会を参観してくださってきた運営指導委員の方からは「毎年、今回の発表がこれまで最高だと思える」との評価をいただきました。

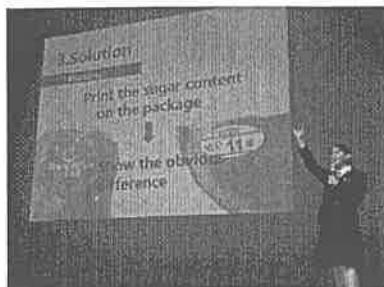
実施後のアンケート結果は「質問も応答もしっかりしていて素晴らしい」「日頃から自分の考えを発することに慣れていることがうかがえる」「自分たちの研究をきちんと理解しているからこそその発表や応答なのだろうと感じた」など生徒の取組を肯定的に評価したものが多かったが、「提案が先行研究の紹介にとどまっていたのが惜しい」「質問に対し、必ず班員が相談するはどうかと思う」などの指摘も見られた。今後の探究や発表への改善点として、なお、最優秀賞の9班と優秀賞11班は、それぞれSGH甲子園(兵庫県)とSGH全国高校生フォーラム(東京都)に参加してポスター発表を、また、第三位の7班は、東北地区SGH課題研究発表フォーラム(宮城県)に参加して口頭発表を行う。

## 【生徒の振り返りから】

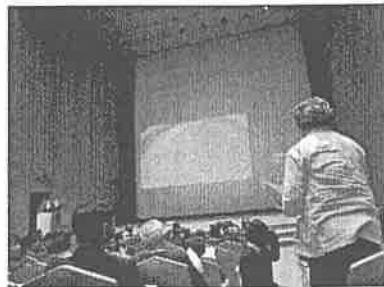
- ・これまで一番のパフォーマンスができた。多くの方々から評価していただいたので、嬉しかった。
- ・アトリオンは思っていたよりも狭く、後方の席からでも発表者の表情が見えやすかった。プレゼンでは発表者の表情が大切だと思った。特に班によって、発表を終えた人の姿勢や表情に格差があった。ステージ上では「常に見られている」という気持ちが大切だと思った。
- ・探究活動を通じて、現状を深く知ろうとする姿勢が身に付いたと思います。国探は食糧問題がメインテーマですが、世界の問題について前よりも興味を持つようになりました。また、テレビを見ていても、「これは～とは限らないのではないか？」など一人で考えるようになったと思います。
- ・どの班の発表もとても面白かったです。この前同じ部屋だった班の発表は、あらすじが分かっていたので、自分なりに考えながら見ることができました。昨年は英語力の乏しさもあって、発表内容がよく分からなかった箇所がありましたが、今年は言ってることが理解できたので、嬉しかったです。
- ・時間超過を心配していたが、無事に時間内に発表できた。他の班の発表を初めてじっくりと参観したような気がする。どの班も発表のクオリティが高くて驚いた。去年と比べて質問をする人が多かった。私たちの班の内容は質問しにくいと思っていたが、1年生が2人も質問してくれて、嬉しく思った。
- ・観客席で6つの班の発表を聴いて、とても感動しました。質問をしたかったので、聴くことに集中して様々なことを考えていたのですが、質問したい内容を上手く英語に変換できず、挙手することができなくて悔しい思いをしました。終了後に発表した班のみんながそれぞれの頑張りを讃え合っていて、これまでの努力が実を結んだ瞬間だなと感じました。



司会進行と質疑応答の  
コーディネートを担当した生徒



最優秀賞に選ばれた  
9班の生徒の発表



他校の英語の先生からの  
質疑応答の様子

# 国際探究Ⅰ 「今年度の修正点と事後検証」

教諭 戸坂圭子

## 1 指導体制

### (1)概要

昨年度同様、一年生全員が「国際探究Ⅰ」を履修した。指導には各クラスの担任、副担任があり、海外フィールドワークに参加した生徒の指導は学年主任が行い、学年担当職員全員で指導にあたった。

### (2)夏休み個人探究レポート

グループ探究に入る前に夏休みの宿題としてレポートを課した。夏休み明けにレポート発表会を行うこととしたこともあり、真剣に取り組む生徒が多く、それぞれが食糧問題に対する意識を強く持って独自の主張を提案したレポートが数多く見られた。レポート発表会はクラスごとに実施し、個人の探究内容をもとにグループを編成することにもつながった。

### (3)グループ別探究活動

夏休みに探究したテーマをもとにクラス内でグループを編成した。人間関係を新たに構築する必要がなかった分、探究活動に集中して取り組んだように感じた。また、おもに指導にあたった担任や副担任にとって、「国際探究Ⅰ」の指導で生徒の興味の方向や探究に向かう姿勢などが分かり、生徒理解に役立った。

### (4)クラス発表会(代表選考会)

中間発表を兼ねて成果発表交流会の午後の部で発表する生徒を各クラスから選出するための発表会を行った。海外フィールドワークに参加した5班からも2班を選出することとした。冬休み明け2週間後にこの発表会を設定したので、各班とも探究内容をいかに分かりやすくまとめて発表するか工夫しながら計画的に活動に取り組んでいた。学年全体が中間発表を目標に盛り上がりを見せていた。

### (5)成果発表交流会(午前の部)

代表班に選ばれなかつた班をグループに分け、クラスをまたいだ発表会を行つた。他のクラスの前で発表することや「国際探究Ⅱ」を履修している先輩方がアドバイザーとして参観することなどが最後まで活動への意欲を喚起することにつながったと感じる。質疑応答も活発で、自分の活動を振り返るよい活動となつた。

## 2 生徒の主体性を促す活動

### (1)成果発表交流会での司会・進行

「国際探究Ⅱ」の公開成果発表会で2年生が司会を行つてゐる姿を見ていた1年生は非常に積極的に会の運営に参加した。司会、計時、質疑応答時のマイクの受け渡しなど、前期の講座等でも役割分担を行つてゐることもあり、生徒はスムーズに活動していた。先輩や他生徒の頑張りを目にすることが生徒の成長を大きく促すと感じ、今後も生徒の主体性を育んでいけると強く思った。

### (2)成果発表交流会での質疑応答

代表班だけが主役ではないとの意識を持たせ、午後の部に臨むように指導した。当日は午前の部で2年生が適切に助言をし、改善点などを提案している姿を見ていたことが午後の部の質疑応答へつながり、生徒は非常に活発に意見交換をしていた。代表班も冷静に応答し、活動の深まりを聴衆に伝えるような応答が多かつた。

## 国際探究Ⅱ 「今年度の修正点と事後検証」

教諭 林 克至

### 1 指導体制

#### (1) 概要

昨年度の「国際探究Ⅱ」の選択者は、1クラス38名であったが、今年度は2クラス70名での活動となつた。選択者が増加した背景には、上級生のSGH活動の成果や探究に向かう姿勢などに刺激を受けたことや、生徒自身が昨年の「国際探究Ⅰ」で相応の経験や達成感を得たことが挙げられる。

70名の生徒に対して、学年の主担当1名と、班担当8名の計9名で指導を行つた。班担当は1人当たり2班程度を受け持ち、県立大担当者と生徒の橋渡しを行い、各班を見守りながらも、状況に応じて適切な助言をする役割を担つた。班担当不在時は学年の主担当が代わりを務めた。

また、本校で導入しているClassiに、班担当と県立大担当者を含めたグループを班ごとに作成し、Classi上でデータを共有できる環境を整えた。班によっては利用頻度に温度差が見られるものの、夏季休業中のフィールドワークの準備では各班とも効果的に利用していた。

#### (2) 国探合宿の実施

今年度は校内成果発表に向け、1泊2日の合宿を企画した。各班には事前に合宿後の具体的な到達目標を設定させ、それを確認する「ミニ発表会」の場を設けた。なお、部活動等で終日参加ができない生徒が多い班には、あらかじめ班としての役割分担を指示することで対応した。

発表日が間近に迫っていたことでもあって、どの班も精力的に発表資料や原稿の作成に取り組む様子が窺えた。夜遅くまでの協議やパソコン室での長時間の作業、また、「ミニ発表会」での自省を通して、探究内容や発表の質を向上させた班が多く見られた。

### 2 生徒の主体性を促す活動

#### (1) 公開成果発表会での司会・進行

今年度の公開成果発表会では新たな取組として、総合司会を男子生徒1名、また、各班発表の進行を女子生徒2名に依頼し、おおまかな原稿を作成するように伝えた。本会は発表の進行だけでなく、質疑応答でのコーディネートも英語で行うため、臨機応変な英語の能力が求められる。

2名の女子生徒は、前日まで職員と活発な意見交換を促すためのフレーズの確認や、質問者の発言を端的にまとめる練習を繰り返して当日に臨み、また、総合司会を務めた男子生徒の開会の言葉や司会ぶりも、生徒たちがこの日のために準備を重ねてきたことを印象づけるものであった。

#### (2) 各種外部大会への参加

今年度は新たに、12月に県立大曲農業高校から「SPH発表会」、また、2月にアキタエイジラボから「高校生と語るSDGs」にて秋田駅内の商業ビルでのポスター発表の依頼があつたが、両会とも参加の呼びかけに即決で立候補する姿勢が見られた。企画によって使用言語や発表時間などが異なるが、その対応や準備もほとんど苦にすること無く、班によっては発表後の指摘をフィードバックする姿勢も見られている。

来年度に実施される「グローバル・イシュー」に向けて、中核となる生徒が着実に育ってきており、生徒への頼もしさと事業の成果を感じている。

# グローバル・イシュー「今年度の修正点と事後検証」

教諭 深沢志保

## 1 実践・発信活動「グローカル・ミーティング」

地域社会に出向き、食糧問題解決の具体的提案の発信・提案と意見交換を行ったが、その時期を昨年度より早めることができた。意見交換で得られたアドバイス等を反映させ、研究をより深めるためにも、夏休み前に行うことが効果的と考え、少々無理を承知の上で先方に相談をし、実現させることができた。

「グローカル・ミーティング in 秋田市役所」では、市企画調整課の担当者の方に班と市職員のマッチングをしていただき、4班が発表、それ以外の生徒も意見交換に参加したが、それぞれのテーマに合わせて専門的な見地から助言をいただくことができた。昨年度は日程の都合で実施できなかった「グローカル・ミーティング in JA」を実施することができ、秋田県農協青年組織協議会役員の方々と交流して、助言をいただいただけでなく、農業における現状も教えていただき、非常に貴重な機会となった。「グローカル・ミーティング in 秋田南高校」でも、7名の企業経営者の方を講師にお迎えし、7班それぞれを1人の方に担当していただくことができた。市役所やJAでのミーティングとはさらに違う視点からの知見を得ることができ、生徒には大きな刺激となった。9月の論文完成に向けて、夏休み中にすべきことが明確となり、役割分担等も含めてさらに研究が進む良いきっかけとなった。

## 2 研究論文

今年度の実践活動で得られた知見をもとに、昨年度の研究内容をブラッシュアップさせ、論文にまとめた。外部への発信・交流を夏休み前に実施することができたため、早めに研究内容の修正点や課題を見つけ、内容について深めることができた。指導にあたっては、1名の教員が1～2班を担当し、本校で導入している「Classi」という教育支援クラウドサービスを利用しながら、データを共有することでスムーズな指導ができた。

## 3 自発的な実践活動と外部での発表

各グループの自主的な実践活動が目立った。特に、家庭からの食品ロスの削減をテーマとしていた1班が、自主的に「オーガニックフェスタ」にてボランティア活動をしたのだが、その際、会場にて自分たちの取組について披露する機会をいただいた。それが当日会場に取材に来ていたABS秋田放送ラジオのスタッフの方の目に留まり、取材を受けて2つの番組に出演させていただいた。番組の中で、生徒たちは、研究の中で掲げていた家庭からの食品ロス削減に向けた発信を行うことができた。また、市役所でのグローカル・ミーティングがきっかけで、市庁舎にポスターを掲示させていただく機会を得た。その後、こうした発信活動が県職員の方の目に留まり、消費者庁が主催する全国規模のシンポジウム「エシカル・ラボ」での発表依頼をいただいた。このシンポジウムでは、参加した市民の方々へ研究を発信することができたほか、消費者庁や県庁のウェブサイトでも研究成果を掲載していただくことができた。

このように生徒の取組や活動が、多くの方の関心を呼び、多様な発信の機会を得ることができたのは、今年度の最大の特色である。

## 編 集 後 記

本校は、平成27年度から文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、平成28年度と今年度平成30年度に、全国に向けて公開研究会を提案してきました。

SGH事業の核心である課題研究活動は、「『こまちの里』秋田の高校生が、『地球村』の食糧問題に挑む」というテーマで取り組んできました。

中等部に所属する私は、中等部の生徒と共にこの三年間、「国際探究、公開成果発表会」を校内で聞くことができました。そこには「ふるさと秋田」をしっかりと見つめる高校生の姿がありました。「秋田の農と食」を切り口に、そこから秋田の課題をとらえ、日本の課題、世界の課題へと結びつけて思考し、解決策を提案していく姿に、まさに本校が目指すグローバルリーダーの資質を見ることができたように思います。

そんな高校生の姿に中等部の生徒は大きな憧れをもつと共に、自分たちも先輩たちのような姿になれるよう意欲をもって学ぼうとする姿が見られました。そして、私たち中等部職員は、中高一貫教育校として、六年間の学びを視野に入れた中等部での学びをデザインしていく上での大きなヒントを頂いたように思っています。

SGH事業の両輪として、本校はグローバルリーダー育成のための授業研究も推進してきました。中高一貫教育校としてスタートした平成28年度の公開研究会では、生徒の「基本的知識・技能」「探究力」「協働力」を高める問題解決力を育成する授業の考案と実践に努め、アクティブラーニングの積極的な実践を進めてきました。中等部職員と高校の教員とのTT（チームティーチング）による授業も行われました。教科の壁を越え、校種の壁を超えての授業研究は、教員として発見することが多くあったと思っています。

今年度の公開研究会のテーマは、「高大接続を展望した『主体的・対話的で深い学び』の実践～確かな知識・技能を活かした思考力、判断力、表現力を育成するために～」とし、探究的な学びを取り入れた授業をそれぞれの教科で提案しました。私は授業者として、中等部一年生と共に教室で学びの時間を共有できました。生徒一人一人の生き生きとした表情、目の輝きが今でも心に残っています。授業後の研究会では、様々な校種の教員との協議会の場が設定され、充実した時間となりました。

午後からは、場所を秋田市「アトリオ」に移動し、高校生が、「世界の食糧問題」について考察し、その解決策を全て英語でプレゼンテーションしました。自信をもって思いを伝える一生懸命な姿に感動を覚えました。

平成30年度研究集録ができました。チーム秋田南高校・中等部の取り組みが、この一冊に詰まっています。中高一貫教育校としてスタートして三年になりました。本校だからこそできる授業が、学びのスタイルが、少しづつ積み重ねられていると確信しています。

最後になりましたが御多忙の中、玉稿をお寄せくださった諸先生方に心から感謝申し上げます。

平成31年3月 探究部教育研究班 志田裕子 記

平成30年度 研修集録45

発行日 平成31年3月22日

発行者 秋田県立秋田南高等学校

秋田県立秋田南高等学校中等部

〒010-1437 秋田市仁井田緑町4番1号

TEL 018-833-7431

FAX 018-833-7432